松本市文化財調査報告No.194

長野県松本市

TAKABATAKE

高畑遺跡

第2・3・4・5次

—発掘調査報告書—

信州大学附属図書館
定期刊行物

2008.3

松本市教育委員会

長野県松本市

TAKABATAKE

高畑遺跡

第2・3・4・5次

—発掘調査報告書—

2008.3

松本市教育委員会

序

高畑遺跡は松本市の南部、芳川村井地区に広がる遺跡です。本遺跡は以前から埋蔵文化財として知られていました。今回当該地に市道5513号線付け替え工事及びこれに伴う既存施設の移転工事が計画されたため、松本市が埋蔵文化財を記録保存する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は平成15年4月24日から平成17年9月22日にかけて行われました。約2年という長きにわたる調査となりましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、奈良・平安時代から鎌倉時代の集落の跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思います。

緊急発掘調査は近年開発事業が増加する中で、遺跡を記録保存する目的で行う調査です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えています。そのため松本市では市街地の開発にあたって現市街のもととなった遺跡の発掘調査に力を入れております。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

松本市教育委員会

教育長　伊　藤　　光

例　言

1　本書は平成15年４月24日～17年９月22日に実施された、松本市大字芳川村井町928-2番他に所在する高畑遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は市道5513号線付け替え及び既存施設移転工事に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。

3　本書の執筆は、６章１節：竹内靖長、直井雅尚　６章２節：宮島義和　その他を小山貴広が行った。

4　本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子
土器接合：竹平悦子、中澤温子
土器実測、トレース：白鳥文彦、竹内直美
金属器実測、トレース：洞澤文江
遺構図調整、トレース：村山牧枝
遺物写真：宮嶋洋一
総括・編集：小山貴広

5　本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。
第○号住居址→○住、竪穴状遺構→竪○、掘立柱建物址→建○、第○号溝→溝○、第○号土坑→土○、第○号ピット→Ｐ○

6　本書では以下のものをスクリーントーンで表した。

貼り床範囲…　　炭・焼土集中範囲…

焼土範囲……　　炭化物範囲……

7　出土した遺物については調査次に関わらず第６章に集約して掲載している。

8　本調査で得られた出土資料及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1　TEL 0263-86-4710　FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目　次

序
例　言
目　次

第1章　調査の経緯
1節　調査に至る経緯 …… 1
2節　調査体制 …… 1
3節　地理的環境 …… 3
4節　歴史的環境 …… 5

第2章　高畑遺跡　第2次調査
1節　調査概要 …… 7
2節　調査成果 …… 7
3節　検出遺構 …… 9

第3章　高畑遺跡　第3次調査
1節　調査概要 …… 15
2節　調査成果 …… 15
3節　検出遺構 …… 17

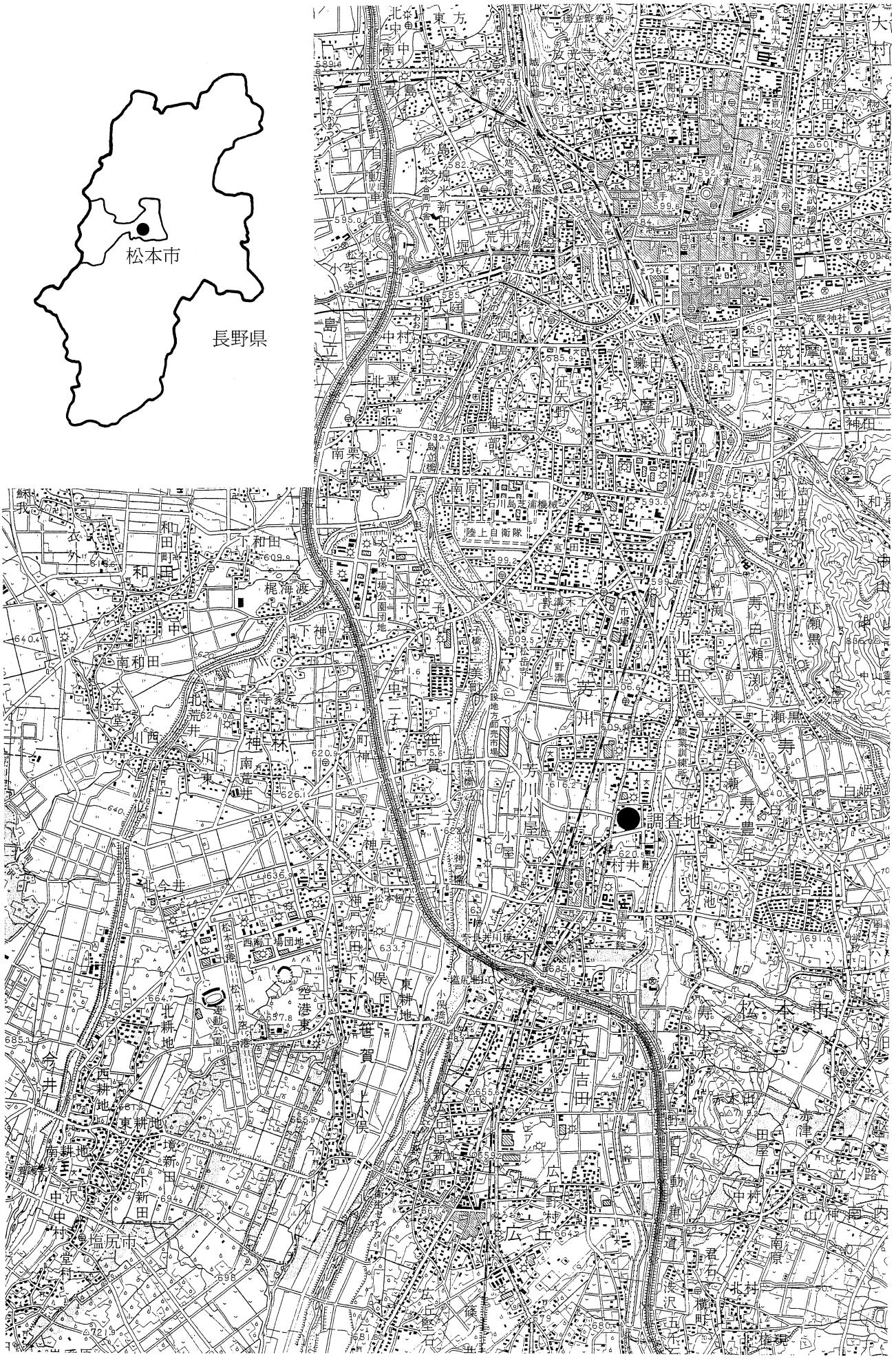
第4章　高畑遺跡　第4次調査
1節　調査概要 …… 37
2節　調査成果 …… 37
3節　検出遺構 …… 39

第5章　高畑遺跡　第5次調査
1節　調査成果 …… 51

第6章　出土遺物
1節　土器・陶磁器・土製品 …… 53
2節　鉄器 …… 63

第7章　調査のまとめ
1節　総括 …… 72

写真図版



第１図　　調査位置図

第１章　調査の経緯

１節　調査に至る経緯

今回、長野県松本市大字芳川村井町928-2番他において、市道5513号線付け替え工事及び既存施設移転工事が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である高畑遺跡に該当しており、工事により予定地内の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。そこで松本市教育委員会で試掘確認調査を行ったところ、予定地内の埋蔵文化財は良好に残されていることが判明したため、協議のうえ事前に発掘調査を実施して記録による遺跡の保存を図ることとした。発掘調査は松本市教育委員会が行った。

文化財保護法第57条の３第１項に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書は、平成15年４月21日付で長野県教育委員会宛てに提出された。

現地での発掘調査は平成15年４月24日～17年５月31日にかけて行った。また、平成17年９月21・21日に第５次調査を行った。発掘調査終了報告書は第４次調査終了後、平成17年６月１日付で長野県教育委員会宛に提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出した。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において松本市教育委員会が行った。

２節　調査体制

調査団長：竹淵公章（松本市教育長、～平成18年３月）、伊藤光（平成18年４月～）

調査担当者：和田和哉（文化課主任：H15年度山形村との交換派遣）、菊池保夫（文化財保護課主任、～平成17年３月）、朝倉一樹（文化財課主任、平成17年４月～18年３月）、山本紀之（嘱託、～平成16年３月）、菊池直哉（嘱託、～平成17年３月）、小山貴広（嘱託）

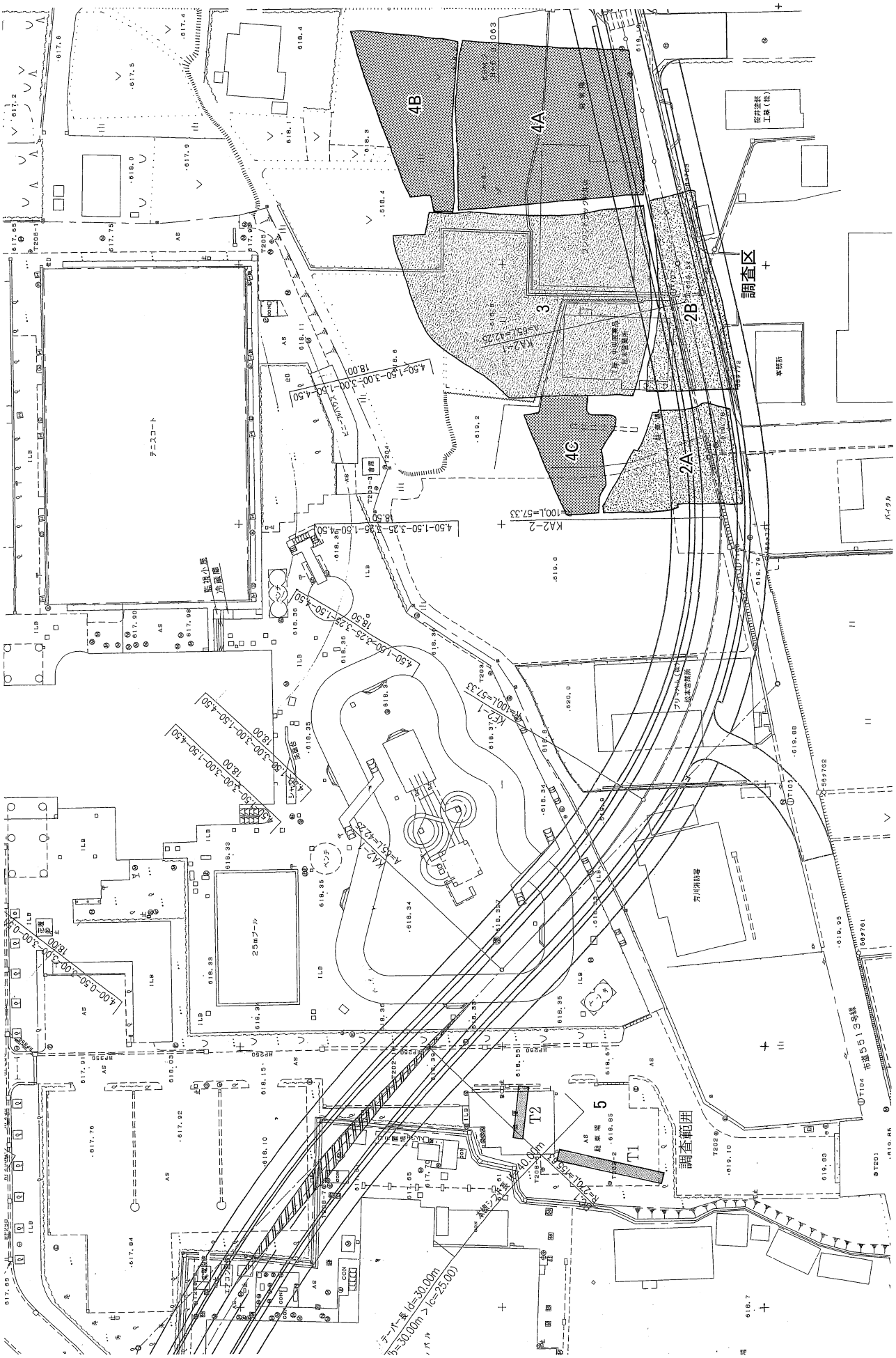
調　査　員：今村克、森義直、望月映

協　力　者：浅輪敬二、荒井留美子、荒木稔、飯田三男、五十嵐周子、井口方宏、石合英子、石井脩二、石川光男、伊集院昌吾、市川二三夫、今井太成、入山正男、内澤紀代子、海老原千津子、大月八十喜、大和槙、翁像薫、上條信彦、上條道代、川崎勝英、久根下三枝子、久保田登子、小林芳朗、小松栄一、小松正子、笹井トキ子、澤柳博、清水陽子、清水洋輔、下條ちか子、白鳥文彦、鈴木幸子、高桑俊孝、高橋登喜雄、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、寺島実、兎川國明、中上昇一、中川佳子、中澤温子、中村恵子、中山自子、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞澤文江、待井敏夫、松山あずさ、丸山喜和子、丸山惠子、三澤栄子、道浦久美子、蓑島菜奈、宮嶋洋一、三代沢二三恵、三代沢宗俊、村山牧枝、甕國成、本木修次、百瀬忠幸、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、八板千佳、山崎照友、山崎春隆、横山清、米山禎興、渡辺順子

事　務　局：

松本市教育委員会　教育部　文化財課（～平成16年６月文化財課、平成16年７月～17年３月文化財保護課、平成17年４月～文化財課）

有賀一誠（課長、～平成16年３月）、池田英俊（課長、平成16年４月～17年３月）、宮島吉秀（課長、平成17年４月～）、熊谷康治（課長補佐、～平成18年３月）、横山泰基（係長、平成18年４月～）、直井雅尚（主査）、久保田剛（主任、～平成16年３月）、小山高志（主事、～平成18年３月）、渡邊陽子（嘱託、～平成18年３月）、花村かほり（嘱託、平成17年４月～19年３月）、柳澤希歩（嘱託、平成19年４月～）



第２図　　調査区配置図

3節　地理的環境

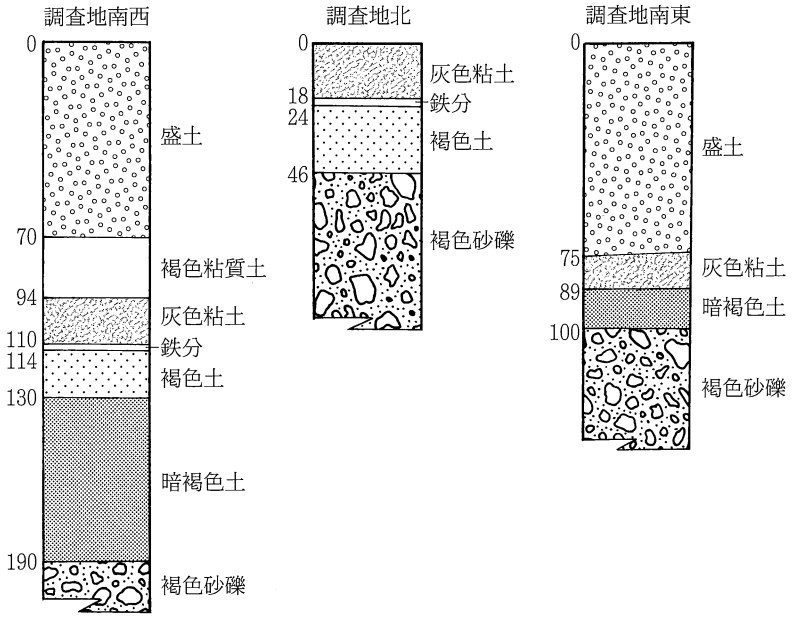
高畑遺跡のある芳川地区は松本市の南端にあたり、東に田川、西に奈良井川と大きな河川に挟まれた平地である。このような芳川地区の南東、田川のほとりに位置するのが高畑遺跡であり、今回はその南部にあたる場所で調査を行った。調査地は標高619m前後の平坦面に存しており、遺跡の東を流れる田川からわずか250m程しか離れていない位置にあたる。高畑という地名が示す通り周囲より一段高くなっており、田川現河床との間には旧河床による窪地がみられる。

田川は現在では堤防によって護岸されているが、かつては水量が乏しく小流に過ぎなかった。河床面と周囲の面との比高差はほとんどなく、現在でも天井川となっている。このような状況であるため当然洪水とは無関係ではなかったと思われ、本遺跡でも氾濫の痕跡が多数認められる。田川の洪積層は硬質砂岩、安山岩、ヒン岩、チャート、頁岩、石英閃緑岩などの細・中礫を多量に含み、鉄分やマンガンで汚染されているという特徴がみられるが、これらの礫を含んだ砂礫層が調査区全域に渡ってみられた。このような洪積層は近接する小原遺跡（平成1・4年調査）や平田本郷遺跡（平成4・6・9年調査）でも確認されており、周辺一帯に広く堆積していたことが窺える。ただし、両遺跡でみられた調査地西方約1500mに流れる奈良井川の洪積層は本遺跡ではみられなかった。

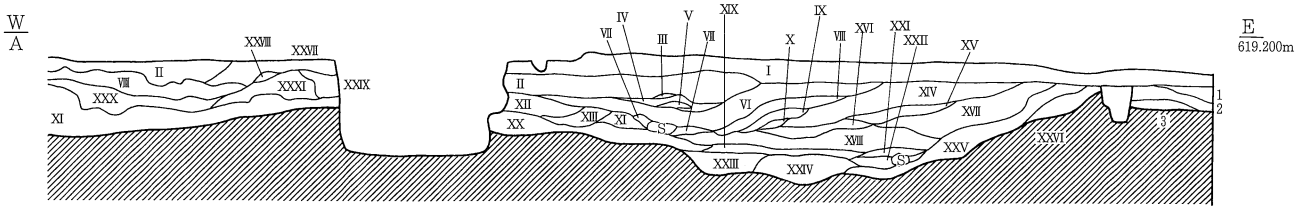
調査面では大別して褐色砂礫層、褐色土層、黒色土層がみられる。褐色土層は褐色砂礫層範囲の中に島状にみられるため、氾濫により押し出された砂礫層からふるいだされて堆積したものであると考えられる。黒色土層は褐色砂礫層の上層に堆積している沖積層である。断面は流路のように窪んであるが、ほぼ単一層で堆積しているため氾濫に由来する沖積層であると思われる。この黒色土層はN-8°-Wの方向で弓なりに反っており、蛇行しながら押し出されていった様子が窺える。

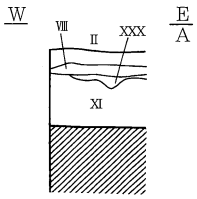
今回検出された遺構の多くはこのような氾濫層の上層にみられるが、一部砂礫層下にみられる遺構も存在している。そのためこのような氾濫は集落存続中にも幾度か起こったものであると判断されるであろう。

また、調査地西方には南北に縦断する自然流路がみられた。自然流路は幅5～8m程ありN-10°-Eに振れている。覆土は砂質土と粘質土が幾層か重なり合っており、長期間の流れを想定することができる。これを示すように自然流路の覆土中及び上面にはほとんど遺構はみられず、第2次調査溝1がこの自然流路に流れ込むように融合しているため、この流路は集落と同時期に存在していた可能性が高く用水等何らかの形で利用されていた可能性も考えられるであろう。



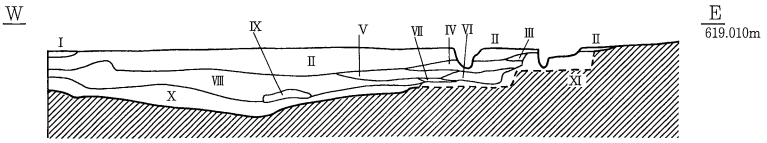
2A 自然流路北トレンチ北壁





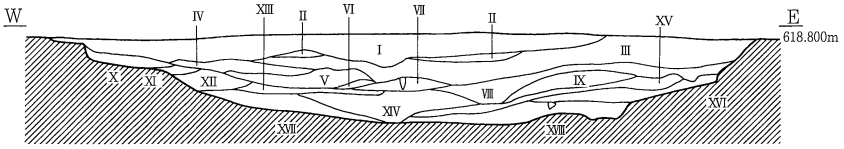
Ⅰ：灰黄褐色土（φ１～３㎝礫少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土（φ１㎝礫・炭少量）
Ⅲ：灰黄褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫含）
Ⅳ：灰黄褐色砂質土（鉄分含）
Ⅴ：灰黄褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫・炭少量）
Ⅵ：黒褐色粘質土（φ１～２㎝礫含）
Ⅶ：褐灰色土（φ１～30㎝礫含）
Ⅷ：黒褐色土（φ0.5～３㎝礫多量）
Ⅸ：暗褐色砂質土（炭・焼土塊・砂岩剥片礫多量）
Ⅹ：黒褐色土
XI：灰黄褐色砂質土（φ１～15㎝礫含）
XII：灰黄褐色土（φ0.5～１㎝礫少量）
XIII：黒褐色土（φ0.5～１㎝礫含）
XIV：黒褐色粘質土（φ１～３㎝礫含）
XV：灰黄褐色粘質土（φ0.5～１㎝礫・鉄分含）
XVI：褐灰色土（φ１～２㎝礫多量）
XVII：黒褐色粘質土（φ２～３㎝礫含）
XVIII：黒褐色砂質土（φ0.5～３㎝礫・鉄分多量）
XIX：暗褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫含）
XX：褐灰色砂質土（φ１～３㎝礫多量）
XXI：暗灰黄色土
XXII：褐色砂質土（φ１～２㎝礫多量）
XXIII：黒褐色砂質土（φ0.5～３㎝礫含、鉄分多量）
XXIV：黄褐色砂質土
XXV：暗褐色土（φ１～５㎝礫多量）
XXVI：暗褐色土（φ0.5～１㎝礫少量）
XXVII：暗褐色土（φ0.5～１㎝礫・炭含）
XXVIII：黒褐色土（φ１～３㎝礫含）
XXIX：暗褐色土（φ0.5～１㎝礫含）
XXX：黒褐色土（φ0.5～１㎝礫含）
XXXI：暗褐色土（φ0.5～３㎝礫多量）
4住１：暗褐色土（炭少量）
２：黒褐色土（褐色土塊・φ１～２㎝礫・炭含）
３：黒褐色土（炭・焼土塊・砂岩剥片礫多量）
P194

2A 自然流路南トレンチ南壁



Ⅰ：褐色砂質土
Ⅱ：黒褐色砂質土（炭少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5㎝礫含）
Ⅳ：黒褐色粘質土
Ⅴ：灰黄褐色土（鉄分含）
Ⅵ：褐灰色土（φ２～３㎝礫・黄褐色土塊少量）
Ⅶ：灰黄褐色土（鉄分含）
Ⅷ：黒褐色土（φ0.5～３㎝礫含、鉄分少量）
Ⅸ：黒褐色土
Ⅹ：黒褐色砂質土（φ0.5～３㎝礫含、鉄分多量）
XI：黄褐色粘質土

2A 自然流路中央トレンチ南壁



Ⅰ：黒褐色粘質土（φ１㎝礫・炭少量）
Ⅱ：暗灰黄色土（φ１～３㎝礫含）
Ⅲ：黒褐色粘質土（φ２～３㎝礫含）
Ⅳ：黒褐色土（φ１～２㎝礫・炭含）
Ⅴ：暗褐色土（φ１～３㎝礫含）
Ⅵ：灰黄褐色砂質土
Ⅶ：黒褐色土（鉄分含）
Ⅷ：黒褐色土（鉄分含、φ10～15㎝礫少量）
Ⅸ：暗灰黄色土（φ１～３㎝礫多量）
Ⅹ：暗褐色土（褐色土塊含）
XI：黄褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫多量）
XII：暗褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫含）
XIII：灰黄褐色砂質土
XIV：黒褐色砂質土（φ0.5～３㎝礫・鉄分多量）
XV：褐灰色土（φ１～３㎝礫含）
XVI：暗褐色砂質土（φ0.5～１㎝礫含）
XVII：黄褐色砂質土
XVIII：黒褐色砂質土（φ0.5～３㎝礫含、鉄分多量）

0　2m

第３図　　自然流路土層断面図

4節　歴史的環境

南東に高畑遺跡を擁する芳川地区は松本市の最南端、塩尻市に接する位置に存在する。古くは中山道から分かれた北国脇往還（善光寺街道）が通り、宿場町でもあった地区である。周囲には東に田川、西に奈良井川が流れており、河川に挟まれた平地でもあったため氾濫の影響を受けやすく、やせた土地でもあった。この両河川はやはり集落の変遷にも密接に関わっており、氾濫が続いていたと思われる縄文時代、弥生時代の集落はほとんどみられない。周囲でも縄文時代では高畑遺跡、田川右岸の向原遺跡で中期の土器が出土している程度であり、弥生時代においても出川西遺跡において確認されている他は集落の存在が確認されていない。

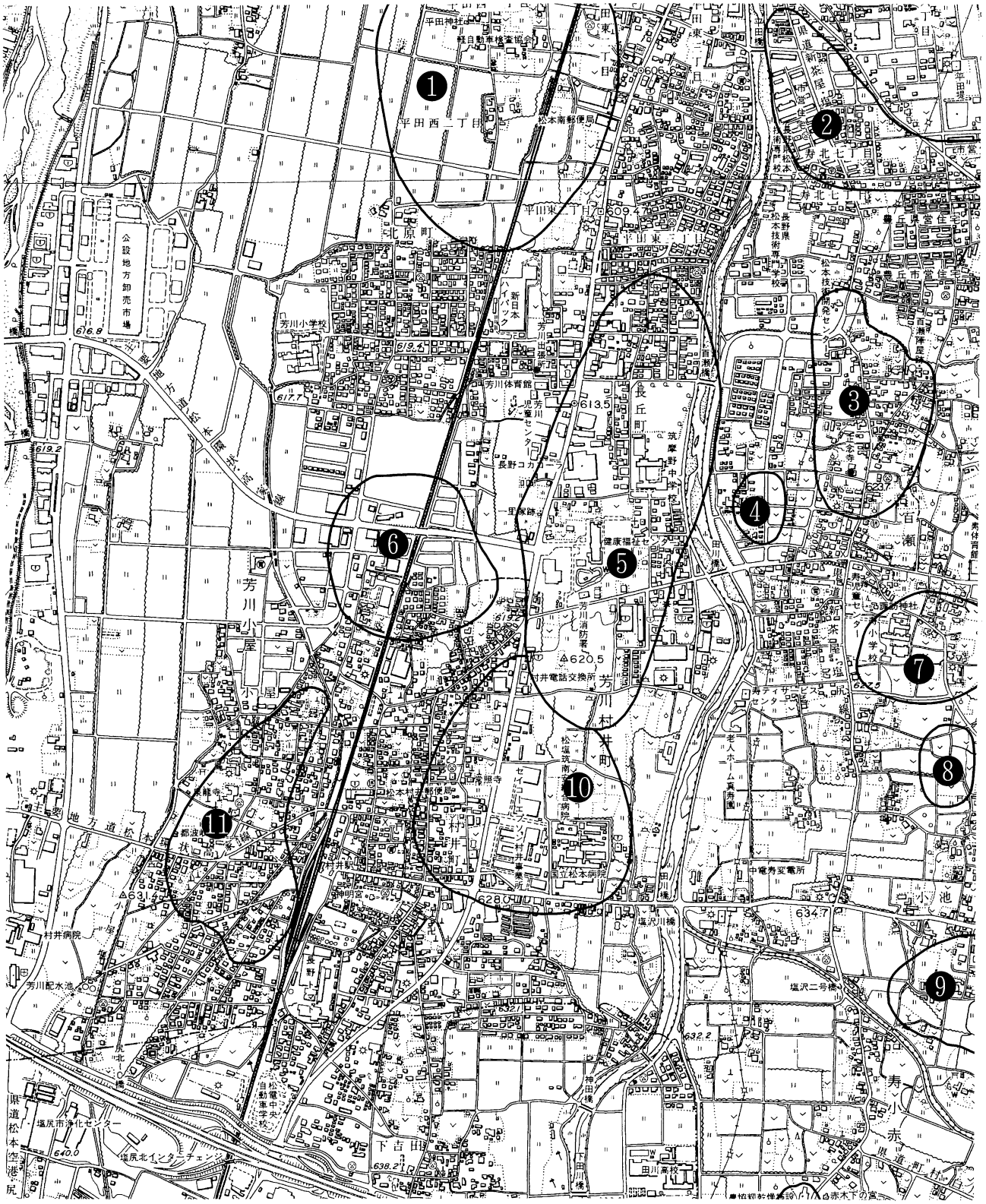
古墳時代になると次第に集落が展開していくようになり、平田北遺跡で古墳時代中期、出川南遺跡で後期の集落を確認している。特に出川南遺跡は大規模な集落であったと考えられ、3基の古墳も発見されている。高畑遺跡でも7世紀代の竪穴住居址が発見されており、須恵器の杯、短頸壺、鎌、釘、砥石などが出土している。

奈良・平安時代に入ると水利が安定したためか奈良井川の堆積域を中心に次第に開発が広がっていったと考えられる。集落においても発展期に入り、小原遺跡、塩尻市吉田川西遺跡、吉田向井遺跡などで大規模集落の存在を見て取ることができる。調査地周辺では小原遺跡における集落の発展が特にめざましく、過去3度の調査で136軒もの竪穴住居址が検出されている。遺物においても円面硯や墨書土器などの出土に公的な性格を持った有力者の存在が窺え、甲斐型土器などの外来系土器の出土に他地域との活発な交流が看取できるため周辺集落の中でも重大な位置付けにあったことが分かる。また、「又」や「財冨加」、「卍」が書かれた墨書土器や鉄鐸・鉄鈴なども出土しており、当時の信仰のあり方を推察することができる。この時期において芳川地区は筑摩郡良田郷にあたると推定される場所であり、郷内でも重要な集落であったことが窺える。

この他小原遺跡からやや南方、塩尻市吉田川西遺跡・吉田向井遺跡も同様の大規模集落であったと目されている。昭和59・60年に長野県埋蔵文化財センターが行った調査では実に266軒もの竪穴住居址が検出され、集落の規模の大きさを示している。出土した遺物では緑釉陶器や鉄器が特に目立っており、鍛冶遺構の存在も確認されている。先述した小原遺跡でも鍛冶遺構や鉄滓、多量の鉄器などが見られるため、このような点に於いても小原遺跡と様相が似ていると言えるであろう。吉田向井遺跡は昭和59年に発掘調査が行われ、約90軒の住居址が出土している。また、昭和60年に長野県埋文センターが行った調査では竪穴住居址と共に墓坑と目される土坑が多数検出されており、墓域としてのあり方も窺えるところである。

このような大規模集落は粗密を繰り返しながらも中世段階まで存続しており、小原遺跡、吉田川西遺跡、吉田向井遺跡共に中世の集落が検出されている。中でも小原遺跡では奈良・平安期に比べて若干位置を移動して西側にも集落が広がったようである。発見された住居数などは少ないものの、集落としては安定していたと思われ、土器と共に古瀬戸系陶器、龍泉窯青磁などや短刀、刀子なども出土している。また、中世の小原遺跡で注目すべきは埋納銭の出土である。この埋納銭は2次調査の際に発見されたもので、2701枚を超す銭がサシになって出土した。完全にサシと判明したものは4本あり、1サシ平均98.5枚の銭が見られた。銭の9割は宋銭であり、下限は志大通宝（元）の1310年であった。このような古銭に関しては塩尻市吉田若宮遺跡でも出土しており、二度の調査に渡り計76,000枚の埋納銭が出土している。この埋納銭は14～15世紀のものと推察されており、小原遺跡とほぼ時期が一致する。そのため当該期においてこの周辺一帯に広く集落が分布し、何らかの要因で大量の銭が埋納されたものと思われる。

その後芳川地区は地頭職であった村井氏によって支配されたが、天文17（1548）年には塩尻峠の合戦の後に武田信玄が村井城に着城している。そして、松本藩領、筑摩県を経て現在に至る。



❶ 平田本郷遺跡
❷ 向原遺跡
❸ 百瀬遺跡
❹ 寿南久保遺跡
❺ 高畑遺跡
❻ 小原遺跡
❼ 百瀬南遺跡
❽ 北起し遺跡
❾ 小池遺跡
❿ 村井遺跡
⓫ 小屋遺跡

第４図　　周辺遺跡図

第２章　第２次調査

１節　調査概要

松本市の南端、塩尻市に程近い場所に高畑遺跡が広がっている。調査地はこの高畑遺跡の南部に位置し、田川によって形成された微高地上に存在する。今回の調査では当該地に市道5513号線付け替え工事が計画されたため、まず試掘にて確認調査を行った。その結果調査地には遺構が良好に残存していることが判明したため発掘調査を実施した。調査は事業の進行上西側をA区、東側をB区として２度に分けて行った。また、その中でA区は廃土置き場を確保するため３度に分けて調査した。このA区については最終的に１つの調査区に統合し報告することとした。各調査区の面積はA：392㎡、B：456㎡である。各地区はA区南西に位置する基準国土座標値（X＝19900.000　Y＝－47900.000）の点を座標原点（NS0・EW0）とし、それに基づいて共通の座標を設定した。現場での測量は座標原点を基準に３mのグリットを設定し、それを基準として行った。標高は各地区任意の場所にBMを設定しそれぞれA区BM1＝618.860m　BM2＝618.910m　BM3＝618.900m　B区BM＝619.156m移設しそれを基準とした。測量図は1/20で作成した。

調査はA区を平成15年４月24日～６月13日、B区を10月14日～11月15日の期間で行った。調査ではまず大型建設機械にて表土及び耕作土を除去した。次に人力により遺構検出作業を行い、遺構の特定を行った。遺構検出が終了し、確定した物から遺構番号を付し掘り下げを行った。遺構の番号は第１次調査の続き番号を踏襲し、土坑33・ピット121から順次番号を付すこととした。遺構の状況や土層断面、遺物の出土状況などの記録は写真と実測図により行った。全ての遺構において調査が終了した後、埋め戻しを行ない調査を終了した。

２節　調査成果

調査期間：A区：平成15年４月24日～６月13日　B区：平成15年10月14日～11月15日

調査面積：総面積　848㎡

A区392㎡　　B区456㎡

検出遺構：竪穴住居址　　２軒（A区１軒・B区１軒）…… 奈良・平安時代　2

掘立柱建物址　　２棟（B区）

土坑　　41基（A区24基・B区17基）

ピット　　256基（A区76基・B区180基）

溝　　９条（A区３条・B区６条）

畠址　　１箇所…… 近世以降であると思われる

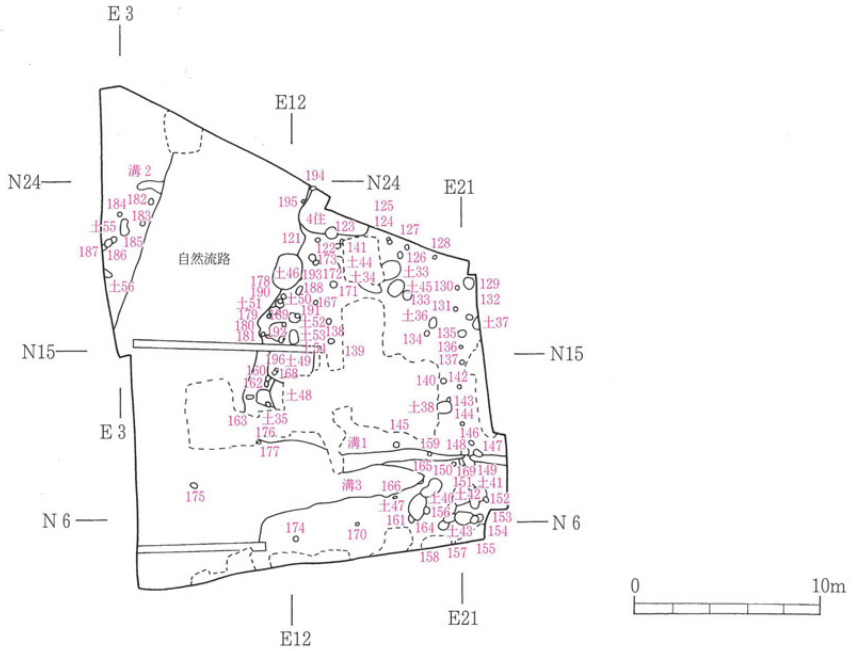
出土遺物：土師器・須恵器・灰釉陶器　（奈良・平安時代）

陶磁器・鉄製品・元豊通宝　（中世）

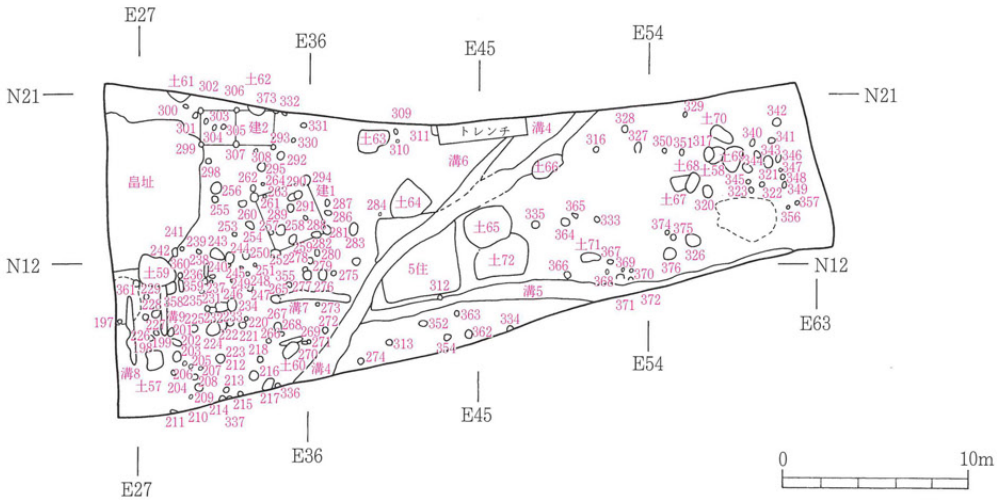
弥生土器　（弥生時代）

黒曜石片・打製石斧　（縄文時代）　など

2 A



2 B



第 5 図　　第 2 次調査遺構配置図

3節　検出遺構

第2次調査は調査地域の内、南西部を中心に調査したことになる。調査では遺構密度は低いものの、調査地西部を流れていたであろう自然流路や溝を中心にいくつかの遺構が検出された。以下それぞれについて概観してみたいと思う。

竪穴住居址

4住

A区北部で確認された住居である。北半は調査区外にかかっており全容はつかみがたいが、方形の竪穴住居であると思われる。底面からは大小5基のピットが検出された。恐らく柱穴になるものもあるのであろうが、どれが該当するかは判別できなかった。

5住

B区中央で検出された。溝5に接する様に位置し、溝4に切られる。一辺4.4m程の方形を呈しており、床面中央部には広く貼り床がされている。貼り床の周囲には7基のピットがみられる。多くは不整形であるため用途は不明であるが、その位置からP2・4・5は柱穴であると思われる。西壁中央には焼土が広がっており、カマドがみられた。カマドは壁を掘り込まず構築し、前面に火床面をもつ。礫やその抜けた痕跡が確認できなかったので、粘土カマドであろうと思われる。カマド底面中央には径15cm程の窪みが見られた。恐らく支柱石の抜けた痕跡であろう。煙道は天井部まで良好に残されており、長さ約1m、径約15cmの煙道が地中に潜っている。煙道内部壁面には使用によるものかススが付着していた。煙出は径4.6cm程度のピットであり煙道からやや角度を持って立ち上がるものである。出土した遺物などから8世紀前半の住居であると思われる。

掘立柱建物址

掘立柱建物址は2棟確認できた。双方共にB区で検出されている。建1はB区やや西に位置している。溝4に程近い場所でやや西に傾く方向で検出された。1間×1間の建物址で1間310cm程である。柱穴には柱痕が明瞭に確認でき、径14～23cmの柱が使用されていたと思われる。建2はB区北西に位置し、ほぼ真東を向く建物址である。規模は1間×2間の側柱式で、1間185cmの間隔で柱がたてられていた。柱穴は径28～30cmに対し9～25cmと浅く、柱痕も確認できなかった。

溝

9条の溝が検出された。溝1・3・5・7は調査区を東西方向に、溝4・6は北東から南東に向かって伸びている。これらの溝はある程度のまとまりを持っており溝1・5・7は同じライン上に位置し、溝4・6は隣接し調査区中央部で合流している。そのためこれらは便宜上異なる遺構名を冠しているが、それぞれ大規模な溝の途切れたものであると考えてもよいであろう。東西方向の溝はB区東端からA区西部に至るまでほぼ位置を変えずほぼ真東に伸びている。西端はA区西で確認された自然流路と接しており、境目が判別できない。この接する箇所は溝幅が広くなり、底面の凹凸も激しくなっていることも踏まえて考えると、この溝は自然流路に流れ込んでいたと考えられ、用水路であったと推察できる。

土坑・ピット

41基の土坑と256基のピットが検出された。各調査区全体的に散在しているが、B区溝4を境に東側は密度が低い印象を受ける。遺構の配置には特に規則性は認められず、先述した掘立柱建物址と思われる土坑・ピット以外は用途も不明である。土坑64・65・72は5住の周囲にみられる土坑である。総じて不整形で大形の土坑である。土72は深さ75cmと深めの土坑であるが土64・65は深さも浅い。また、溝4・5に挟まれる位置でもあるため、これらは5住に関わる遺構でなく、溝に伴う浸水の痕跡である可能性も考えられる。

第1表　竪穴住居址一覧表

地区	No.	出土位置	平面形	主軸方向	長軸	短軸	深さ	カマド位置	時期	備　　考
B	4	N22　E13	方形		3.7	<1.5>	20			P123・194に切られる
B	5	N12　E42	方形	N - 99°-W	4.4	4.3	42	西壁中央	8C前半	煙道が残存している

第2表　掘立柱建物址一覧表

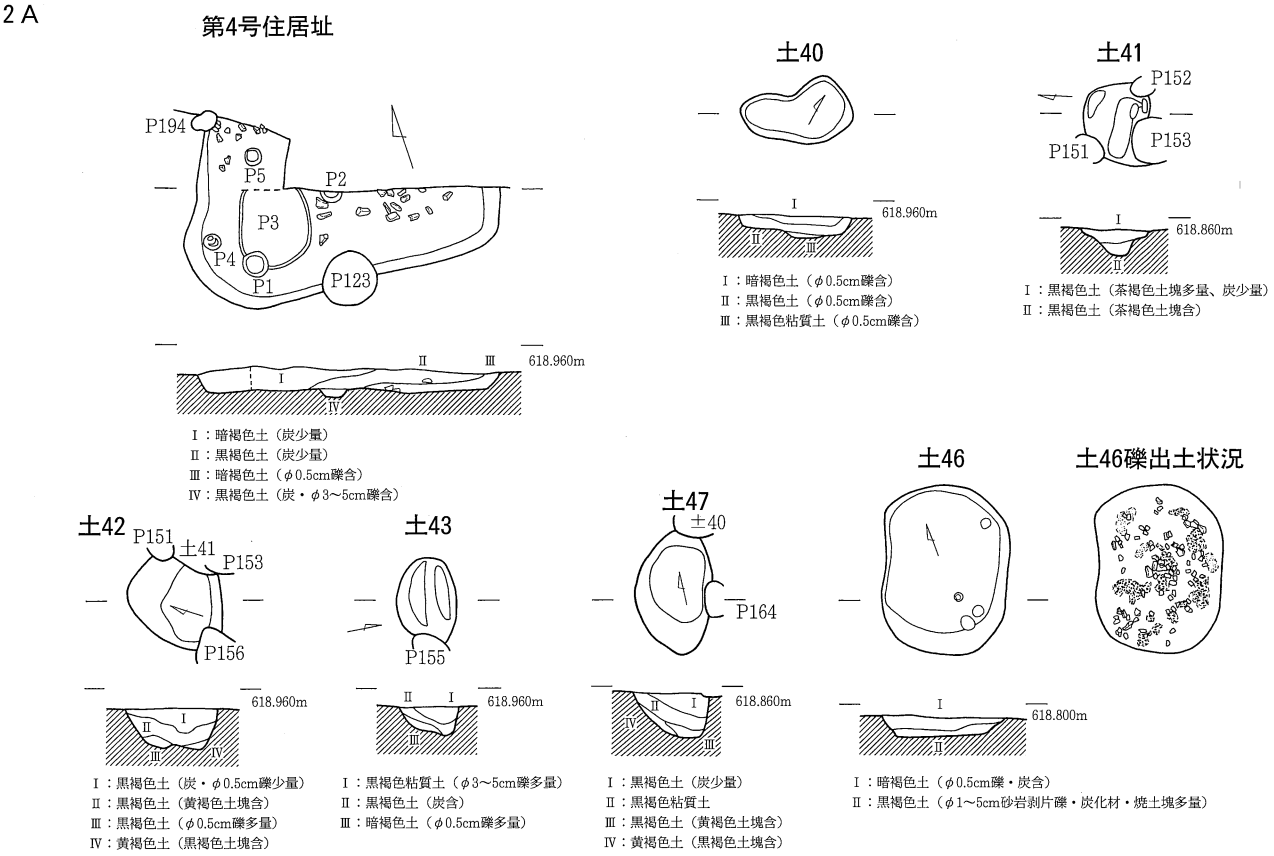
地区	No.	平面形	主軸方向	規模(cm)	柱間寸法(cm)	時期	柱　穴			備　考
		柱配り	面積(㎡)				平面形	規模(cm)	柱痕	
B	1	正方形	N-22°-E	1間×1間	桁行　315		円形	径50～53	4基	
		側柱式	9.7	315×310	梁間　310			深46～54	径14～23	
B	2	長方形	N-89°-E	1間×2間	桁行 185～200(192)		円形	径25～30		
		側柱式	7.1	385×185	梁間　185			深 9～25		

第3表　土坑一覧表

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
A	33	N 19.4 - E 17.2	<100>	37			
A	34	N 18.5 - E 16.2	<76>	9			
A	35	N 12.5 - E 10.6	<120>	9			
A	36	N 16.6 - E 19.5	71	20			
A	37	N 16.6 - E 21.7	<47>	29			東半調査区外
A	38	N 12.1 - E 20.1	77	15			
A	39	—	—	—			欠番
A	40	N 7.9 - E 19.4	131	31			
A	41	N 7.6 - E 21.8	95	43			
A	42	N 7.6 - E 20.9	<86>	44			
A	43	N 6.3 - E 21.1	<91>	35			
A	44	N 19.8 - E 14.6	<50>	16			
A	45	N 18.4 - E 17.5	102	29			
A	46	N 19.3 - E 11.8	207	29	土師器皿		
A	47	N 6.9 - E 18.6	<138>	55			
A	48	N 12.6 - E 11.3	—	24			
A	49	N 14.4 - E 12.0	—	14			
A	50	N 17.5 - E 11.4	55	9			
A	51	N 17.2 - E 11.1	63	7			
A	52	N 16.8 - E 12.1	66	10			
A	53	N 16.1 - E 11.3	105	9			
A	54	N 15.8 - E 12.1	76	22			
A	55	N 21.6 - E 3.2	100	22			
A	56	N 19.1 - E 2.4	<48>	20			西半調査区外
B	57	N 7.0 - E 28.0	120	13			
B	58	N 17.7 - E 57.6	105	15			
B	59	N 11.6 - E 28.0	220	21			
B	60	N 7.5 - E 35.1	98	12			
B	61	N 20.9 - E 29.2	<50>	19			
B	62	N 20.1 - E 33.2	<40>	9			
B	63	N 39.4 - E 18.5	187	10			
B	64	N 15.3 - E 41.4	218	15	須恵質擂鉢		
B	65	N 14.0 - E 45.4	252	51			
B	66	N 17.2 - E 48.6	186	10			
B	67	N 16.3 - E 55.7	<95>	10			
B	68	N 16.3 - E 56.3	110	11			
B	69	N 17.6 - E 58.4	137	26			
B	70	N 18.8 - E 57.8	132	28			
B	71	N 12.4 - E 50.9	104	13			
B	72	N 12.4 - E 46.2	320	75			

＊表中の＜　＞内の数値は切り合い等で全長が測れない物の実寸値である

2 A


第4号住居址

Ⅰ：暗褐色土（炭少量）
Ⅱ：黒褐色土（炭少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5cm礫含）
Ⅳ：黒褐色土（炭・φ3～5cm礫含）
土40

Ⅰ：暗褐色土（φ0.5cm礫含）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.5cm礫含）
Ⅲ：黒褐色粘質土（φ0.5cm礫含）
土41

Ⅰ：黒褐色土（茶褐色土塊多量、炭少量）
Ⅱ：黒褐色土（茶褐色土塊含）
土42

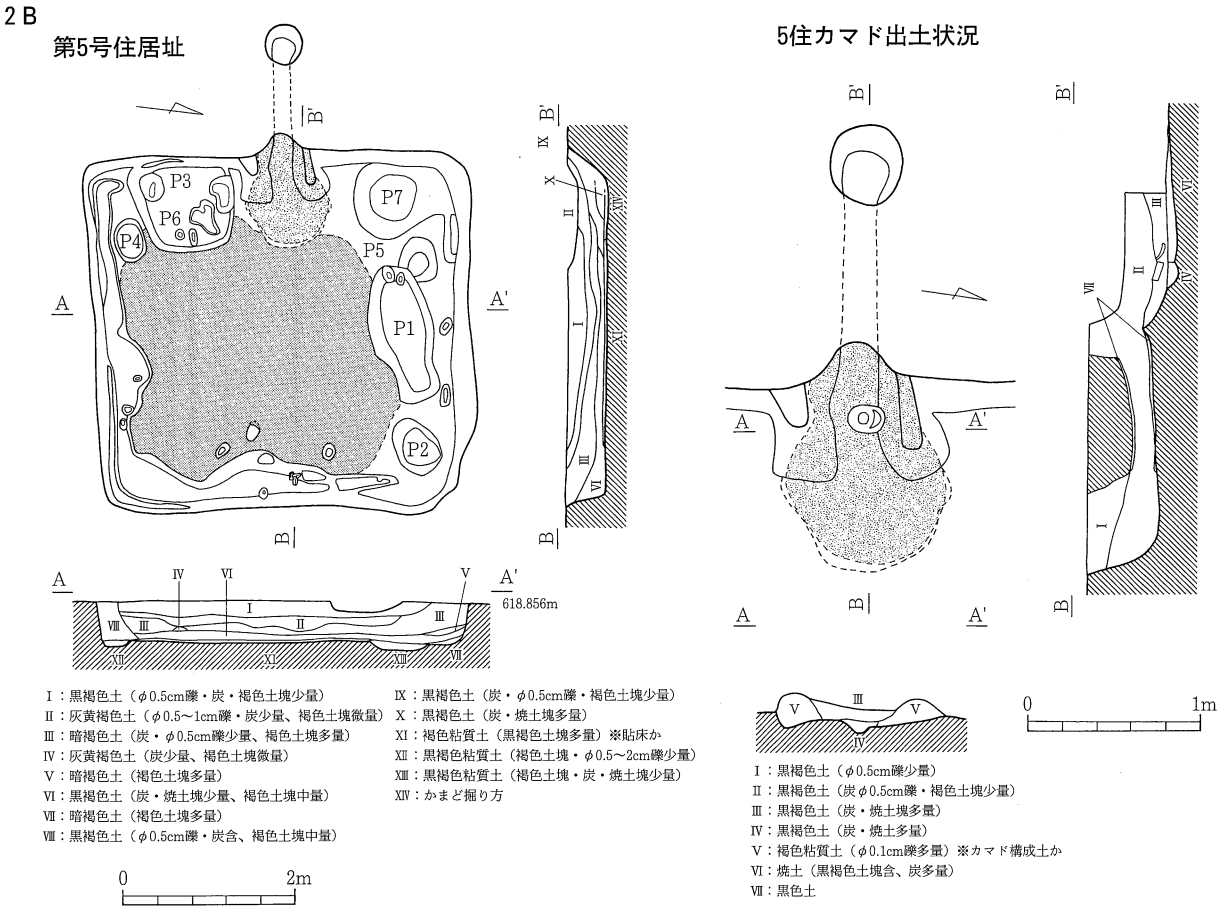
Ⅰ：黒褐色土（炭・φ0.5cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（黄褐色土塊含）
Ⅲ：黒褐色土（φ0.5cm礫多量）
Ⅳ：黄褐色土（黒褐色土塊含）
土43

Ⅰ：黒褐色粘質土（φ3～5cm礫多量）
Ⅱ：黒褐色土（炭含）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5cm礫多量）
土47

Ⅰ：黒褐色土（炭少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土
Ⅲ：黒褐色土（黄褐色土塊含）
Ⅳ：黄褐色土（黒褐色土塊含）
土46

Ⅰ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭含）
Ⅱ：黒褐色土（φ1～5cm砂岩剥片礫・炭化材・焼土塊多量）
土46礫出土状況

2 B

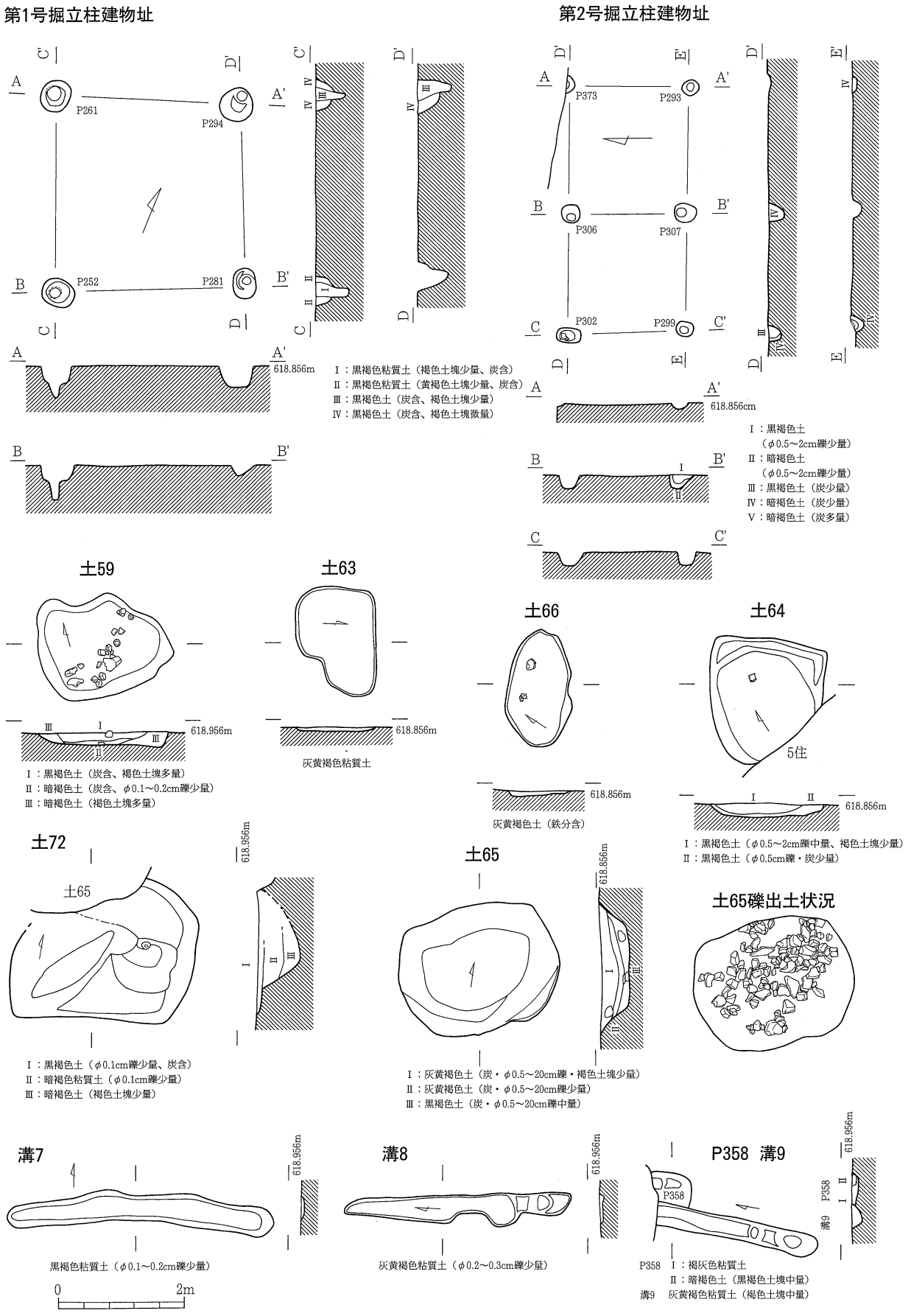

第5号住居址

Ⅰ：黒褐色土（φ0.5cm礫・炭・褐色土塊少量）
Ⅱ：灰黄褐色土（φ0.5～1cm礫・炭少量、褐色土塊微量）
Ⅲ：暗褐色土（炭・φ0.5cm礫少量、褐色土塊多量）
Ⅳ：灰黄褐色土（炭少量、褐色土塊微量）
Ⅴ：暗褐色土（褐色土塊多量）
Ⅵ：黒褐色土（炭・焼土塊少量、褐色土塊中量）
Ⅶ：暗褐色土（褐色土塊多量）
Ⅷ：黒褐色土（φ0.5cm礫・炭含、褐色土塊中量）
Ⅸ：黒褐色土（炭・φ0.5cm礫・褐色土塊少量）
Ⅹ：黒褐色土（炭・焼土塊多量）
Ⅺ：褐色粘質土（黒褐色土塊多量）※貼床か
Ⅻ：黒褐色粘質土（褐色土塊・φ0.5～2cm礫少量）
ⅩⅢ：黒褐色粘質土（褐色土塊・炭・焼土塊少量）
ⅩⅣ：かまど掘り方

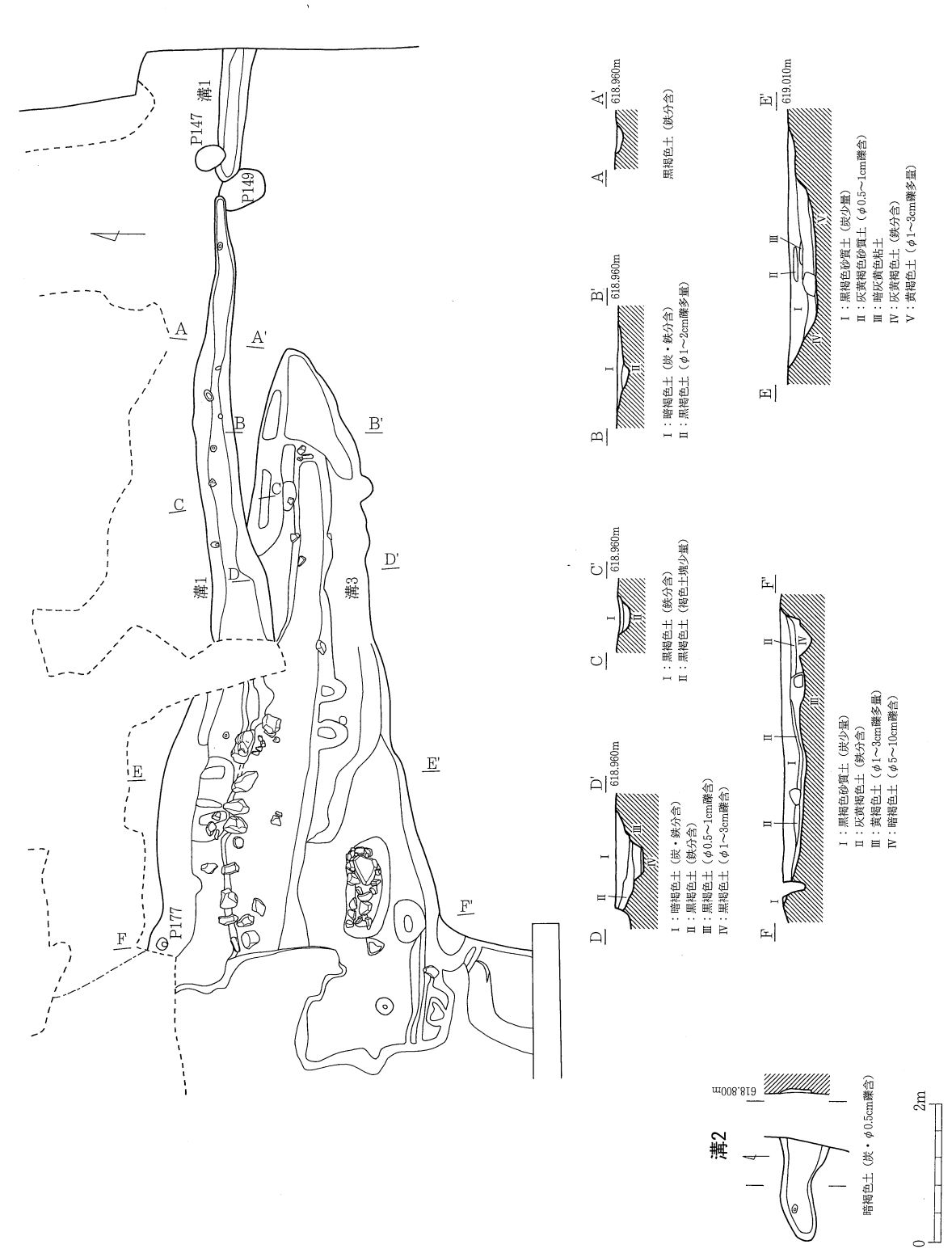
5住カマド出土状況

Ⅰ：黒褐色土（φ0.5cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（炭φ0.5cm礫・褐色土塊少量）
Ⅲ：黒褐色土（炭・焼土塊多量）
Ⅳ：黒褐色土（炭・焼土多量）
Ⅴ：褐色粘質土（φ0.1cm礫多量）※カマド構成土か
Ⅵ：焼土（黒褐色土塊含、炭多量）
Ⅶ：黒色土

第６図　　Ａ区住居址・土坑・Ｂ区住居址

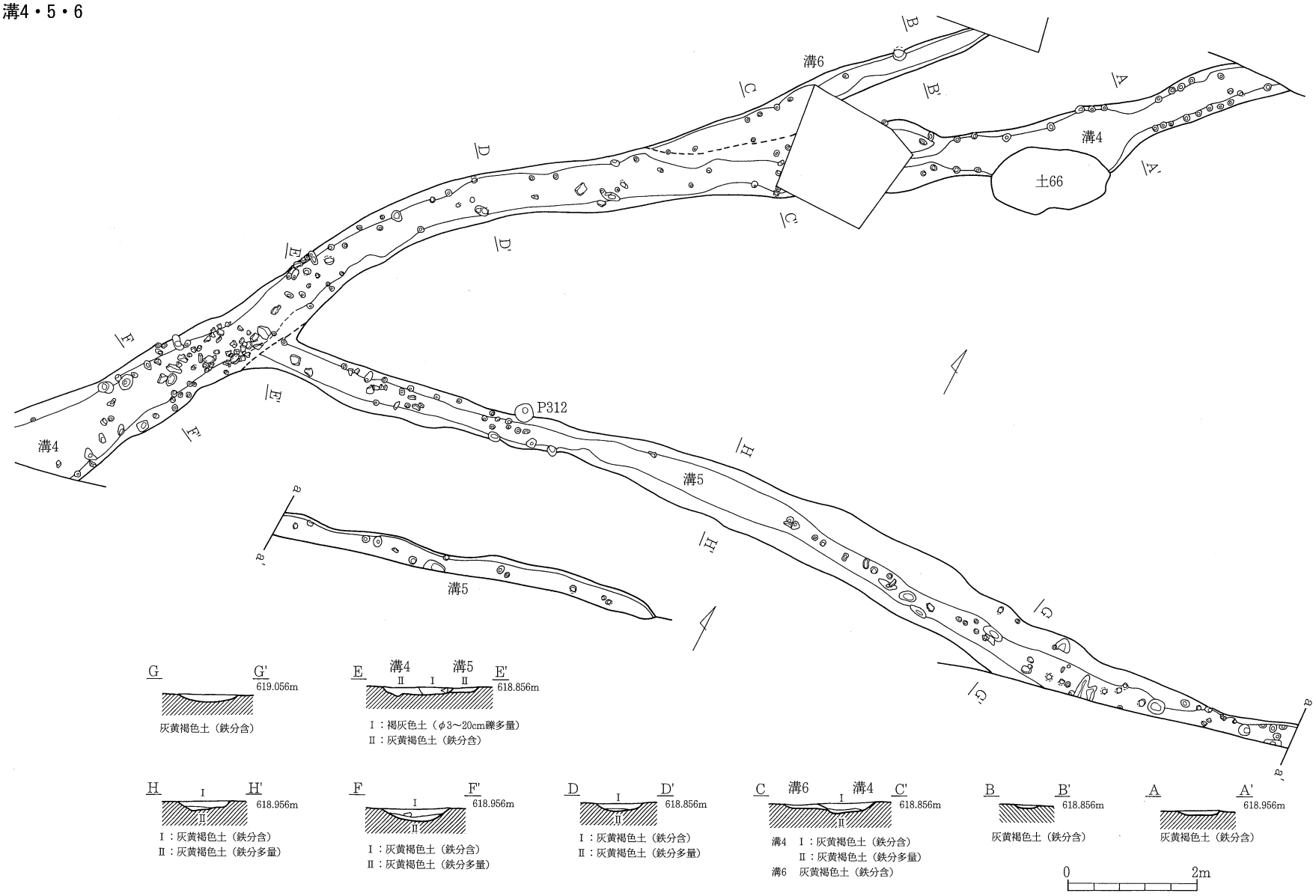


第７図　　Ｂ区掘立柱建物址・土坑・溝（1）


溝1・3
溝1
溝3
P147
P149
P177
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
618.960m
619.010m
618.800m
黒褐色土（鉄分含）
Ⅰ：暗褐色土（炭・鉄分含）
Ⅱ：黒褐色土（φ1～2cm礫多量）
Ⅰ：黒褐色土（鉄分含）
Ⅱ：黒褐色土（褐色土塊少量）
Ⅰ：暗褐色土（炭・鉄分含）
Ⅱ：黒褐色土（鉄分含）
Ⅲ：黒褐色土（φ0.5～1cm礫含）
Ⅳ：黒褐色土（φ1～3cm礫含）
Ⅰ：黒褐色砂質土（炭少量）
Ⅱ：灰黄褐色砂質土（φ0.5～1cm礫含）
Ⅲ：暗灰黄色粘土
Ⅳ：灰黄褐色土（鉄分含）
Ⅴ：黄褐色土（φ1～3cm礫多量）
Ⅰ：黒褐色砂質土（炭少量）
Ⅱ：灰黄褐色土（鉄分含）
Ⅲ：黄褐色土（φ1～3cm礫多量）
Ⅳ：暗褐色土（φ5～10cm礫含）
溝2
暗褐色土（炭・φ0.5cm礫含）
0
2m

第8図　　A区溝

溝4・5・6



第9図　B区溝（2）

第３章　第３次調査

１節　調査概要

調査対象地は第２次調査Ｂ区の北に位置する。今回の調査は当該地に計画された市道5513号線改良工事に伴い、北接する厚生年金福祉施設が移転することとなったため、その代替地において調査を実施したものである。調査区の総面積は1,478㎡であるが、廃土置き場の確保等作業上の都合により２度に分けて行った。調査は第２次調査で設定した基準点に基づいて３ｍのグリットを設定し、それを基準として行った。標高はそれぞれ任意の場所に南部ＢＭ＝618.914m　北部ＢＭ＝618.847mを移設し、それを基準とした。測量図は1/20の縮尺で作成した。

発掘調査はまず南部地区で行い、南部地区埋め戻し終了後北部地区の調査を行った。調査の手順は第２次調査と同様である。遺構番号は第２次調査の続き番号を付したため、竪穴住居址６・竪穴状遺構１・溝10・土坑73・ピット377からとなった。なお、第２次調査Ｂ区から伸びる溝４・６に関しては同一遺構であると判断しため第２次調査の遺構名を踏襲した。また、南部地区調査中、ラジコンヘリコプターにより航空写真を撮影した。

２節　調査成果

調査期間：平成15年11月21日～平成16年２月16日

調査面積：総面積　1,478㎡

検出遺構：竪穴住居址　　１軒（奈良・平安時代）

竪穴状遺構　　18棟（鎌倉時代）

掘立柱建物址　　３棟（奈良・平安時代１、鎌倉時代２）

土坑　　139基

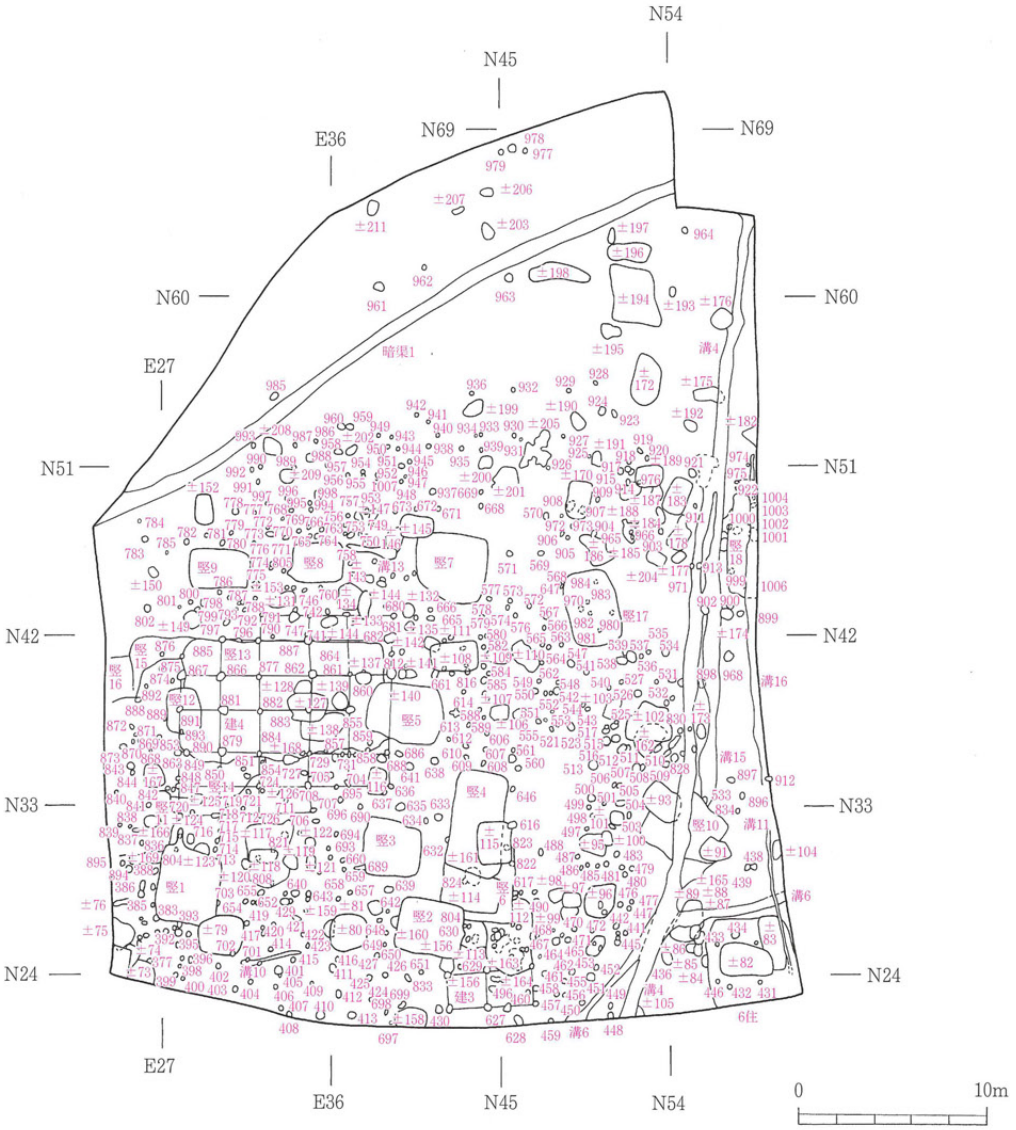
ピット　　631基

溝　　６条

出土遺物：土師器・須恵器　（奈良・平安時代）

土師質土器・須恵質陶器・石器（砥石）・鉄製品・銭貨　（鎌倉時代）　など

3



第10図　　第３次調査遺構配置図

3節　出土遺構

第3次調査は第2次調査区の北部に近接する位置である。調査区全体に渡り多数の遺構が検出されたが、調査区西部には掘立柱建物址を中心とした遺構集中箇所がみられ、注目すべきところである。特に竪穴状遺構はその大半がこの範囲に集中しており、大きなまとまりを形成しているように見受けられる。調査区全体的に見てもこの遺構集中箇所から離れるほど遺構密度が低くなる傾向がみられるため、この遺構集中区を中心とした遺構配置がなされていた可能性は十分考えられると思われる。そのためこれを便宜上遺構集中区と仮称し、この遺構集中区に関する考察は第5章：調査のまとめに譲りたい。

竪穴住居址

今回の調査では明確に竪穴住居址と考えられるものは6住の1軒のみであった。6住は調査区南東隅で検出された。ほぼ真東を向く方形の住居であり、溝6に沿うように隣接している。溝11や土坑82・83に切られるため住居床面の大部分は不明瞭であるが、一部には貼り床がみられ、住居に伴うと思われるピットも3基確認された。西壁やや北寄りにはP1がみられる。深さ10㎝前後の浅い掘り込みで、北東部には焼土がみられた。礫や構築材が確認できなかったため断定はできないが、カマドの火床面である可能性が高いように思われる。出土した遺物から8世紀前半に帰属するであろう。

掘立柱建物址

今回の調査では631基のピットが確認された。中には柱穴と思われる堆積がみられるものが存在するが、その中で明らかに柱穴列を為すものを掘立柱建物址とした。ただし、中世ゆえの柱穴列の揃わない建物址も存在すると思われるため、現在認識できていない建物址も多数存在すると思われる。

建物址3

調査区南東に位置する桁行2間、梁間1間の建物址であると思われるが、P450・453は同一軸上にあり、桁間寸法もおおよそ同じであるため、これらを含めて建3となる可能性も考えられる。この建物址に伴うと思われる遺構はなく、柱穴は割と浅めで明瞭に柱痕のみられるものは存在しなかった。

建物址4

建4は調査区西部に見られる大形の建物址である。現在確認できる建物規模は桁行5間、梁間4間であるが、周囲にはピット群が形成されている上、西部は不明瞭な土が広がっていたためさらに規模が大きくなる可能性も十分考えられるであろう。恐らく総柱式の建物であると思われるが、東部は何本か柱がみられず、桁中央には他より若干柱間の広い箇所がある。また、建物北東部・南西部にはそれぞれ庇とみられる柱穴が確認できる。これらは建物構造を知る上で重要な手がかりとなるであろう。この建物址周囲には竪穴状遺構や大形土坑が散見しているが、これらの遺構との関わりは後述第5章に譲りたい。

竪穴状遺構

計18基の竪穴状遺構が確認された。多くは西部遺構集中区に属しており、一つのまとまりを形成している(竪1～9・11～16)。これらは総じて方形の竪穴状遺構であると思われ、方向軸もほぼ同一である。特に竪1～4・6～9は建4をコの字状に取り囲むように存在しており、建4と同一軸を示している。関連する遺構であることは確実であろう。これら相互の関わりは後述に譲るとして、ここでは代表的なものについて概観する。

竪2

調査区南部から検出された。隅丸方形を呈し、深さ48㎝とやや深めの遺構である。覆土中には打ち欠かれた礫が詰め込まれていた。礫は拳大～人頭大のもので田川由来の礫である。礫層の下層には炭化物層がみられた。床面等に被熱がみられなかったのでこの遺構内で焼けたものとは考えがたく、覆土埋没中に混入した

ものもしくは礫を投げ込む際に埋めたものであると思われる。

竪4

調査区南部にあって土114を切り、土115に切られる。南北に長い方形を呈しており、深さは25cm程である。覆土中には南東部を中心に人頭大程度の礫がみられた。礫はやはり打ち欠かれているが、他の礫が集中している遺構に比べて量が少なく混入したものである可能性も考えられる。

竪5

深さ41cmをはかり、やや不整な隅丸方形を呈している。覆土は炭層から成り、褐色土のブロックを多く含むため人為的に埋められたものと思われる。覆土中には多量の礫が詰められた状態で入れられていた。礫はやはり人為的に打ち欠かれており、特に遺構南東部に集中している。礫集中部分は底面が一段下がった箇所にあたり、遺物の多くも礫間から出土しているため、この遺構の主体はこの礫集中部分である可能性が考えられるであろう。

竪10

南東隅から検出された不整方形の竪穴状遺構である。覆土はおおよそ5層からなり、覆土中層には多量の礫が入れられていた。これらの礫は自然礫であるものが多く全体的に広がっていたため、埋没過程の中で混入した可能性が高いと思われる。

竪11

調査区西部から検出された。隅丸方形を呈し竪14と切り合うと思われるが、この周辺は竪穴状遺構が集中しているためか覆土中では判断できず、切り合い不明である。床面にはいくつかの遺構が確認できるが、中でも土166から周辺の床面には炭化材や焼土の広がりが認められ、その中に炭化種子（麻が主でわずかに米が含まれる）がかなり多くみられた。床面の中央部は硬化した箇所が認められ、炭化種子も硬化した土の中に含まれていたが、土166の覆土上面には硬化が及んでいない。そのため土166は竪11に伴う遺構と判断され、土166の壁面が焼けていたことから、ここで焼かれた麻の種が周囲に飛んだものと考えられる。また、遺構東部に突出して土坑のような窪みがみられたが、これは竪11に伴うとは考え難く、むしろ建4の一部である可能性が高い様に思われる。

竪12

調査区西部で検出された。一応竪13・14を切り、方形を呈する竪穴状遺構としているが、検出面では切り合いを確認できず、隣接する遺構の覆土との差異も脆弱なものであるため、近接する遺構の一部である可能性も考えられる。覆土は2層から成り、覆土中には多くの礫がみられたが、この礫の範囲は西部遺構外にまで広く及んでいるためこの遺構に伴うものであるかは疑問が残る。

竪13

調査区西部にあって長軸10.8mと大規模な竪穴状遺構であるとしているが、竪12同様平面ではプラン把握ができず、近接する竪12・14・15・16と覆土が似通っているため、これらを含めてさらに大規模な竪穴状遺構である可能性が極めて高い。平面形も検出面では判別できなかったため底面の様相を主体に判断した。それによるとプランは東西に長い隅丸方形を呈しており、底面やや西よりの位置で西部が一段低くなっている。覆土は大きく3層から成り、暗褐色～黒褐色土が堆積している。底面からは多くの遺構が検出されたがこれらのほとんどは建4の柱穴である。

竪17

調査区東部にあってやや西に傾く竪穴状遺構である。覆土は5層から成り、レンズ状の堆積を示している。覆土中南側には炭化物が集中する箇所がみられた。床面や壁面には被熱した痕跡は認められなかったので、恐らく埋没過程の中で混入もしくは廃棄されたものであると思われる。

竪18

調査区東壁際から検出された。東部のほとんどは調査区外にあたり、溝16に切られる遺構であるため全容を解明するには至らなかったが、方形の竪穴状遺構である事は確かである。後に行われた第４次調査の10・11住とほぼ同位置にあたるため、恐らくどちらかと同一遺構であると考えられる。その位置関係や軸方向から推定すると11住と同一遺構であろう。

溝

溝は７条検出された。溝４・６に関しては第２次調査検出の溝と同一であることは明白であったためそのまま遺構名を付した。特に溝４は調査区を縦断するほど長い溝であり、竪10を境に流れを南西方向に変えている。この調査区東部に集中する溝は総じて鉄分が含まれており、緩やかではあるが流水の痕跡も認められる。その長さや方向から考えて区画を兼ねた流水路であったと思われる。

土坑・ピット

遺構集中区を中心として139基の土坑と631基のピットが検出された。土坑の中には大形のものがいくつか見受けられるがこれらは竪穴状遺構と同様に建４に関わる施設である可能性も考えられる。また、調査区北東部に割と大形の土坑群が見られる。総じて形状が不整形であり、時期や用途は不明である。

土75・79・80

調査区南西部で検出された土坑である。総じて1.8～２ｍの不整円形を呈している。これらは約６ｍの間隔で同一軸上に並んでおり、深さも約40㎝で一定している。用途は不明であるが各々何らかの関わりを持つ可能性が極めて高いと思われる。

土117

南西部に位置する不整方形の土坑である。深さ10㎝程の浅い土坑であるが、覆土中には多量の礫がみられた。礫は土坑北部に集中して見られ、人為的に割られているようである。礫間には数点ではあるが獣の歯が散在していた。総じて馬の歯であると思われ、何らかの意図を持って埋葬した可能性も考えられる。

土127・138

竪13覆土上面で検出され、共に竪13を切る。両土坑共に覆土中には多量の礫がみられる。これらの礫はほぼ同レベルで出土しており、集中する範囲もほぼ接する。加えて竪13の覆土上にあり切り合いも不明瞭であったため、現在２つの土坑に分けているものの礫を含めて１つの土坑である可能性も考えられる。

第４表　竪穴住居址一覧表

地区	No.	出土位置	平面形	主軸方向	長軸	短軸	深さ	カマド位置	時期	備　考
	6	N24.5 E58.5	方形	N - 85° -E	4.7	<4.6>	10	西壁中央	8C 前半	溝 11・土 82・83・P431～435・446 に切られる　中央部床面に貼り床あり

第５表　掘立柱建物址一覧表

地区	No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積(㎡)	規模(cm)	柱間寸法(cm)	時期	柱穴 平面形	規模(cm)	柱痕	備　考
	3	長方形	N-85° -W	1間×1間	桁行　250		円形	径28～45		
		側柱式	5.0	250×200	梁間　200			深16～37		
	4	長方形	N-91° -E	5間×4間	桁行 220～265(220)		円形・方形	径15～50	3基	北東部及び南西部に庇がつく竪穴状遺構5・12・13・14・15・16は付属する施設である可能性が高い
		総柱式	89.9	1145×786	梁間 180～190(180)			深16～58	径10～17	

第６表　竪穴状遺構一覧表

No.	出土位置	平面形	長軸方向	長軸	短軸	深さ	時期	備　考
1	N28.5 E28.5	長方形	N-8° -W	4.0	3.2	52	13C後半	P3・土79に切られる 竪11・土123・P383・393・703を切る P804切り合い不明 底面に柱穴あり
2	N26.5 E41.5	長方形	N-84° -E	3.4	2.9	48	13C前～14C後	P804に切られる 土156・160を切る 覆土下層に炭が多量にみられ、炭上層には打ち欠いた礫が詰め込まれている
3	N30.5 E39.5	方形	N-84° -E	3.0	3.0	33		P689を切る 北西隅に礫が集中している
4	N32.0 E44.0	長方形	N-10° -W	5.3	2.9	25		竪6・P632・土114・161を切る 土115に切られる
5	N38.0 E40.0	隅丸方形	N-83° -E	4.0	3.1	41	13C後半	南東部を中心に非常に多くの礫が含まれている
6	N28.5 E45.0	長方形	N-4° -W	4.0	<2.5>	15		竪4・土114・151・161・P620に切られる
7	N45.5 E43.5	不整方形	N-87° -E	3.6	3.6	30	12C中～後	土145に切られる
8	N45.5 E35.0	長方形	N-91° -E	2.6	2.1	27	14C	
9	N45.5 E30.0	長方形	N-91° -E	3.1	2.1	30		
10	N32.0 E54.5	不整形		4.1	3.8	44		溝4・土91・93に切られる 溝15・土165・P533を切る 池状遺構の可能性あり
11	N32.0 E25.5	方形	N-91° -E	3.4	—	37	13C前	土169を切る P836・837・839・840・841・842切りあい不明 竪14と切り合うが切り合い関係は不明である 土166は伴う遺構か
12	N38.0 E28.0	長方形	N-1° -W	2.1	1.9	46		竪穴状遺構13～15を切るが切り合い関係には疑問が残る
13	N39.0 E33.0	長方形	N-91° -E	10.8	6.4	64	13C後～14C前	土128・127・138・137・139・168・P728・877・882・886に切られる P864を切る P796・856・857・858・859・884・890は切りあい不明 建4に伴うと思われる
14	N35.0 E28.0	不整方形	N-90.5°-E	—	5.3	60	13C後～14C前	土125・P723に切られる 竪11・P843・844・845・846・848・849・850・851・853・954・869・870・871872・888・889・土167切り合い不明 竪14の西側から竪11にかけて床面に小ピットが数多く検出された箇所があり、別の遺構がこの場所にかんでいる可能性がある
15	N40.0 E27.0	方形か	N-2° -W	—	—	40	14C	P874・875・876・892切り合い不明 竪12・13・14・16と切り合うが切り合い関係は不明である
16	N39.5 E25.0	方形か	N-2° -W	—	—	21		竪14・15と切り合うが切り合い関係は不明である
17	N43.5 E49.5	隅丸方形	N-11° -W	4.0	2.6	25		P970・980～984に切られる 覆土中に炭化物を多く含む箇所がある
18	N47.0 E58.0	長方形	N-2° -E	5.3	—	42		土179・180を切る 東半調査区外

＊主軸方向が不明であるものが多いため軸方向は長軸方向で掲載している

＊竪5・11～16に関しては切り合い関係を掲載しているが、覆土中で切り合い関係が判別できなかったため詳細は不明である

第７表　土坑一覧表

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
	73	N 24.0 - E 26.0	<142>	48			
	74	N 25.0 - E 25.6	<50>	17			
	75	N 26.2 - E 25.0	<110>	41			
	76	N 27.9 - E 24.9	92	18			
	77						欠番
	78						欠番
	79	N 26.1 - E 30.2	275	50	東海系捏鉢	13C後～14C前	
	80	N 26.2 - E 37.0	219	50			
	81	N 27.4 - E 38.4	85	16			
	82	N 24.7 - E 58.1	304	24			
	83	N 25.7 - E 59.5	302	28			
	84	N 25.7 - E 55.9	<34>	12			
	85	N 25.3 - E 55.5	64	28			
	86	N 25.4 - E 55.2	<49>	15			
	87	N 26.0 - E 55.6	81	19			
	88	N 26.3 - E 55.4	84	11			
	89	N 26.8 - E 54.9	242	28			
	90						欠番
	91	N 30.6 - E 56.5	184	24			
	92						欠番
	93	N 33.1 - E 53.5	244	23	須恵質擂鉢	14C	
	94	N 25.5 - E 50.0	120	7			
	95	N 30.9 - E 49.9	154	9			
	96	N 28.0 - E 50.3	213	33			
	97	N 27.9 - E 48.8	106	16			
	98	N 28.1 - E 48.0	87	6			
	99	N 27.3 - E 48.6	100	21			
	100	N 30.2 - E 49.7	78	15			
	101	N 32.3 - E 51.2	88	7			
	102	N 37.4 - E 52.8	268	22			
	103	N 38.0 - E 50.9	107	27			
	104	N 30.6 - E 59.8	<46>	22			
	105	N 21.9 - E 52.3	<58>	14			南半調査区域外
	106	N 37.7 - E 46.1	85	27			
	107	N 37.8 - E 45.0	107	18			
	108	N 40.9 - E 42.5	274	12			
	109	N 40.8 - E 44.9	122	74			
	110	N 40.8 - E 46.4	180	12			
	111	N 41.4 - E 41.4	94	25			
	112	N 26.0 - E 45.5	<402>	11			
	113	N 25.2 - E 43.5	<153>	10			
	114	N 28.2 - E 43.5	318	25	古瀬戸瓶類	14C	
	115	N 31.0 - E 44.8	265	11			
	116	N 34.2 - E 38.5	156	40			
	117	N 31.0 - E 32.5	384	17	山茶碗	12C中	
	118	N 30.2 - E 32.4	160	15			
	119	N 29.9 - E 33.9	86	31			
	120	N 29.9 - E 31.5	59	26			
	121	N 29.9 - E 35.0	84	44			
	122	N 31.9 - E 35.0	60	20			
	123	N 30.6 - E 29.3	<53>	24			
	124	N 31.2 - E 28.6	42	26			
	125	N 33.2 - E 29.0	65	41			
	126	N 33.7 - E 33.1	60	31			
	127	N 38.2 - E 34.7	212	19			
	128	N 39.1 - E 34.5	102	27			

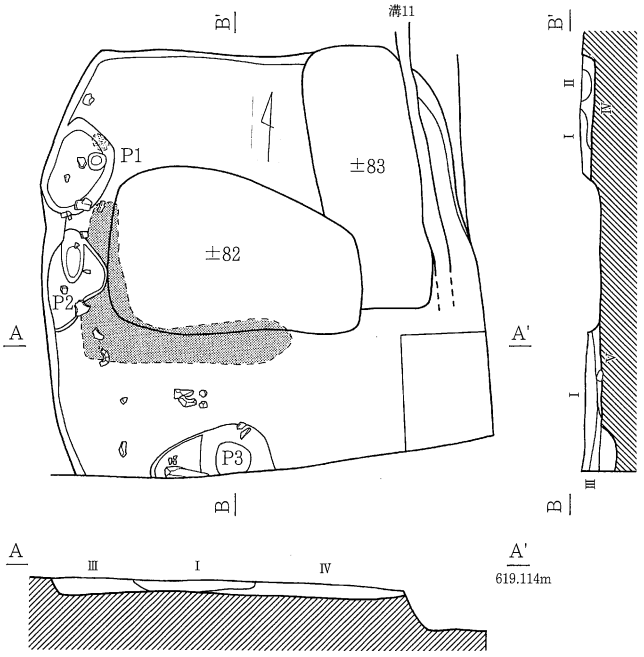
地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　考
	129						欠番
	130						欠番
	131	N 43.8 - E 33.4	152	43			
	132	N 43.2 - E 40.1	78	20			
	133	N 43.6 - E 37.8	148	32			
	134	N 44.0 - E 37.1	143	26			
	135	N 42.4 - E 40.2	59	16			
	136						欠番
	137	N 39.7 - E 37.7	87	11			
	138	N 37.2 - E 35.5	255	23			
	139	N 38.5 - E 36.5	102	12			
	140	N 39.9 - E 39.2	59	44			
	141	N 39.9 - E 40.2	<56>	41			
	142	N 41.8 - E 39.2	66	27			
	143	N 45.1 - E 37.3	60	23			
	144	N 44.9 - E 38.1	57	34			
	145	N 47.4 - E 40.6	176	19			
	146	N 47.0 - E 39.4	<116>	18			
	147	N 48.3 - E 38.3	66	26			
	148	N 42.6 - E 35.9	94	19			
	149	N 42.8 - E 28.6	96	6			
	150	N 45.3 - E 26.6	67	9			
	151						欠番
	152	N 48.5 - E 29.3	168	19			
	153	N 44.6 - E 32.1	56	7			
	154						欠番
	155						欠番
	156	N 24.5 - E 42.1		21			
	157						欠番
	158	N 21.6 - E 40.2	<117>	16			南半調査区域外
	159	N 26.4 - E 36.0	<34>	38			
	160	N 26.7 - E 39.5	<37>	47			
	161	N 29.0 - E 43.6	102	20			
	162	N 36.5 - E 53.0	198	56			
	163	N 25.6 - E 45.2	117	11			
	164	N 24.8 - E 45.9	130	20			
	165						欠番
	166	N 32.1 - E 26.6	96	32			
	167	N 34.7 - E 26.7	123	36			
	168	N 35.4 - E 33.8	82	54			
	169	N 30.2 - E 26.2	<64>	15			
	170	N 49.0 - E 49.3	204	12			
	171						欠番
	172	N 55.5 - E 53.0	283	23			
	173	N 36.8 - E 55.8	88	13			
	174	N 43.1 - E 57.2	78	39			
	175	N 54.8 - E 56.4	172	38			
	176	N 58.8 - E 57.0	124	27			
	177	N 46.1 - E 54.6	86	6			
	178	N 47.4 - E 54.6	190	17			
	179	N 46.8 - E 57.0	<40>	9			
	180	N 48.0 - E 57.2	<40>	9			
	181						欠番
	182	N 52.5 - E 58.6	<83>	16			
	183	N 49.4 - E 54.5	212	19			
	184	N 48.2 - E 53.5	100	30			

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
	185	N 47.5 - E 52.0	142	26			
	186	N 46.5 - E 50.4	195	26			
	187	N 49.6 - E 53.5	76	15			
	188	N 49.8 - E 52.2	<116>	26			
	189	N 50.5 - E 53.0	150	13			
	190	N 53.3 - E 49.2	104	30			
	191	N 51.3 - E 50.2	85	13			
	192	N 53.2 - E 55.2	83	45			
	193	N 60.3 - E 54.3	60	15			
	194	N 60.0 - E 52.4	284	42			
	195	N 58.2 - E 51.0	110	39			
	196	N 62.4 - E 52.2	240	40			
	197	N 63.3 - E 51.0	85	23			
	198	N 61.3 - E 48.4	324	43			
	199	N 54.0 - E 43.6	122	31			
	200	N 51.1 - E 44.3	92	17			
	201	N 49.0 - E 45.4	<100>	11			
	202	N 51.7 - E 37.2	75	32			
	203	N 63.5 - E 44.4	93	9			
	204	N 46.0 - E 53.5	107	41			
	205	N 51.6 - E 47.0	250	39			
	206	N 65.6 - E 44.4	70	35			
	207	N 64.6 - E 42.8	71	12			
	208	N 51.8 - E 32.9	120	34			
	209	N 50.4 - E 33.7	96	35			
	210						欠番
	211	N 64.7 - E 38.3	81	32			

＊表中の＜　＞内の数値は切り合い等で全長が測れない物の実寸値である

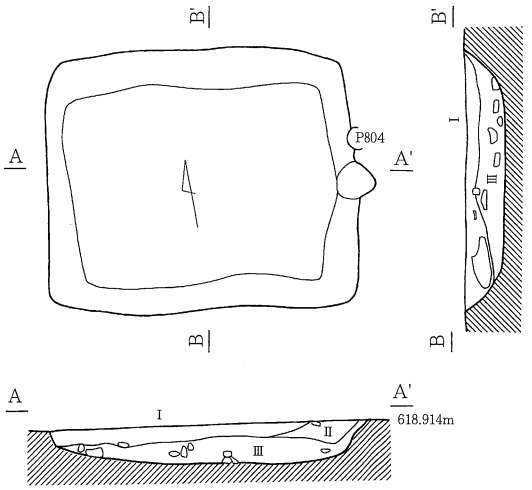
Ⅲ

第6号住居址



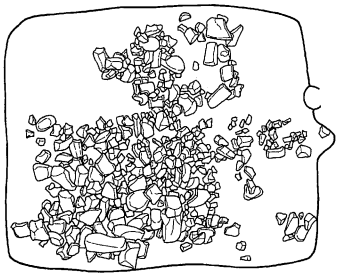
Ⅰ：黒褐色砂質土（φ0.1～3cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色砂質土（φ0.1～3cm礫微量）
Ⅲ：黒褐色砂質土（小礫少量）
Ⅳ：黒褐色砂質土（小礫中量）
Ⅴ：礫層

第2号竪穴状遺構

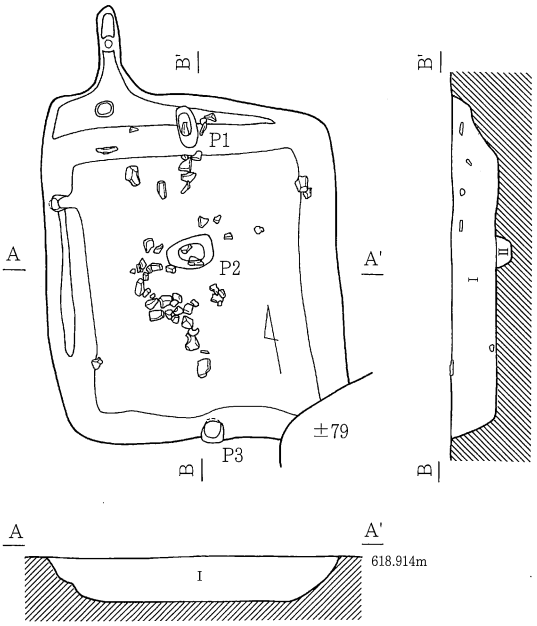


Ⅰ：暗褐色粘質土（炭・焼土塊少量、褐色土塊微量）
Ⅱ：暗褐色土（炭・焼土塊少量、φ0.5～1cm礫中量）
Ⅲ：灰黄褐色粘質土（炭・焼土塊多量）

竪2礫出土状況



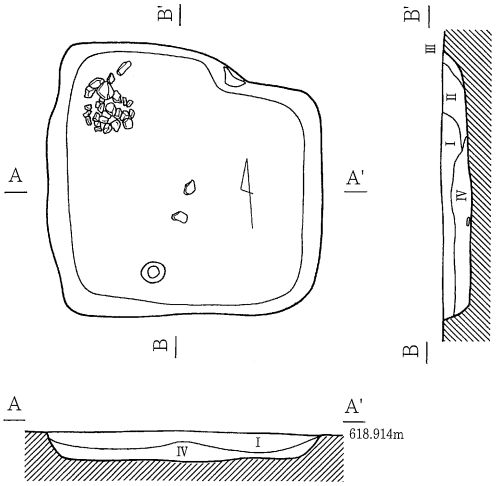
第1号竪穴状遺構



Ⅰ：灰黄褐色粘質土（炭・焼土塊・褐色土塊少量）
Ⅱ：灰黄褐色土（炭・褐色土塊少量）

0　2m

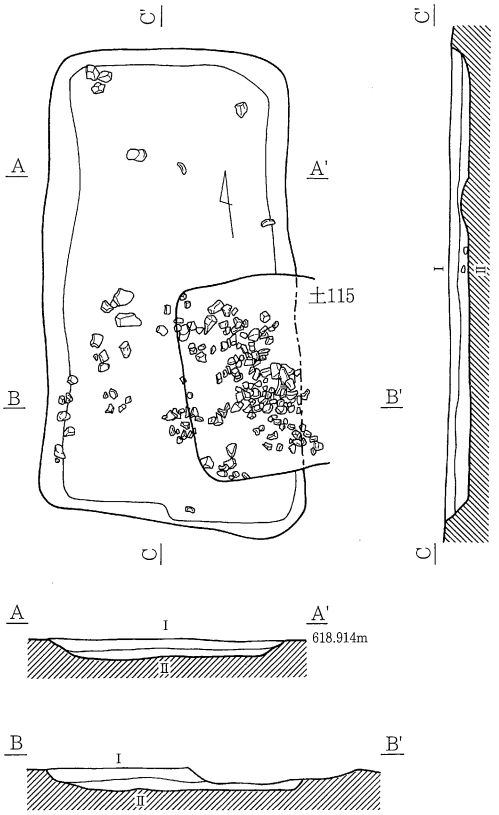
第3号竪穴状遺構



Ⅰ：灰黄褐色粘質土（φ0.5～2cm礫・炭少量）
Ⅱ：暗褐色粘質土（φ0.5～1cm礫少量）
Ⅲ：灰黄褐色粘質土（炭少量）
Ⅳ：黄褐色粘質土（炭少量）

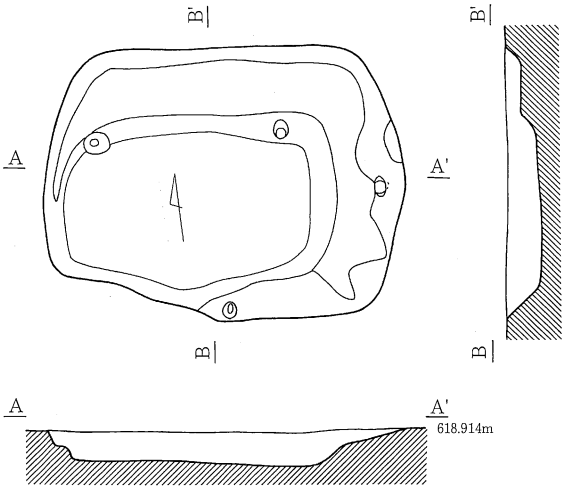
第11図　　住居址・竪穴状遺構（1）

第4号竪穴状遺構



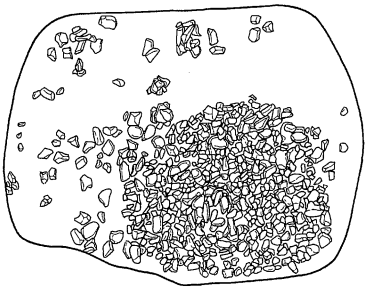
Ⅰ：黄褐色土（炭・φ0.5cm礫少量）
Ⅱ：灰黄褐色粘質土（炭・φ0.5～1cm礫少量）

第5号竪穴状遺構

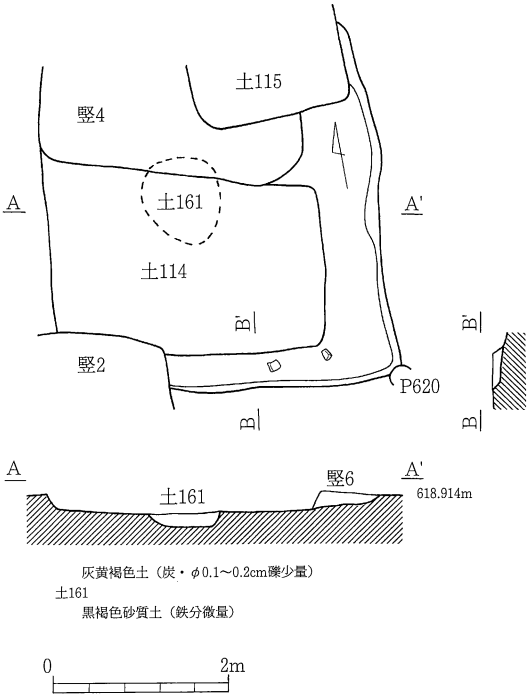


黄褐色土（炭・焼土塊・φ0.5cm礫少量、褐色土塊微量）

竪5 礫出土状況

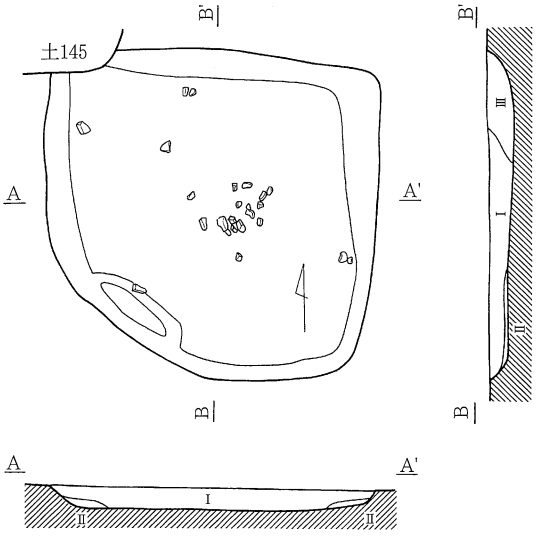


第6号竪穴状遺構



灰黄褐色土（炭・φ0.1～0.2cm礫少量）
土161
黒褐色砂質土（鉄分微量）

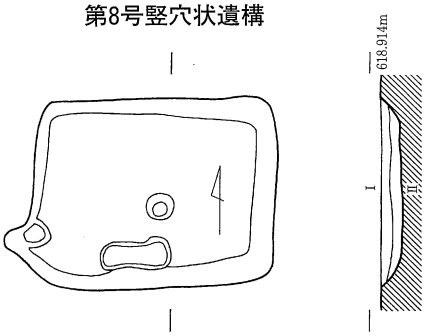
第7号竪穴状遺構



Ⅰ：灰黄褐色粘質土（炭・φ0.5～2cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土（炭少量）
Ⅲ：暗褐色土（炭少量、φ0.5～2cm礫中量）

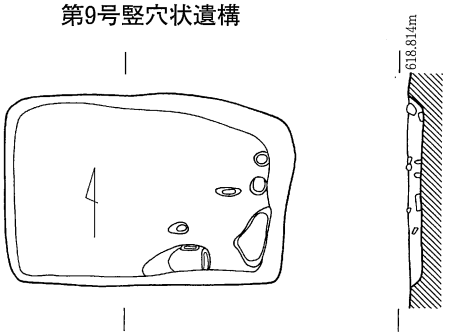
第12図　竪穴状遺構（2）

第8号竪穴状遺構



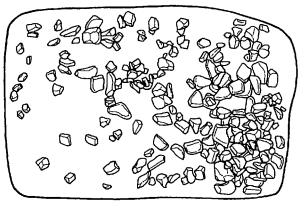
Ⅰ：暗褐色土（炭少量・φ0.5cm礫中量）
Ⅱ：灰黄褐色粘質土（炭・焼土粒少量）

第9号竪穴状遺構

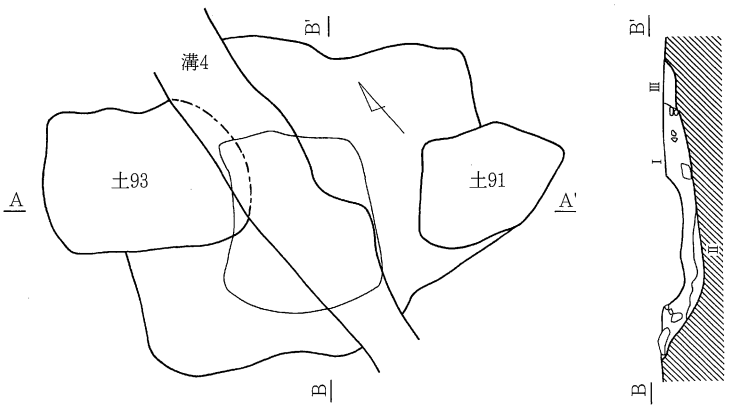


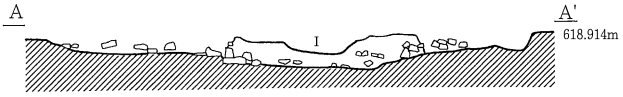
暗褐色砂質土（焼土粒・φ2～3cm礫微量）

竪9 礫出土状況



第10号竪穴状遺構

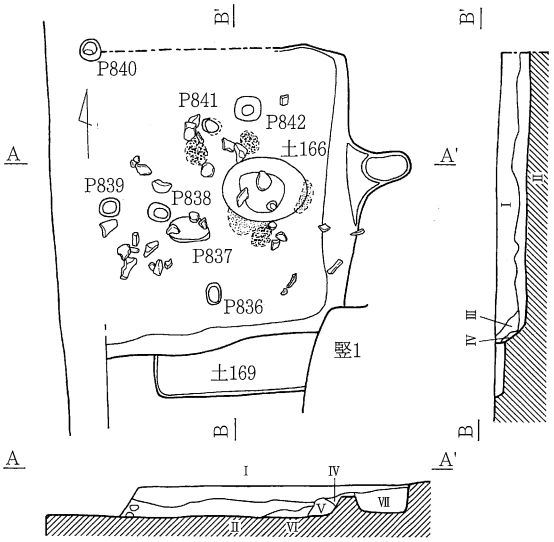




Ⅰ：褐灰色粘質土（炭・焼土粒少量、φ10～30cm礫多量）
Ⅱ：黒褐色土（焼土塊・炭・φ2～5cm礫少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5～1cm礫中量）

竪10 礫出土状況

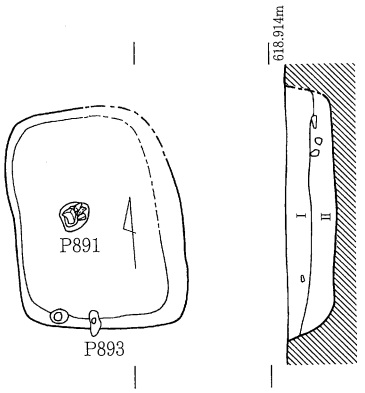
第11号竪穴状遺構



Ⅰ：暗褐色土（φ0.2～0.3cm礫中量）
Ⅱ：暗褐色砂質土（赤茶色土粒・黄褐色土粒少量、炭化物微量）
Ⅲ：暗褐色土（赤茶色土粒中量）
Ⅳ：暗褐色土（黄褐色土粒中量）
Ⅴ：暗褐色土（黄褐色土粒多量、赤茶色土粒・炭化物少量）
Ⅵ：黒褐色砂質土（赤茶色土粒・炭化物少量）
Ⅶ：暗褐色砂質土（黄褐色土粒微量）
土169　暗褐色砂質土（黄褐色土粒・茶褐色土粒微量）

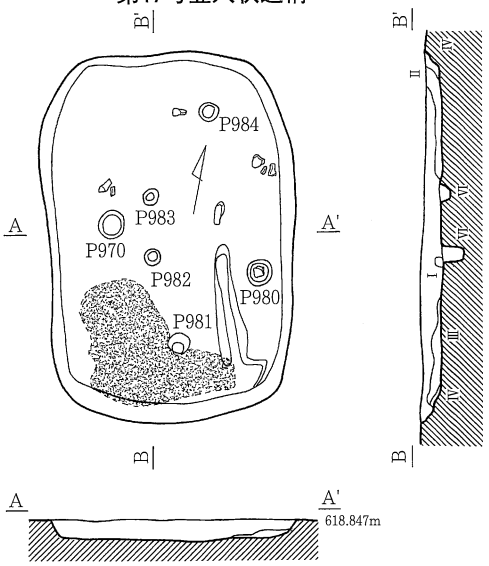
第13図　　竪穴状遺構（3）

第12号竪穴状遺構



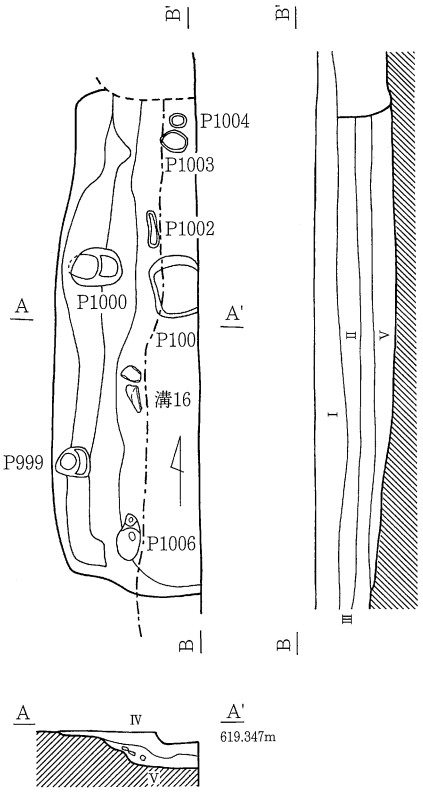
Ⅰ：黄褐色土（φ1～30cm礫多量）
Ⅱ：黒褐色砂質土（φ0.5cm礫・炭少量）

第17号竪穴状遺構



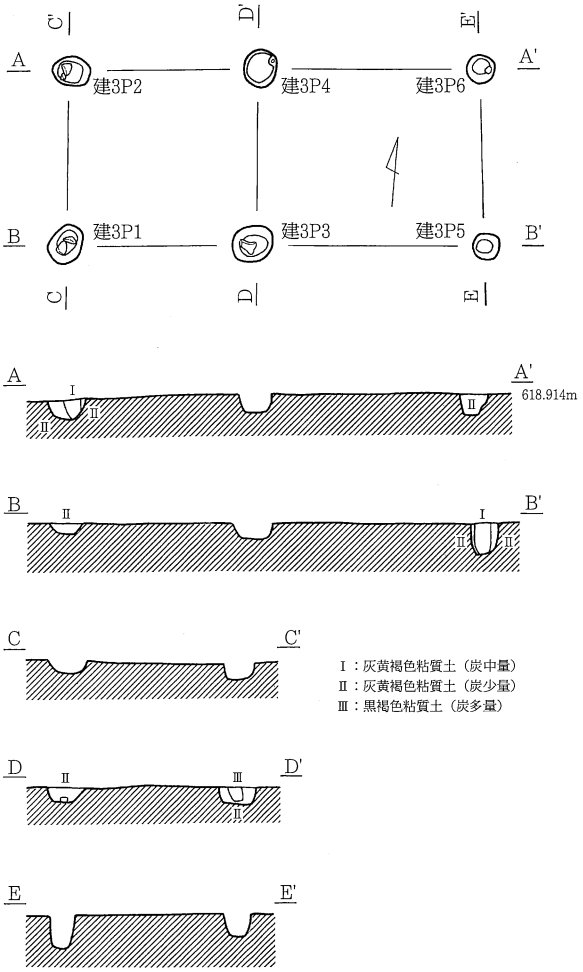
Ⅰ：暗褐色砂質土（鉄分中量、黄褐色土粒少量、φ0.5～1cm礫微量）
Ⅱ：黒褐色砂質土（鉄分多量、炭化物少量）
Ⅲ：黒褐色砂質土（炭化物・焼土粒中量）
Ⅳ：黒褐色砂質土（鉄分多量）
Ⅴ：黒褐色粘質土（鉄分多量、黄褐色粘質土塊少量）
Ⅵ：灰黄褐色粘質土（炭少量）

第18号竪穴状遺構



Ⅰ：表土
Ⅱ：耕作土
Ⅲ：暗褐色土（黄褐色土粒・φ0.3～0.5cm礫微量）
Ⅳ：黒褐色粘質土（黄褐色土粒微量）
Ⅴ：暗褐色粘質土（φ0.1～0.3cm礫中量、炭化物・橙色土粒微量）

第3号掘立柱建物址

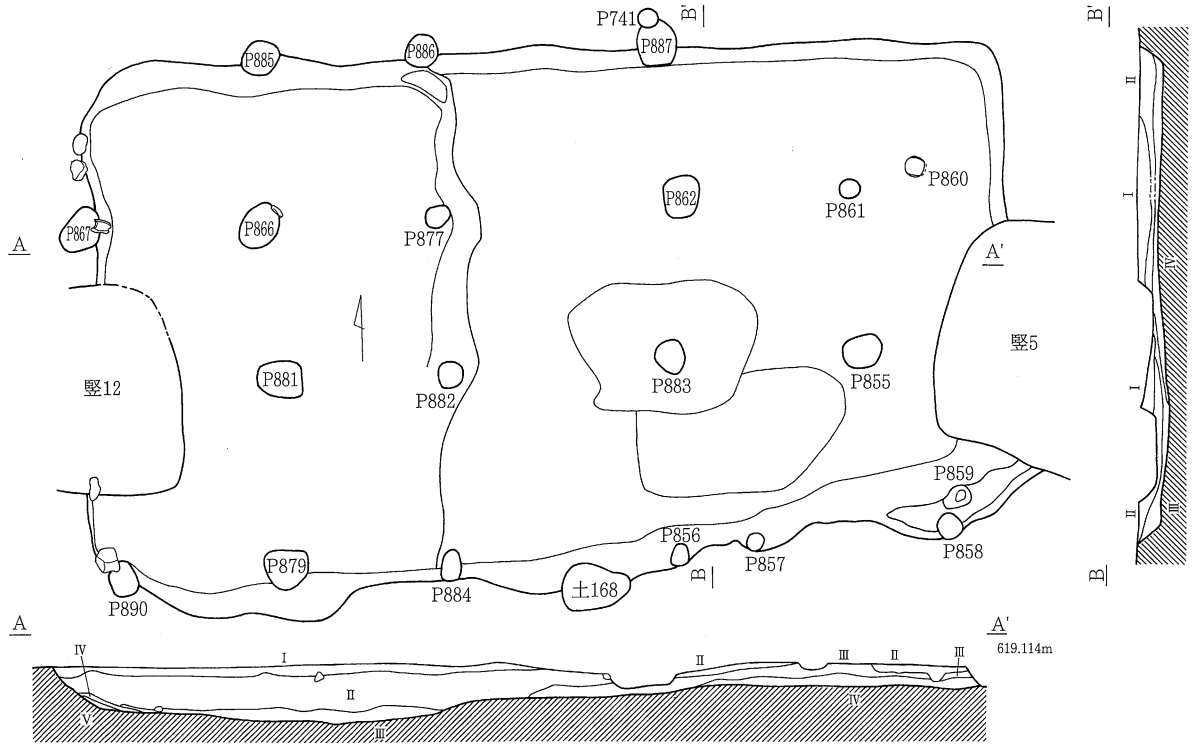


Ⅰ：灰黄褐色粘質土（炭中量）
Ⅱ：灰黄褐色粘質土（炭少量）
Ⅲ：黒褐色粘質土（炭多量）

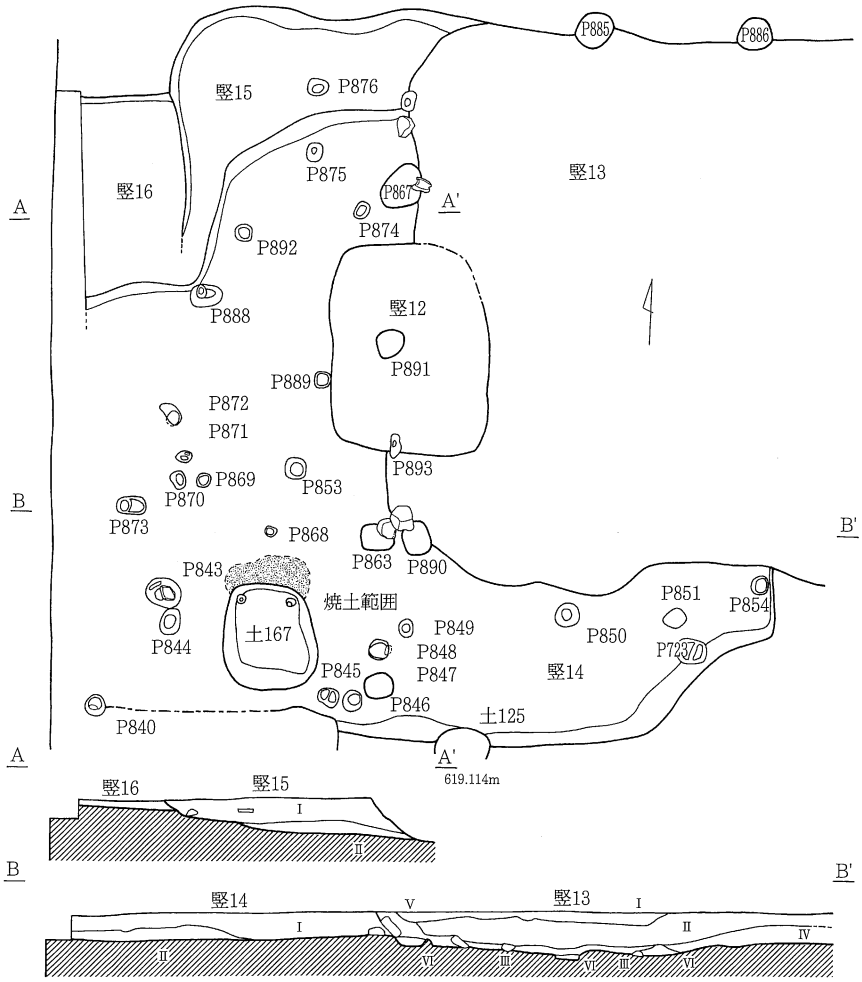
0　2m

第14図　竪穴状遺構（4）・掘立柱建物址（1）

第13号竪穴状遺構



第14・15・16号竪穴状遺構



竪13
A
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5～1cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（φ1～3cm礫多量）
Ⅲ：黒褐色土（炭中量、φ0.5～1cm礫少量）
Ⅳ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量、鉄分含）
Ⅴ：黒褐色粘質土（炭化物多量）
B
Ⅰ：黒褐色土（φ1～3cm礫多量）
Ⅱ：黒褐色土（炭中量、φ0.5～1cm礫少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量、鉄分含）
Ⅳ：灰黄褐色粘質土（炭少量）

A
竪15
Ⅰ：黄褐色砂質土（φ0.1cm礫・橙色土粒少量）
Ⅱ：暗褐色砂質土（φ0.1cm礫中量、鉄分少量）
竪16
暗褐色砂質土（φ0.1cm礫・橙色土粒微量）

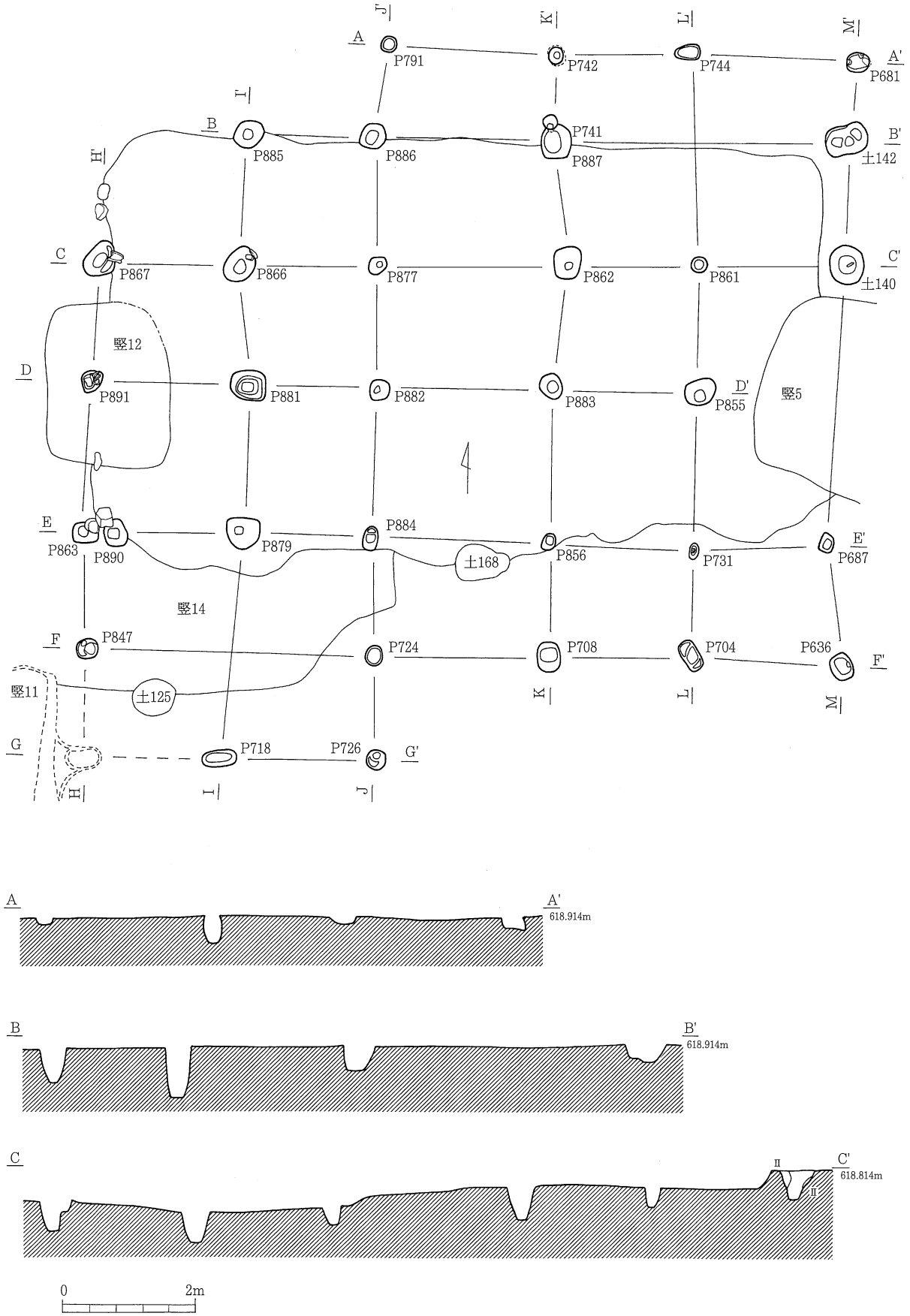
B
竪13
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5～1cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（φ1～3cm礫多量）
Ⅲ：黒褐色土（炭中量、φ0.5～1cm礫少量）
Ⅳ：黒褐色土（黄褐色土塊多量）
Ⅴ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量、鉄分含）
Ⅵ：灰黄褐色粘質土（炭少量）
竪14
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量、褐色土塊中量）
Ⅱ：暗褐色土（橙色土粒・炭化物中量）

0　2m

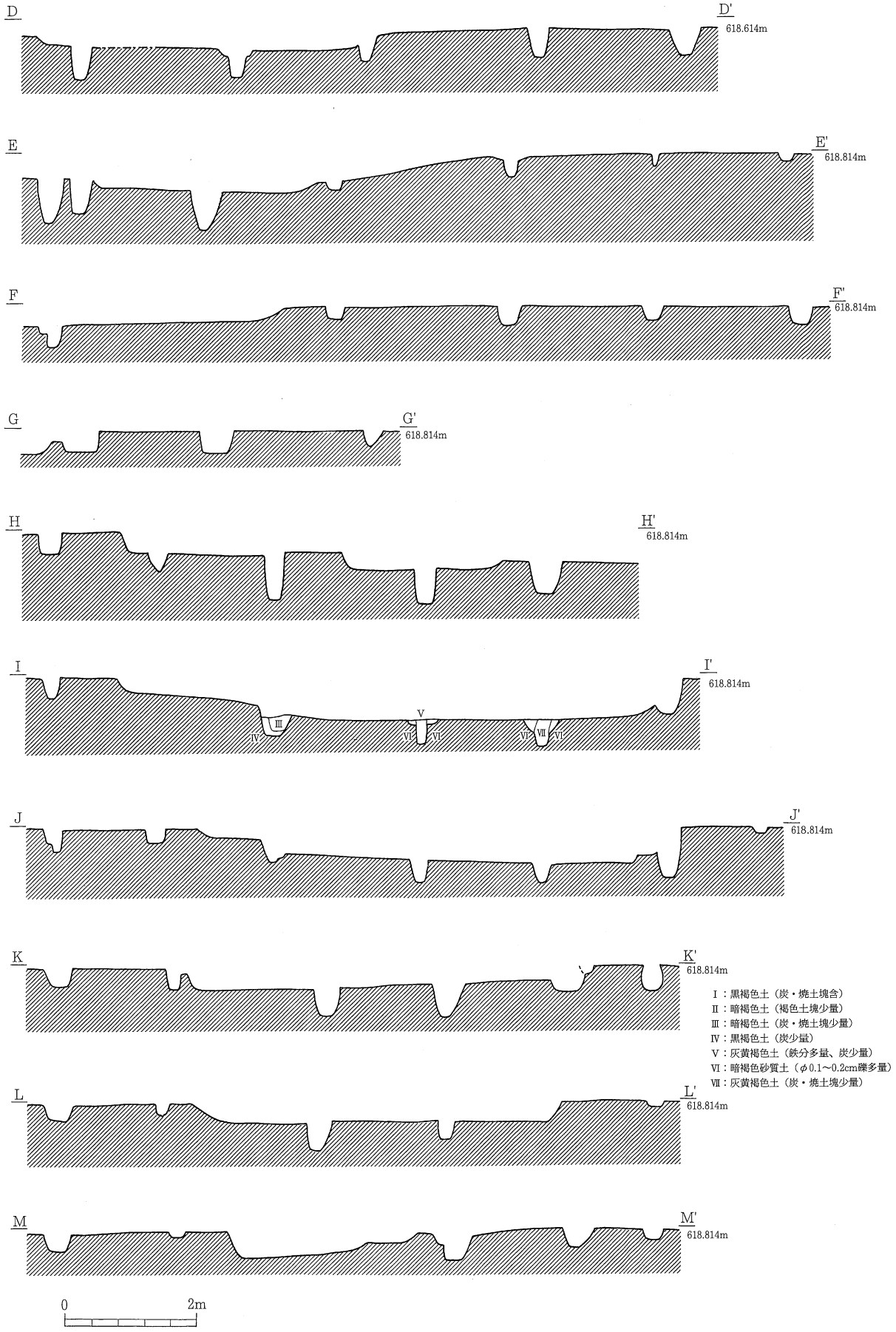
第15図　竪穴状遺構（5）

第16図　　竪穴状遺構（6）

第4号掘立柱建物址



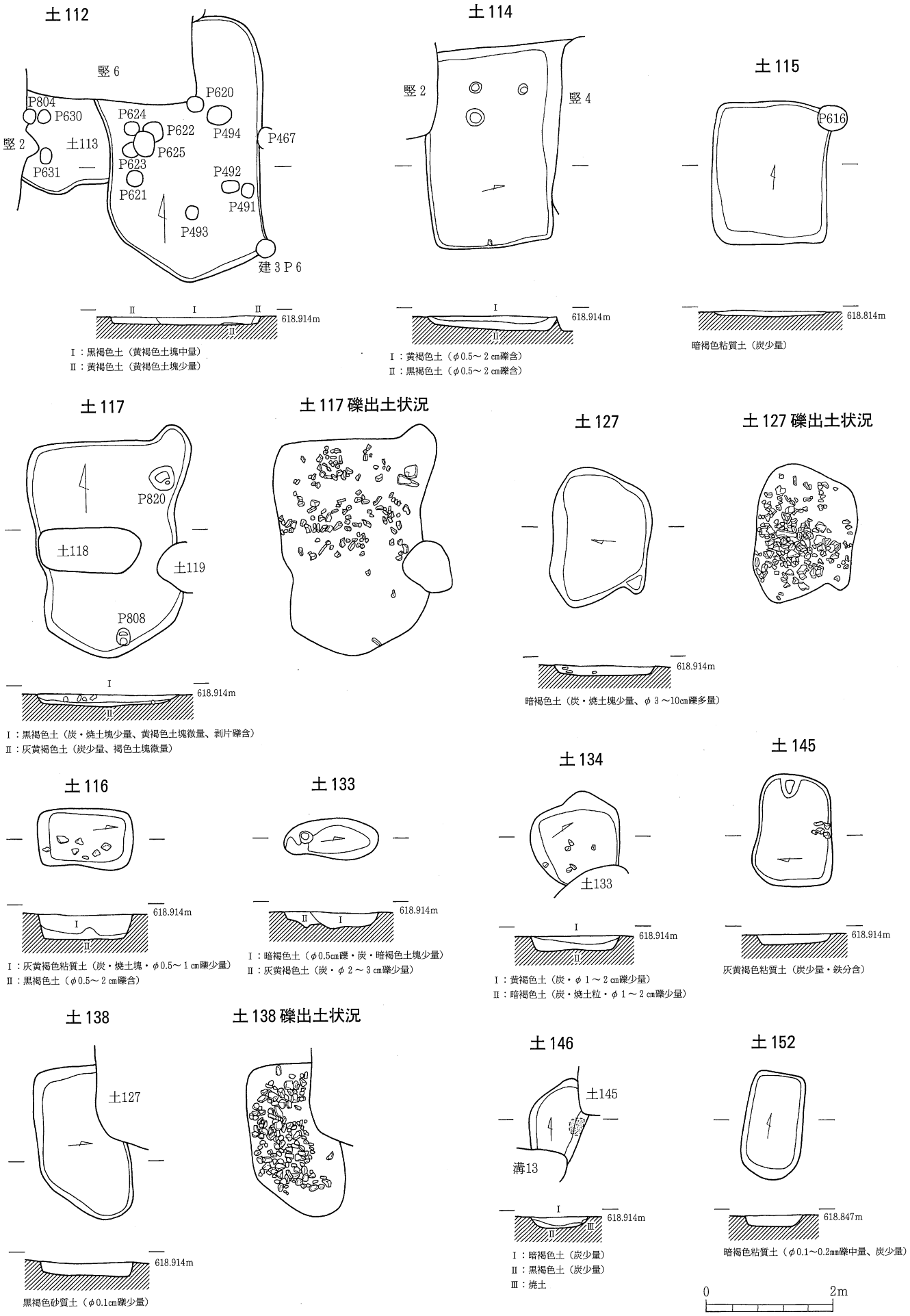
第17図　　掘立柱建物址（2）



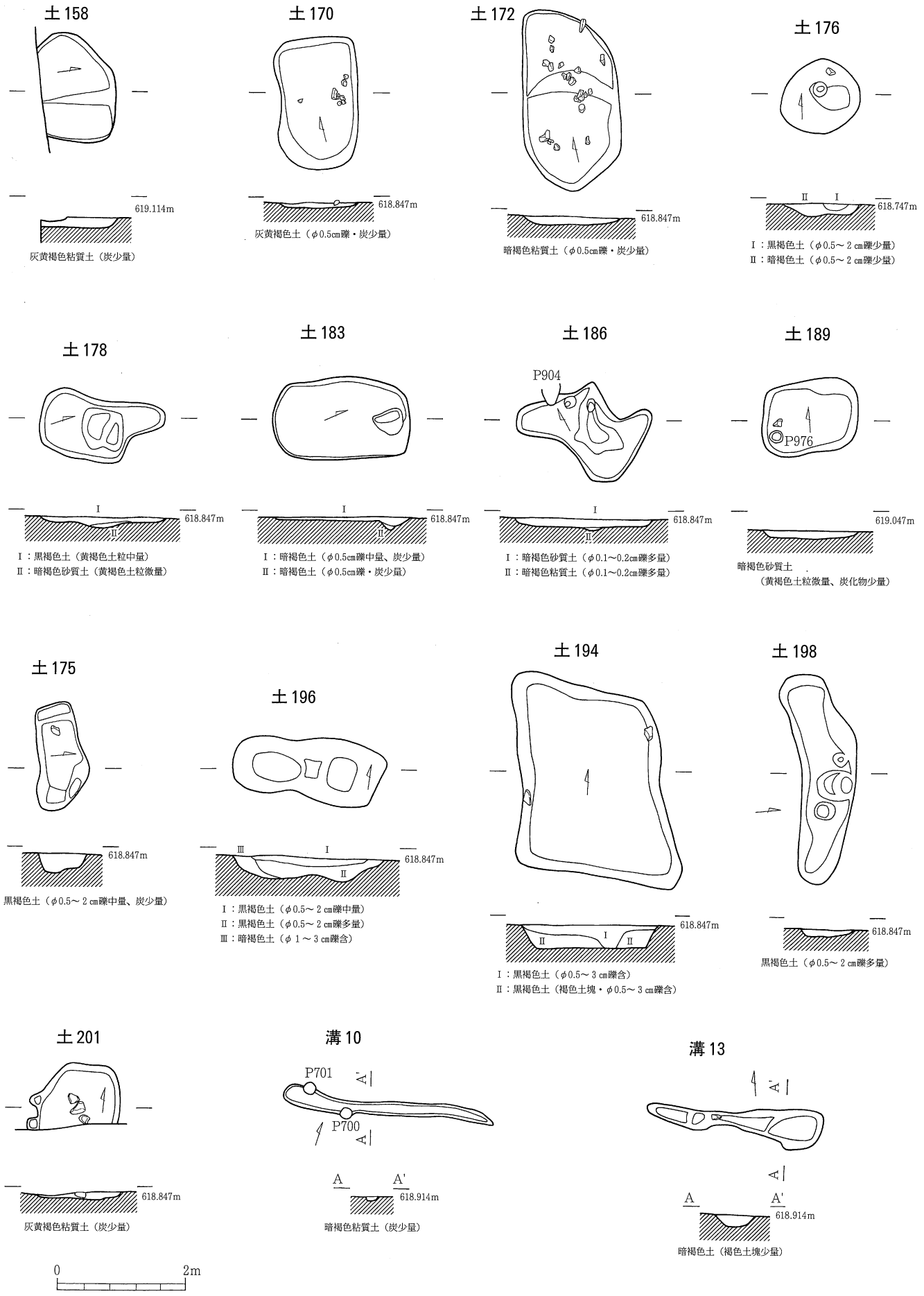
第18図　　掘立柱建物址（3）

土73
土74
619.014m
Ⅰ：暗褐色粘質土（炭・焼土少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土（炭少量）
土74
618.914m
灰黄褐色粘質土（炭少量）
土75
618.914m
Ⅰ：暗褐色粘質土（炭・焼土塊少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土（炭・焼土塊・φ10～30cm礫含）
土75礫出土状況
土80
619.014m
Ⅰ：暗褐色粘質土（炭少量）
Ⅱ：黒褐色粘質土（炭少量）
土82
618.914m
暗褐色土（φ0.5～2cm礫多量）
土79
P702
618.914m
土79遺物・礫出土状況
Ⅰ：暗褐色粘質土（褐色土塊少量）
Ⅱ：灰黄褐色粘質土（炭少量）
Ⅲ：黒褐色粘質土（炭少量）
土83
溝11
土82
618.914m
暗褐色土（φ0.5～2cm礫中量、炭少量）
土89
溝6
618.914m
Ⅰ：暗褐色砂質土（鉄分微量、φ0.2～0.3cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色砂質土（φ0.2～1cm礫中量）
土91
618.914m
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5～15cm礫多量）
Ⅱ：暗褐色土（φ15cm礫多量、炭少量）
土93
溝4
618.914m
灰黄褐色土（炭少量）
土106
618.914m
黒褐色土（炭・焼土塊・φ0.1～0.2cm礫少量）
土95
土100
619.014m
暗褐色砂質土（φ0.1cm礫・黄褐色土粒微量）
土96
P475
P474
618.914m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～0.2cm礫中量、炭少量）
Ⅱ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量）
土162　土102
619.014m
土102　暗褐色砂質土（黄褐色土粒少量）
土162　Ⅰ：黒褐色土（φ0.3～0.5cm礫多量）
Ⅱ：暗褐色土（φ1～2cm礫多量）
Ⅲ：黒褐色土（炭少量）
土107
618.914m
灰黄褐色土（炭・焼土塊少量）
0　2m
土108
P815
P814
618.914m
暗褐色土（炭φ0.1～0.2cm礫少量、鉄分含）
土109
618.914m
Ⅰ：暗褐色土（炭φ0.5cm礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（炭・灰黄褐色土塊少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.5～1cm礫中量）
土110
618.914m
暗褐色土（炭・φ0.5cm礫少量）

第19図　　土坑（1）

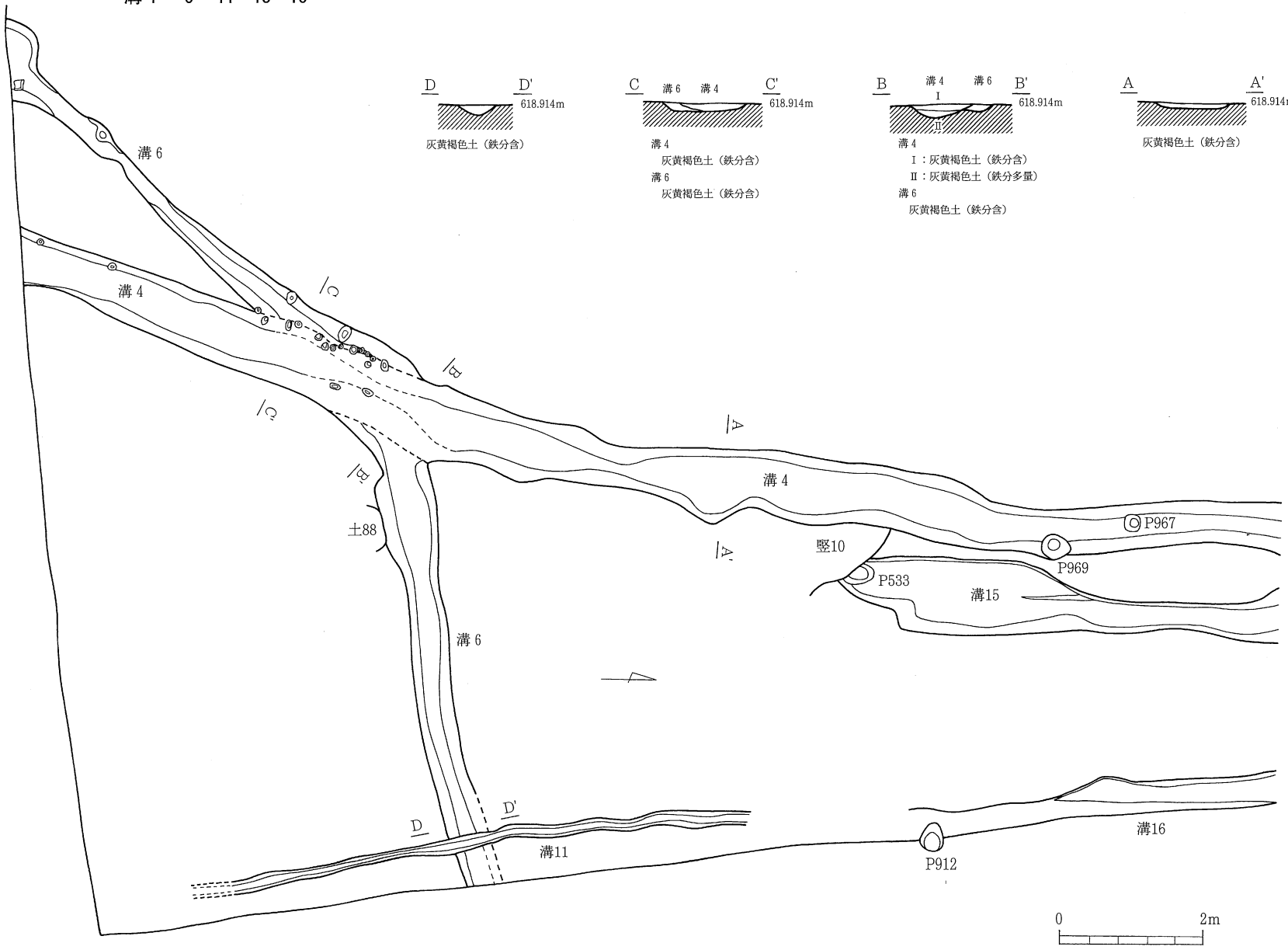

土112
竪6
P804
P630
竪2
土113
P631
P624
P622
P625
P623
P621
P620
P494
P467
P492
P491
P493
建3P6
618.914m
Ⅰ：黒褐色土（黄褐色土塊中量）
Ⅱ：黄褐色土（黄褐色土塊少量）
土114
竪2
竪4
618.914m
Ⅰ：黄褐色土（φ0.5～2㎝礫含）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.5～2㎝礫含）
土115
P616
618.814m
暗褐色粘質土（炭少量）
土117
P820
土118
土119
P808
618.914m
Ⅰ：黒褐色土（炭・焼土塊少量、黄褐色土塊微量、剥片礫含）
Ⅱ：灰黄褐色土（炭少量、褐色土塊微量）
土117礫出土状況
土127
618.914m
暗褐色土（炭・焼土塊少量、φ3～10㎝礫多量）
土127礫出土状況
土116
618.914m
Ⅰ：灰黄褐色粘質土（炭・焼土塊・φ0.5～1㎝礫少量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.5～2㎝礫含）
土133
618.914m
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5㎝礫・炭・暗褐色土塊少量）
Ⅱ：灰黄褐色土（炭・φ2～3㎝礫少量）
土134
土133
618.914m
Ⅰ：黄褐色土（炭・φ1～2㎝礫少量）
Ⅱ：暗褐色土（炭・焼土粒・φ1～2㎝礫少量）
土145
618.914m
灰黄褐色粘質土（炭少量・鉄分含）
土138
土127
618.914m
黒褐色砂質土（φ0.1㎝礫少量）
土138礫出土状況
土146
土145
溝13
618.914m
Ⅰ：暗褐色土（炭少量）
Ⅱ：黒褐色土（炭少量）
Ⅲ：焼土
土152
618.847m
暗褐色粘質土（φ0.1～0.2㎜礫中量、炭少量）
0
2m

第20図　土坑（2）

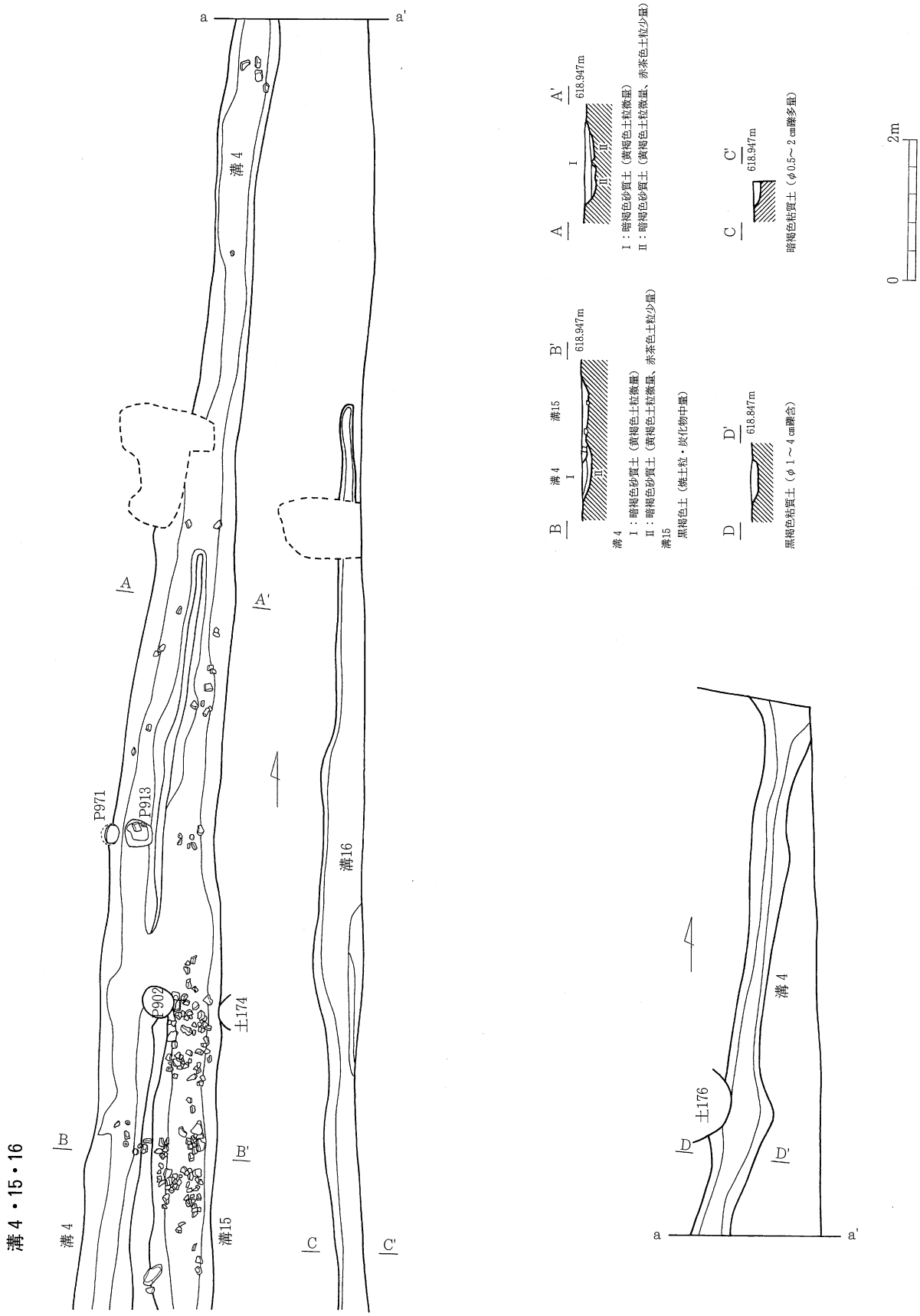

土158
619.114m
灰黄褐色粘質土（炭少量）
土170
618.847m
灰黄褐色土（φ0.5cm礫・炭少量）
土172
618.847m
暗褐色粘質土（φ0.5cm礫・炭少量）
土176
Ⅱ Ⅰ
618.747m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.5～2cm礫少量）
Ⅱ：暗褐色土（φ0.5～2cm礫少量）
土178
Ⅰ
Ⅱ
618.847m
Ⅰ：黒褐色土（黄褐色土粒中量）
Ⅱ：暗褐色砂質土（黄褐色土粒微量）
土183
Ⅰ
Ⅱ
618.847m
Ⅰ：暗褐色土（φ0.5cm礫中量、炭少量）
Ⅱ：暗褐色土（φ0.5cm礫・炭少量）
土186
P904
Ⅰ
Ⅱ
618.847m
Ⅰ：暗褐色砂質土（φ0.1～0.2cm礫多量）
Ⅱ：暗褐色粘質土（φ0.1～0.2cm礫多量）
土189
P976
619.047m
暗褐色砂質土
（黄褐色土粒微量、炭化物少量）
土175
618.847m
黒褐色土（φ0.5～2cm礫中量、炭少量）
土196
Ⅲ Ⅰ
Ⅱ
618.847m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.5～2cm礫中量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.5～2cm礫多量）
Ⅲ：暗褐色土（φ1～3cm礫含）
土194
Ⅱ Ⅰ Ⅱ
618.847m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.5～3cm礫含）
Ⅱ：黒褐色土（褐色土塊・φ0.5～3cm礫含）
土198
618.847m
黒褐色土（φ0.5～2cm礫多量）
土201
618.847m
灰黄褐色粘質土（炭少量）
溝10
P701
P700
A
A'
618.914m
暗褐色粘質土（炭少量）
溝13
A
A'
618.914m
暗褐色土（褐色土塊少量）
0
2m

第21図　土坑（3）・溝（1）

溝4・6・11・15・16



第22図　溝（2）


溝4・15・16
a
a'
溝4
溝15
溝16
A
A'
B
B'
C
C'
P971
P913
P902
土174
土176
D
D'
618.947m
I：暗褐色砂質土（黄褐色土粒微量）
II：暗褐色砂質土（黄褐色土粒微量、赤茶色土粒少量）
黒褐色土（焼土粒・炭化物中量）
暗褐色粘質土（φ0.5～2cm礫多量）
黒褐色粘質土（φ1～4cm礫含）
0
2m

第23図　溝（3）

第４章　第４次調査

１節　調査概要

調査対象地は第３次調査地の東と第２次調査地北の２箇所である。今回は第３次調査に引き続き、隣接する厚生年金福祉施設の代替地の調査である。調査ではまず調査範囲を限定するため数箇所でトレンチによる確認調査を行った。その結果、広く一帯に遺構が残存していることが判明したため、これをもとにＡ区・Ｂ区の２地区を設定した。なおＡ・Ｂ両区はあぜを隔ててほぼ接するように設定したため、本書の中ではＡ・Ｂ区として統合して報告する。また、調査地域の北西部、第２次調査Ａ区の北にも若干の遺構が確認できたため、これをＣ区とし調査を行った。各調査区の面積はＡ・Ｂ区：1,020㎡（Ａ区710㎡、Ｂ区310㎡）、Ｃ区：266㎡である。Ａ・Ｂ区は第２次調査座標上の任意の点を座標原点（NS0・EW0）としてグリットを設定し測量を行った。なおＡ・Ｂ区座標原点は第２次調査座標のN59・E90に相当する。Ｃ区は任意の点を座標原点（NS0・EW0）として調査を行い、後に国家基準座標Ｘ＝19931.500　Ｙ＝－47877.270を移設した。現場での測量は座標原点を基準に３ｍのグリットを設定し、それを基準として行った。標高は各々任意の点にＢＭを設置し、後にＡ区BM＝619.242m　Ｃ区BM＝619.442mを移設した。測量図は1/20の縮尺で作成した。

発掘調査はまずＡ区から行った。掘削には大型建設機械を使用し、耕作土と基盤土を除去した。次に人力により遺構検出作業を行い遺構の特定を行った。遺構検出が終了し、確定したものから遺構番号を付し掘り下げを行った。遺構番号は第３次調査の続きから付した。遺構の状況や土層断面、遺物の出土状況などの記録は写真と測量図により行った。Ａ区の調査がある程度まで終了した段階でＢ区・Ｃ区の調査を開始した。Ａ・Ｂ区調査終了の後、ラジコンヘリコプターにより航空写真を撮影した。Ａ・Ｂ・Ｃ区作業終了後に調査区の埋め戻しを行い、調査を終了した。

２節　調査成果

調査期間：平成17年１月17日～５月31日

調査面積：総面積　1,286㎡

Ａ区710㎡　　Ｂ区310㎡　　Ｃ区266㎡

検出遺構：竪穴住居址　　６軒（Ａ・Ｂ区５軒　Ｃ区１軒）（奈良・平安時代１、鎌倉時代）

竪穴状遺構　　７基（Ａ・Ｂ区５軒　Ｃ区２軒）（鎌倉時代）

土坑　　246基

ピット　　800基

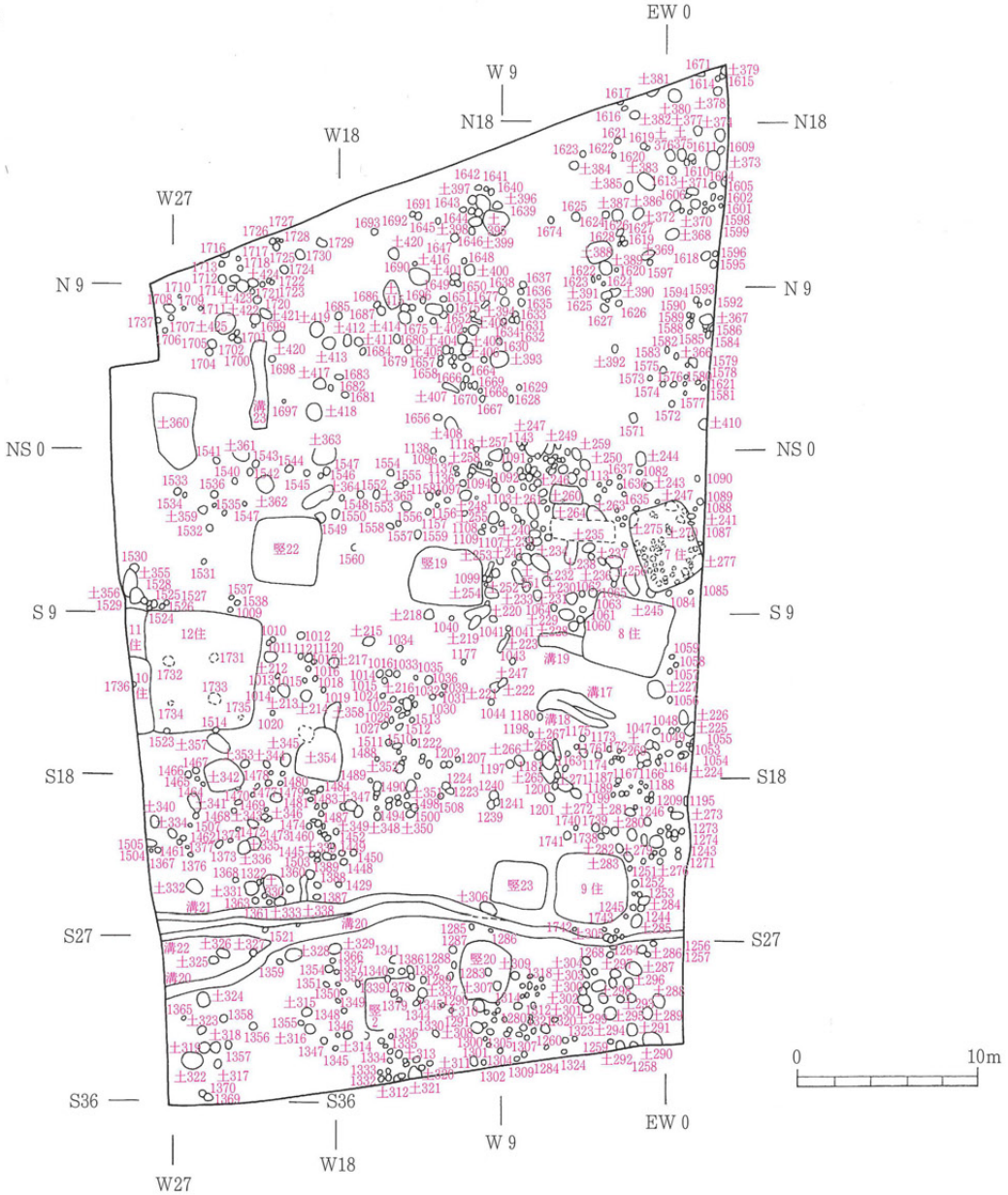
溝　　９条

出土遺物：土師器・須恵器・灰釉陶器　　（奈良・平安時代）

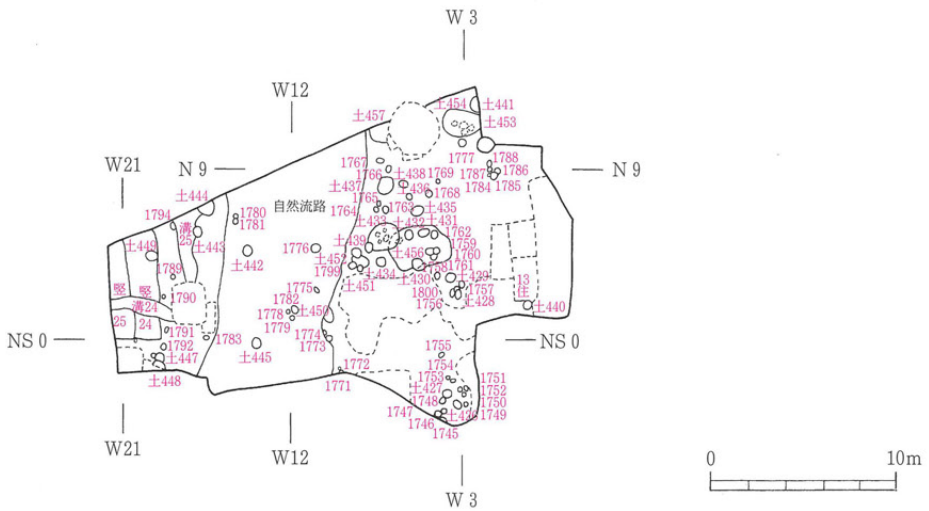
土師質土器・須恵質陶器・東海系無釉陶器・青磁・白磁・鉄器　　（鎌倉時代）

縄文土器・石器　　（縄文時代）　など

4 A・B



4 C



第24図　　第４次調査遺構配置図

3節　出土遺構

第4次調査では調査地東部をA・B区、北西部をC区として調査した。A・B区は今回の調査の中で最も田川に近い調査区となる。そのためか遺構面には洪積層が顕著にみられ、砂礫層と褐色土層がマーブル状に入り組んでいることが見て取れる。砂礫層中での遺構の検出が困難を極めたことも要因してか、遺構密度は砂礫層中が低く、褐色土中は高いという傾向がみられる。

竪穴住居址

A・B区で5軒、C区で1軒の住居が確認できた。以下代表的な住居について概観する。

8住

1住の南西、調査区北東部で検出された。方形の住居で主軸はN-72°-Wであると思われる。覆土は1層しか残されておらず、深さも7㎝と浅いため住居上面は削られてしまったものと考える。床面からはいくつかのピットが検出されたが、その内P3・7・11・13が柱穴であると思われる。カマドは西壁中央付近にみられる。火床面と思われる焼土の広がりは顕著にみられるが、やはり上面が削られているためか袖部の痕跡はわずかしか認められなかった。

11住

10住の北にあたり、10・12住に切られる。10住同様西半は調査区外にあたるが、その位置や様相から第3次調査竪18がこれの一部であると思われる。仮に竪18が同一の遺構であれば、長軸5.3mの住居となる。床面には硬化がみられたが、柱穴・カマドの痕跡は確認できなかった。

12住

10・11住の東部にあたり、10住に切られ11住を切る。長軸6.5mとやや大きめな住居である。床面には硬化がみられるが、一部下層の礫が顔を出している。柱穴は4本確認でき、P1731～1734が該当する。また、住居北壁から東壁にかけて壁面に炭化物が集中していた。炭化物は壁に沿って斜めに堆積しており、焼土等被熱した痕跡はみられなかったので、堆積中に住居北東側から流入したものであると思われる。

13住

C区東端に広がる撹乱範囲の中で検出された。そのためほぼ撹乱に切られており詳細は不明である。残存している部分は住居南壁であると思われ、床面硬化と共に焼土層が確認できた。これがカマドであるかは不明である。位置的に第3次調査遺構集中区に関するものである可能性も考えられる。

竪穴状遺構

計8基の竪穴状遺構が確認された。多くが方形を呈しており、ほぼ真北ないしは真東を向いている。規模は2.5～4mの中でまとまっており、竪24・25のみ5m程度と若干大きくなっている。これらの竪穴状遺構は覆土中に打ち欠いた礫が多量に入れられているものが多くみられる（竪19・20・21・22・23・26）。特に竪20・23・26には大量の礫がみられ、深さも60㎝以上と他に比べて深くなっていた。これらは調査区南西において近接しており、何らかの意図をもって礫を入れたものと考えられる。

竪19

調査区北寄りに位置する。一辺4m程の範囲に礫が集中していた。掘り込みは浅く、どちらかといえば集石に近い様相を呈している。覆土中には焼土・炭化物が多量にみられ、一部礫に付着したものもみられたため、被熱面こそないもののこの場所で火の使用があった可能性は十分考えられると思われる。

竪20

調査区南東部で検出された。径約3mと小形の円形を呈するが深さは64㎝と深い。覆土は8層から成り、レンズ状の堆積を示している。覆土中間層には多量の礫がみられた。礫は総じて打ち欠かれており、人為的

に投げ込まれたものであると思われる。

竪23

調査区南東、竪26に近接して検出された。長軸がほぼ真北を向く方形の竪穴状遺構であり、覆土中にはやはり打ち欠いた礫が多量にみられた。竪26よりは長軸3.2mと小さめではあるが、長軸方向や様相が酷似しているため、恐らく関連する遺構であると思われる。

竪26

竪23に接するように検出された。調査当初は竪穴住居址として調査をしたが、その様相から竪穴状遺構に変更した。約４mの方形を呈しており、覆土中には大量の礫が投じられていた。礫には打ち欠かれた中礫群と割られた形跡のみられない大礫群がみられ、中礫群は中央から南部にかけて、大礫群は覆土下部壁面に沿って集中している傾向がある。恐らく投げ込まれる過程で偏りが生じたのであろう。おおよそすり鉢状を呈しているが、中段から極端に角度がきつくなっている。特に北側は階段状にテラスが形成されていた。また、このテラスの一部に他と比べて緩やかになっている箇所が見られた。その幅や位置からして入り口施設である可能性が考えられるであろう。底面には柱穴と思われる痕跡はみられず、遺構の縁に沿ってピットが並んで見られた。また、床面中央には若干の窪みが確認された。

溝

溝は８条検出された。多くの溝は小規模なものであり、調査区全体に散在しているが、溝20～22の３条のみまとまりを示している。これらの溝はＡ区南部を横断しており、溝21・22は第３次調査溝16に、溝20は第３次調査溝６につながるものであると思われる。これらは総じて覆土に鉄分を含んでおり、緩やかではあるが流水があった痕跡が認められる。また、溝20・21・22の底面には径10cm程の小ピットが多数みられた。これらは調査区やや西よりに集中しているが、その出土位置に一定の法則は認められないため、治水等ではなく、橋やしがらみを設置していた可能性も考えられるであろう。

土坑・ピット

各地区通じて多くの土坑が検出された。第２・３次調査と変わって調査区全域に渡ってみられるが、砂礫層中には土坑が少ないという傾向がみられる。以下代表的なものについて述べる。

土354

Ａ区中央に位置する大形の土坑である。長軸約３mと大形ではあるが深さは15cm程と浅い遺構である。覆土中には多量の打ち欠かれた礫が入れられており、竪穴状遺構と同様の特徴を示している。遺構の用途は不明であるがこの様相から竪穴状遺構と関連するものであるかもしれない。

土395

Ｂ区北部で見つかった土坑である。径1.5m程の中規模な土坑の中に打ち欠いた礫が大量に入れられていた。礫には一部被熱したものがみられたが、この遺構内で火を使用した痕跡はみられないため、被熱した礫を投げ込んだものと思われる。

土456

Ｃ区中央で検出された土坑である。全体は深さ20cm程で不整形を呈しているが、土坑中段に不整方形の窪みが形成されており、これが遺構の本体になると思われる。覆土中にはこの窪みに沿うような形で東側に礫が集中していた。これらの礫は人為的に打ち欠かれており、何らかの目的でこの礫を入れたことは確かであろう。また、遺構底面西部からは小規模な集石が確認された。この集石はおおよそ方形に形成されており、中央部には動物骨が並んでいた。この動物骨は馬の歯列であると思われる。歯列は計５本で、一番奥の臼歯以外の歯列が並んでいた。整然と並んでおり、歯冠高も最長5.5cm程であるため５・６歳前後の仔馬であると考えられる。この規模や礫が集中していること、歯列の出土状況からして馬の墓である可能性が考えられるであろう。

第８表　竪穴住居址一覧表

地区	No.	出土位置	平面形	主軸方向	長軸	短軸	深さ	時期	備　　考
A・B	7	EW0 S5	方形		4.4	3.3	5		土242・1086・1087に切られる 土270・274・275・277・P1211～1220・1225～1227・1229～1238・1276・1277・1561～1564・1566～1570を切る
A・B	8	W2 S10	方形	N-72° -W	4.7	4.1	7	8C	溝19を切る
A・B	9								欠番
A・B	10	W29 S14	方形		4.4	<1.0>	30		11・12住を切る P1736に切られる
A・B	11	W29 S10	方形		<2.5>	<0.9>	30		10・12住に切られる
A・B	12	W26 S13	方形	N-98° -W	6.5	<5.8>	23		11住を切る 10住・P1514・1523・1735に切られる
C	13	EW0 N2.5	不明		—	—	20		撹乱によりほぼ消滅　詳細不明

第９表　竪穴状遺構一覧表

地区	No.	出土位置	平面形	主軸方向	長軸	短軸	深さ	時期	備　　考
A・B	19	W12 S7	方形	N-89° -E	3.9	3.0	5	14C	P1099を切る 土220に切られる 覆土中に打ち欠いた礫・炭多量含まれている
A・B	20	W10 S28.5	円形	N-25° -W	3.3	2.9	64	13C後半	土307・P１1283に切られる 多数の礫が投げ込まれている
A・B	21	W16 S30.5	方形	N-2° -E	2.7	2.6	9		P1339に切られる 撹乱により東半消滅 打ち欠いた礫が多数投げ込まれていた
A・B	22	W21 S6	方形	N-5° -E	3.6	3.5	27		P1283・土307に切られる
A・B	23	W21 S6	方形	NS0°	3.2	3.0	64		竪26と関連か
C	24	W20 N3	長方形	N-0.5° -W	5.6	<1.6>	21		竪25・溝24・土449に切られる
C	25	W21 N3	長方形		<5.0>	<1.0>	10		竪24を切る
A・B	26	W4 S24	方形	N-3° -E	4.0	3.8	100		人頭大の礫が投げ込まれている（礫には自然礫と打ち欠かれた礫がみられる）底面中央に窪みあり 北部壁面に窪みあり 入り口の可能性も考えられる 竪5と関連する可能性あり

＊主軸方向が不明であるものが多いため軸方向は長軸方向で掲載している

第10表　土坑一覧表

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
A・B	212	S 11.5 - W 21.6	78	42			
A・B	213	S 13.4 - W 20.9	82	13			
A・B	214	S 13.6 - W 19.7	63	15			
A・B	215	S 10.6 - W 16.4	77	18			
A・B	216	S 14.1 - W 14.2	74	13			
A・B	217	S 11.8 - W 18.2	70	30			
A・B	218	S 9.2 - W 13.0	58	16			
A・B	219	S 9.5 - W 10.5	88	49			
A・B	220	S 9.0 - W 10.2	150	46			
A・B	221	S 13.0 - W 9.4	<50>	23			
A・B	222	S 12.8 - W 9.0	82	21			
A・B	223	S 10.7 - W 8.9	117	25			
A・B	224	S 16.7 - E 1.0	73	21			
A・B	225	S 15.3 - E 1.3	71	24			
A・B	226	S 14.6 - E 1.0	89	13			
A・B	227	S 13.1 - W 0.6	104	29			
A・B	228	S 9.7 - W 5.1	66	8			
A・B	229	S 9.1 - W 5.5	87	12			
A・B	230	S 8.1 - W 5.2	70	19			
A・B	231	S 8.0 - W 7.1	73	13			
A・B	232	S 7.2 - W 6.6	56	27			
A・B	233	S 7.5 - W 7.7	60	26			
A・B	234	S 6.2 - W 6.9	133	40			

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　考
A・B	235	S 5.3 - W 4.3	82	13			
A・B	236	S 6.8 - W 2.9	<67>	21			
A・B	237	S 6.1 - W 2.9	114	18			
A・B	238	S 5.6 - W 5.2	<130>	27			
A・B	239	S 5.0 - W 7.1	56	20			
A・B	240	S 4.6 - W 7.2	68	23			
A・B	241	S 6.0 - W 7.7	70	31			
A・B	242	S 3.5 - E 1.4	50	9			
A・B	243	S 1.9 - W 1.0	52	41			
A・B	244	S 0.4 - W 1.4	80	35			
A・B	245	S 7.8 - W 0.9	54	17			
A・B	246	S 1.0 - W 5.7	58	12			
A・B	247	N 0.2 - W 7.2	<120>	41			
A・B	248	S 2.5 - W 11.0	66	23			
A・B	249	N 0.1 - W 6.5	<62>	29			
A・B	250	S 0.8 - W 4.5	66	25			
A・B	251	S 7.0 - W 8.2	92	15			
A・B	252	S 6.8 - W 9.4	50	14			
A・B	253	S 6.4 - W 9.7	93	15			
A・B	254	S 7.9 - W 9.6	81	32			
A・B	255	S 3.8 - W 9.5	76	25			
A・B	256	S 7.2 - W 2.0	<132>	12			
A・B	257	S 0.3 - W 9.3	80	20			
A・B	258	S 1.1 - W 11.2	124	21			
A・B	259	S 0.2 - W 4.5	73	23			
A・B	260	S 2.4 - W 5.6	192	22			
A・B	261	S 3.4 - W 7.3	94	16			
A・B	262	S 2.3 - W 6.8	58	13			
A・B	263	S 3.4 - W 3.9	<90>	18			
A・B	264	S 3.3 - W 5.2	<93>	16			
A・B	265	S 17.8 - W 6.4	98	24			
A・B	266	S 17.2 - W 8.0	56	36			
A・B	267	S 16.6 - W 6.0	123	10			
A・B	268	S 17.1 - W 6.2	104	31			
A・B	269	S 16.8 - W 1.2	72	22			
A・B	270	S 3.7 - E 0.8	56	17			
A・B	271	S 18.4 - W 5.6	94	50			
A・B	272	S 18.9 - W 4.9	57	61			
A・B	273	S 20.1 - E 0.6	75	23			
A・B	274	S 3.0 - E 0.3	84	12			
A・B	275	S 3.7 - W 1.8	86	13			
A・B	276	S 21.6 - W 0.7	82	16			
A・B	277	S 6.2 - E 1.7	<126>	14			
A・B	278	S 22.2 - W 0.2	48	24			
A・B	279	S 21.6 - W 1.2	72	25			
A・B	280	S 21.2 - W 1.8	64	21			
A・B	281	S 20.0 - W 1.9	60	15			
A・B	282	S 22.0 - W 2.5	54	16			
A・B	283	S 22.4 - W 2.0	58	22			
A・B	284	S 24.9 - W 1.2	68	26			
A・B	285	S 26.0 - W 1.6	77	18			
A・B	286	S 27.6 - W 1.3	59	20			
A・B	287	S 28.6 - W 1.7	94	26			
A・B	288	S 30.4 - W 0.3	83	29			
A・B	289	S 31.1 - W 1.0	70	25			
A・B	290	S 32.5 - W 0.8	<73>	19			

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　考
A・B	291	S 32.0 - W 1.9	77	20			
A・B	292	S 32.8 - W 2.5	<44>	16			
A・B	293	S 30.3 - W 1.9	54	20			
A・B	294	S 31.2 - W 3.0	81	29			
A・B	295	S 30.3 - W 2.5	50	14			
A・B	296	S 29.4 - W 2.0	69	29			
A・B	297	S 29.0 - W 2.7	66	15			
A・B	298	S 29.4 - W 2.9	53	24			
A・B	299	S 30.3 - W 3.4	60	17			
A・B	300	S 29.6 - W 3.6	85	20			
A・B	301	S 30.8 - W 4.3	58	13			
A・B	302	S 30.4 - W 4.5	75	19			
A・B	303	S 28.9 - W 4.4	59	20			
A・B	304	S 28.2 - W 4.4	54	20			
A・B	305	S 26.8 - W 3.2	<22>	9			
A・B	306	S 25.3 - W 9.7	94	37			
A・B	307	S 29.6 - W 9.2	57	37			
A・B	308	S 31.9 - W 10.3	65	24			
A・B	309	S 29.0 - W 8.2	56	47			
A・B	310	S 30.7 - W 10.2	70	42			
A・B	311	S 33.8 - W 10.5	64	26			
A・B	312	S 34.7 - W 15.2	48	14			
A・B	313	S 33.4 - W 14.6	52	9			
A・B	314	S 32.4 - W 17.4	55	16			
A・B	315	S 31.1 - W 19.6	56	24			
A・B	316	S 32.1 - W 19.5	60	7			
A・B	317	S 34.0 - W 24.6	50	5			
A・B	318	S 33.1 - W 24.7	66	15			
A・B	319	S 33.2 - W 25.3	73	29			
A・B	320	S 34.2 - W 13.4	50	10			
A・B	321	S 34.4 - W 13.8	<64>	33			
A・B	322	S 33.8 - W 26.0	122	9			
A・B	323	S 32.2 - W 25.5	46	11			
A・B	324	S 30.6 - W 25.3	85	24			
A・B	325	S 28.3 - W 24.7	53	35			
A・B	326	S 28.0 - W 24.2	73	37			
A・B	327	S 27.8 - W 22.6	52	45			
A・B	328	S 28.0 - W 20.4	84	45			
A・B	329	S 27.6 - W 18.1	64	18			
A・B	330	S 24.2 - W 21.5	133	33			
A・B	331	S 24.3 - W 22.7	91	13			
A・B	332	S 24.3 - W 25.8	90	24			
A・B	333	S 25.0 - W 21.1	64	47			
A・B	334	S 21.3 - W 27.0	63	9			
A・B	335	S 21.8 - W 22.5	75	23			
A・B	336	S 22.1 - W 23.0	90	29			
A・B	337	S 30.0 - W 13.3	58	25			
A・B	338	S 24.4 - W 19.8	(142)	32			
A・B	339	S 22.5 - W 18.5	62	23			
A・B	340	S 20.7 - W 27.9	70	11			
A・B	341	S 19.7 - W 25.7	110	10			
A・B	342	S 18.0 - W 24.0	232	41			
A・B	343	S 20.7 - W 22.6	60	4			
A・B	344	S 17.6 - W 21.8	57	21			
A・B	345	S 17.3 - W 21.8	77	6			
A・B	346	S 19.4 - W 21.4	66	16			

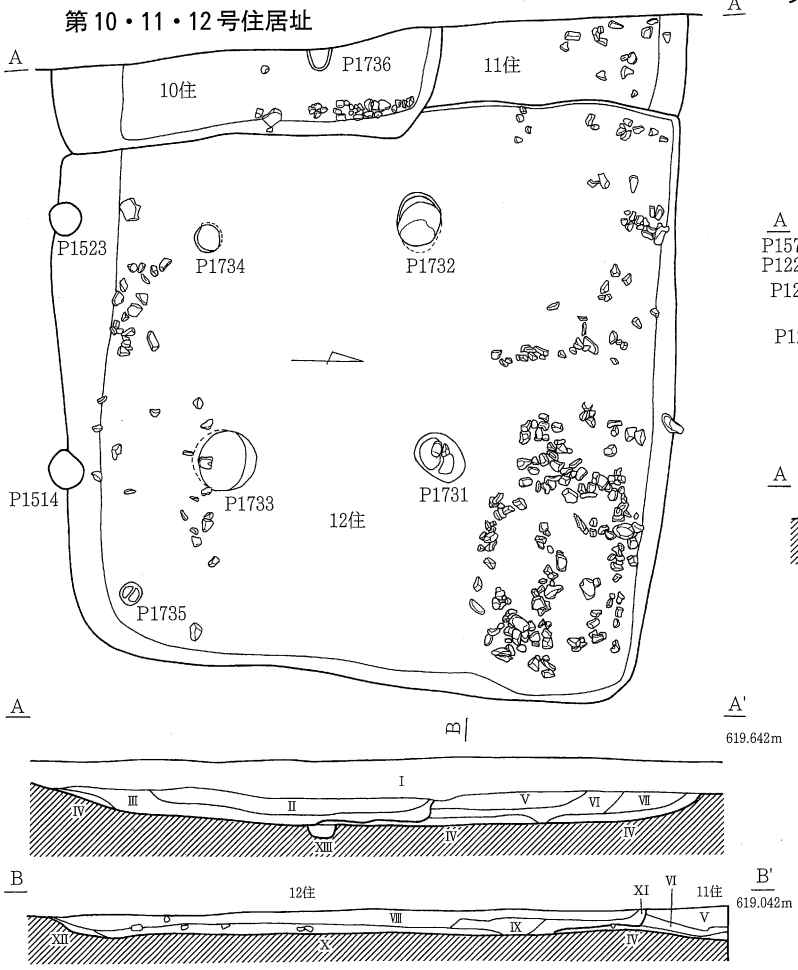
地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
A・B	347	S 19.7 - W 17.3	<75>	29			
A・B	348	S 20.2 - W 15.8	52	23			
A・B	349	S 20.0 - W 16.8	64	15			
A・B	350	S 20.0 - W 13.9	<42>	13			
A・B	351	S 20.0 - W 14.0	60	20			
A・B	352	S 17.7 - W 14.6	56	10			
A・B	353	S 17.5 - W 23.0	60	8			
A・B	354	S 16.8 - W 18.8	302	20	須恵質擂鉢		
A・B	355	S 7.5 - W 29.3	160	42			
A・B	356	S 8.2 - W 29.0	88	42			
A・B	357	S 16.3 - W 24.5	144	45			
A・B	358	S 14.8 - W 18.3	<155>	23			
A・B	359	S 3.4 - W 25.4	56	15			
A・B	360	N 1.0 - W 27.0	420	42			
A・B	361	S 0.4 - W 23.3	90	20			
A・B	362	S 2.0 - W 22.0	92	32			
A・B	363	S 0.4 - W 18.8	142	36			
A・B	364	S 2.8 - W 19.0	204	31			
A・B	365	S 2.0 - W 14.6	58	29			
A・B	366	S 4.9 - E 1.5	59	16			
A・B	367	S 7.3 - E 2.2	75	27			
A・B	368	S 12.0 - E 0.3	73	44			
A・B	369	S 10.8 - W 1.0	77	31			
A・B	370	S 13.5 - E 1.6	60	24			
A・B	371	S 14.3 - E 1.4	57	26			
A・B	372	S 13.6 - E 0.5	58	13			
A・B	373	S 16.1 - E 2.6	90	41			
A・B	374	S 17.5 - E 2.9	72	31			
A・B	375	S 16.4 - E 0.8	70	18			
A・B	376	S 16.3 - E 0.2	65	19			
A・B	377	S 17.7 - E 1.7	60	18			
A・B	378	S 19.9 - E 2.7	50	16			
A・B	379	S 18.6 - E 3.1	60	21			
A・B	380	S 14.9 - E 0.5	75	21			
A・B	381	S 19.9 - W 0.7	98	29			
A・B	382	S 18.6 - W 1.7	59	20			
A・B	383	S 14.9 - W 1.1	110	15			
A・B	384	S 15.7 - W 5.1	53	29			
A・B	385	S 14.6 - W 2.1	57	11			
A・B	386	S 13.1 - W 1.6	68	14			
A・B	387	S 13.0 - W 2.7	67	21			
A・B	388	S 11.0 - W 3.7	141	13			
A・B	389	S 10.0 - W 3.3	75	17			
A・B	390	S 8.7 - W 2.8	50	11			
A・B	391	S 8.6 - W 3.3	62	20			
A・B	392	S 5.6 - W 3.0	48	21			
A・B	393	S 5.0 - W 9.2	112	32			
A・B	394	S 8.2 - W 8.9	52	11			
A・B	395	S 12.6 - W 9.4	152	66			
A・B	396	S 13.6 - W 10.0	<95>	28	縄文土器		
A・B	397	S 13.8 - W 10.6	48	20			
A・B	398	S 13.1 - W 10.3	44	24			
A・B	399	S 12.5 - W 10.5	77	35			
A・B	400	S 9.9 - W 10.8	64	19			
A・B	401	S 9.5 - W 11.6	52	14			
A・B	402	S 7.7 - W 12.8	102	33			

地区	No.	出土位置	径	深さ	出土遺物	時期	備　　考
A•B	403	S 6.6 - W 10.6	65	16			
A•B	404	S 6.1 - W 11.2	64	15			
A•B	405	S 5.5 - W 12.1	59	9			
A•B	406	S 5.5 - W 10.9	82	21			
A•B	407	S 3.4 - W 11.8	96	28			
A•B	408	S 1.4 - W 11.8	73	20			
A•B	409	S 7.1 - W 10.4	64	9			
A•B	410	S 1.5 - E 2.1	58	29			
A•B	411	S 5.9 - W 16.9	56	24			
A•B	412	S 6.0 - W 17.5	75	33			
A•B	413	S 5.8 - W 18.5	73	26			
A•B	414	S 7.2 - W 14.3	85	29			
A•B	415	S 8.5 - W 15.0	158	40			
A•B	416	S 9.5 - W 13.6	115	33			
A•B	417	S 3.6 - W 19.0	68	25			
A•B	418	S 2.0 - W 19.3	104	30			
A•B	419	S 6.6 - W 19.2	92	37			
A•B	420	S 10.8 - W 15.0	60	14			
A•B	421	S 7.4 - W 21.9	78	26			
A•B	422	S 7.2 - W 22.5	64	24			
A•B	423	S 9.0 - W 23.2	72	53			
A•B	424	S 9.1 - W 22.7	60	25			
A•B	425	S 7.0 - W 24.1	123	21			
C	426	N 3.4 - W 3.2	58	19			
C	427	N 2.8 - W 3.8	50	16			
C	428	S 2.4 - W 3.2	53	17			
C	429	S 3.3 - W 3.6	54	28			
C	430	S 4.0 - W 5.4	60	20			
C	431	S 5.7 - W 5.0	67	17			
C	432	S 5.5 - W 5.8	54	21			
C	433	S 5.4 - W 7.2	172	53	青磁碗		
C	434	S 4.1 - W 7.3	60	18			
C	435	S 6.8 - W 5.4	80	48			
C	436	S 7.6 - W 5.8	44	26			
C	437	S 8.2 - W 7.0	102	36			
C	438	S 8.2 - W 6.1	53	19			
C	439	S 5.0 - W 8.0	58	56			
C	440	S 1.8 - E 2.0	50	24			
C	441	S 12.4 - W 2.4	<88>	19			
C	442	S 4.7 - W 14.3	60	47			
C	443	S 5.7 - W 17.0	53	15			
C	444	S 7.0 - W 16.4	94	11			
C	445	N 0.2 - W 13.8	55	23			
C	446						欠番
C	447	N 0.9 - W 18.9	53	16			
C	448	N 1.4 - W 19.0	67	27			
C	449	S 4.4 - W 19.4	60	19			
C	450	S 1.3 - W 10.0	<54>	22			
C	451	S 4.2 - W 8.4	96	23			
C	452	S 4.6 - W 8.6	62	16			
C	453	S 11.4 - W 3.0	<200>	13			
C	454	S 11.3 - W 3.0	50	25			
C	455						欠番
C	456	S 4.8 - W 5.4	345	46			
C	457	S 10.9 - W 7.3	<98>	53			

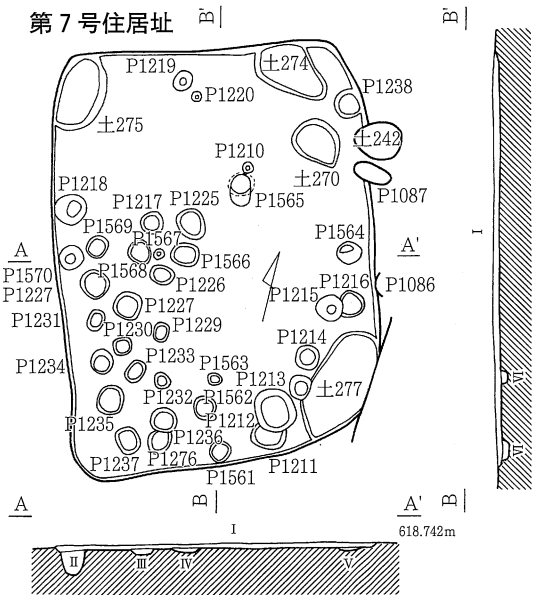
＊表中の＜　＞内の数値は切り合い等で全長が測れない物の実寸値である

4 A・B

第10・11・12号住居址



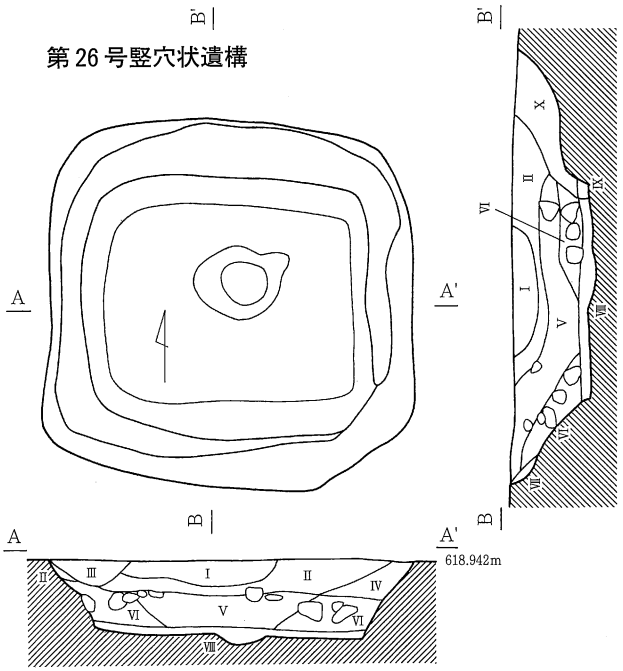
第7号住居址



Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒少量、焼土粒・炭中量）
Ⅱ：暗褐色土（褐色石粒中量、炭・焼土粒少量）
Ⅲ：暗褐色土（白色石粒・焼土粒少量）
Ⅳ：暗褐色土（白色石粒少量、褐色石粒中量）
Ⅴ：暗褐色土（褐色土塊中量、炭少量）
Ⅵ：暗褐色土（白色石粒中量）

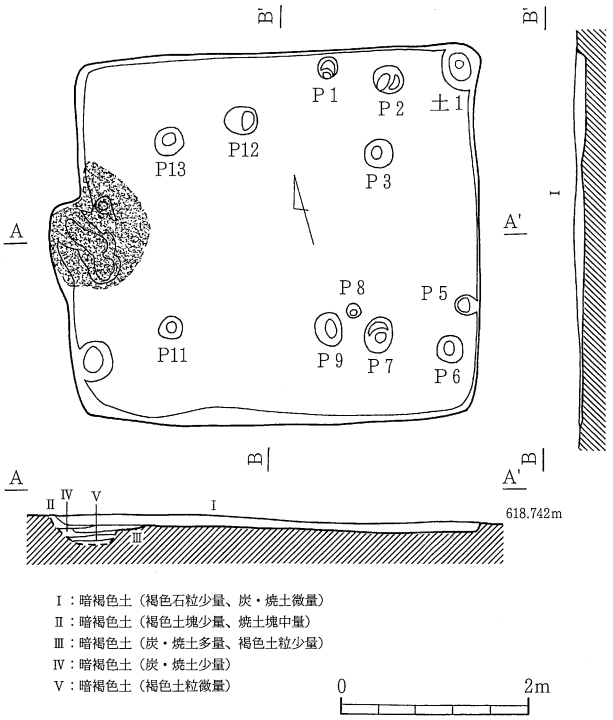
Ⅰ：耕作土（鉄分多量）
Ⅱ：暗灰褐色土（褐色石粒少量、炭・焼土微量）
Ⅲ：暗灰褐色土（褐色土粒中量、焼土粒少量）
Ⅳ：暗灰褐色土（炭微量、φ0.5～2㎝礫少量）
Ⅴ：暗灰褐色土（焼土粒微量）
Ⅵ：暗灰褐色土（褐色土塊中量、焼土粒微量、鉄分少量）
Ⅶ：暗茶褐色土（褐色石粒中量、鉄分微量）
Ⅷ：暗灰褐色土（白色石粒・φ1～2㎝礫中量、褐色石粒少量）
Ⅸ：暗灰褐色土（褐色石粒多量、φ1～2㎝礫微量）
Ⅹ：暗褐色土（褐色石粒少量、φ1～4㎝礫多量）
Ⅺ：暗灰褐色土（褐色石粒微量）
Ⅻ：暗褐色土（褐色土粒・φ1～2㎝礫少量、炭多量）
XIII：暗灰褐色土（白色石粒中量、鉄分少量、褐色土粒微量）

第26号竪穴状遺構



Ⅰ：暗灰褐色土（褐色石粒中量、白色石粒・炭・焼土微量）
Ⅱ：暗灰褐色土（褐色石粒・φ1～3㎝礫少量、炭・焼土粒中量）
Ⅲ：暗褐色土（褐色石粒中量、φ1～4㎝礫多量）
Ⅳ：暗灰褐色土（褐色土塊少量、焼土粒微量）
Ⅴ：礫層（φ5～20㎝剥片礫含）
Ⅵ：礫層（φ20～50㎝礫含）
Ⅶ：灰褐色土（白色石粒中量、φ1～2㎝礫微量）
Ⅷ：暗灰褐色粘質土（褐色石粒微量）
Ⅸ：暗灰褐色砂礫土
Ⅹ：黒褐色粘質土（褐色石粒中量、φ1～3㎝礫少量、焼土粒微量）

第8号住居址

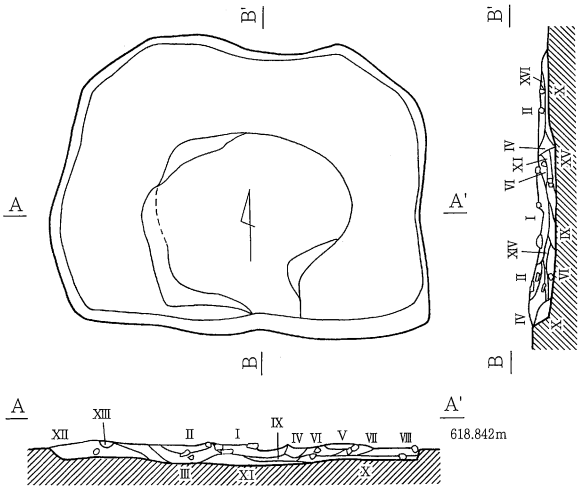


Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒少量、炭・焼土微量）
Ⅱ：暗褐色土（褐色土塊少量、焼土塊中量）
Ⅲ：暗褐色土（炭・焼土多量、褐色土粒少量）
Ⅳ：暗褐色土（炭・焼土少量）
Ⅴ：暗褐色土（褐色土粒微量）

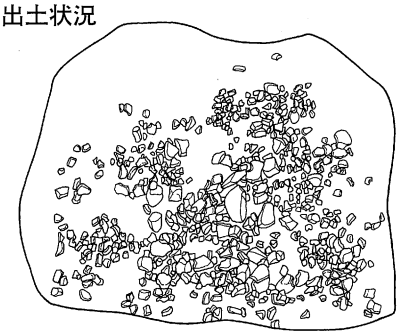
0　2m

第25図　　A・B区住居址・竪穴状遺構（1）

第19号竪穴状遺構

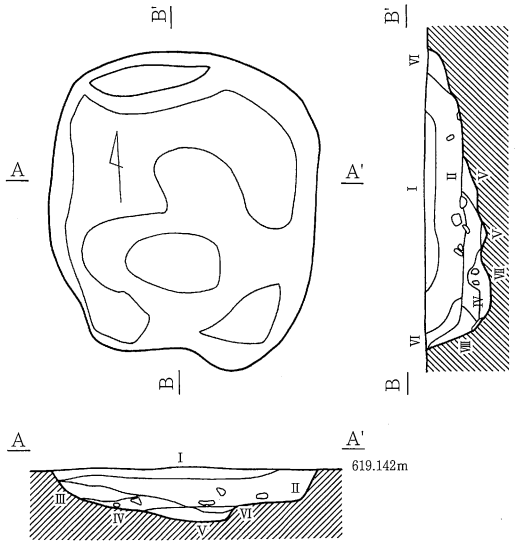


竪19礫出土状況

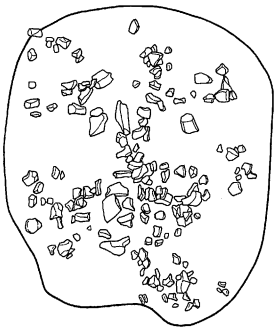


Ⅰ：暗褐色土（炭少量、焼土粒・灰微量）
Ⅱ：暗灰褐色土（炭微量、焼土粒少量）
Ⅲ：暗褐色土（炭・φ1～5㎝礫中量、焼土粒微量、褐色粘質土塊少量）
Ⅳ：暗褐色土（炭中量、焼土粒・灰少量）
Ⅴ：暗灰褐色土（白色石粒・褐色土粒少量、炭・焼土粒微量）
Ⅵ：暗褐色土（炭・炭化物多量、焼土粒・φ1～3㎝礫中量、褐色石粒少量）
Ⅶ：暗褐色土（炭中量、焼土粒微量、φ1～5㎝礫多量）
Ⅷ：暗灰褐色砂礫土（炭・焼土粒微量）
Ⅸ：橙褐色灰土（炭少量、焼土粒微量、暗褐色土塊中量）
Ⅹ：茶褐色砂礫土（φ0.1～3㎝礫多量）
XI：暗褐色砂礫土（炭・φ1～3㎝礫少量、焼土粒微量）
XII：暗茶褐色砂礫土（φ1～5㎝礫中量）
XIII：暗褐色土（炭化物多量、焼土粒少量）
XIV：暗褐色土（炭・焼土粒・橙褐色灰中量）
XV：暗褐色土（炭・φ1～2㎝礫少量、焼土粒微量）
XVI：暗茶褐色土（炭少量、焼土粒中量、φ1㎝礫微量）

第20号竪穴状遺構

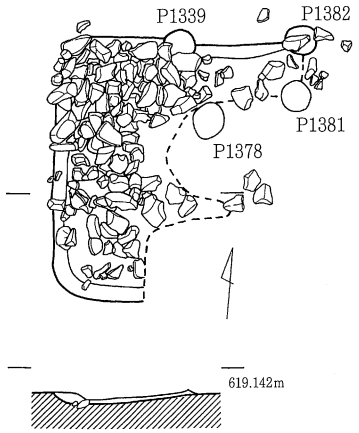


竪20礫出土状況



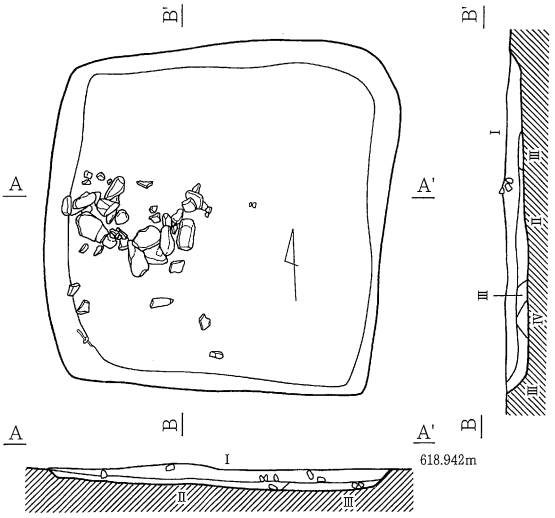
Ⅰ：暗灰褐色土（炭・焼土多量、褐色石粒少量）
Ⅱ：暗灰褐色土（褐色土粒・φ1～3㎝礫少量、炭中量）
Ⅲ：暗褐色土（褐色石粒少量）
Ⅳ：暗褐色粘質土（褐色石粒少量、鉄分・φ1～3㎝礫中量）
Ⅴ：茶褐色土（φ1～3㎝礫多量）
Ⅵ：暗褐色粘質土（褐色土粒・鉄分・φ1～2㎝礫少量、炭・焼土微量）
Ⅶ：褐色土（φ1～3㎝礫中量、炭微量）
Ⅷ：黄褐色土（褐色石粒・鉄分少量、焼土粒微量）

第21号竪穴状遺構



暗褐色土（褐色石粒少量、白石石粒・炭・焼土粒微量）

第22号竪穴状遺構

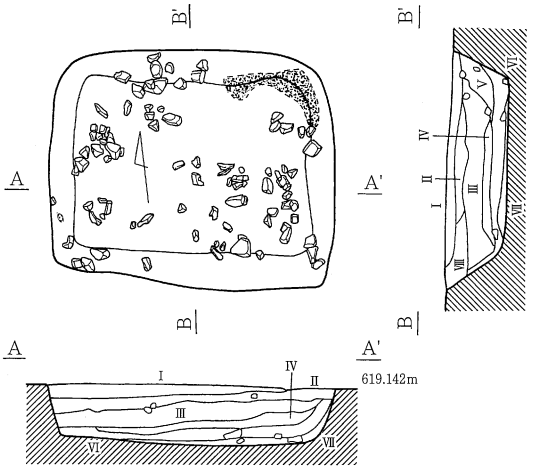


Ⅰ：暗褐色土（φ0.5～5㎝礫多量）
Ⅱ：暗褐色土（褐色石粒・φ0.5～1㎝礫少量）
Ⅲ：暗褐色土（炭・焼土粒・φ1㎝礫微量）
Ⅳ：暗灰褐色土（炭・焼土・鉄分少量）

0　2m

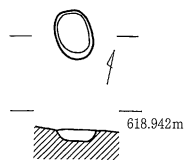
第26図　A・B竪穴状遺構（2）

第23号竪穴状遺構



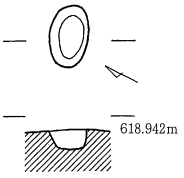
Ⅰ：暗褐色粘質土（褐色石粒・炭・φ1～3㎝礫少量）
Ⅱ：暗灰褐色土（白色石粒・鉄分少量、焼土粒微量、φ1㎝礫中量）
Ⅲ：暗灰褐色土（鉄分中量、炭少量、焼土粒・φ1～2㎝礫微量）
Ⅳ：灰褐色土（鉄分多量、炭・φ1～3㎝礫微量）
Ⅴ：暗灰褐色土（鉄分多量、炭・焼土粒中量、φ1～3㎝礫少量）
Ⅵ：灰褐色土（鉄分・φ1～2㎝礫微量、褐色土粒少量、炭多量）
Ⅶ：暗褐色土（炭少量）
Ⅷ：暗灰褐色土（褐色石粒少量、白石石粒中量、φ0.5～3㎝礫微量）

土282



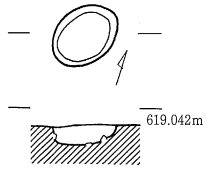
暗褐色土（白色石粒中量、褐色土粒少量）

土284



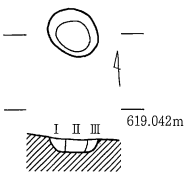
黒褐色土（φ1～5㎝礫多量）

土285



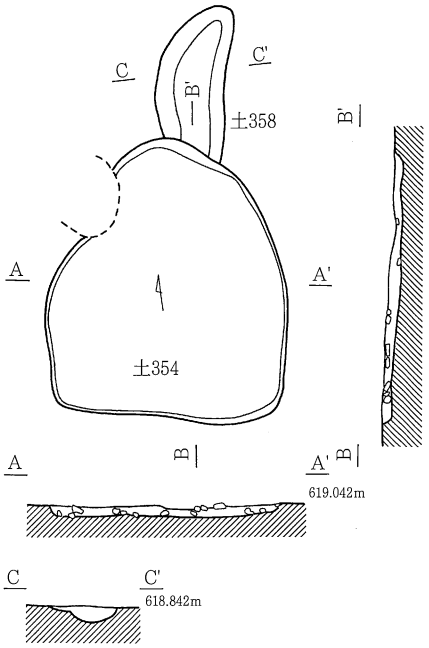
暗褐色砂礫土（φ1～3㎝礫多量）

土283

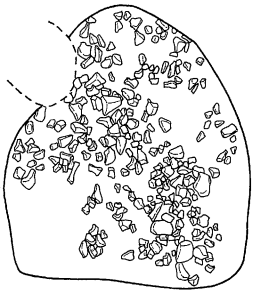


Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒少量、炭・焼土粒微量）
Ⅱ：暗褐色土（白色石粒少量、φ0.5～1㎝礫微量）
Ⅲ：暗褐色土（φ1～3㎝礫中量）

土354・358

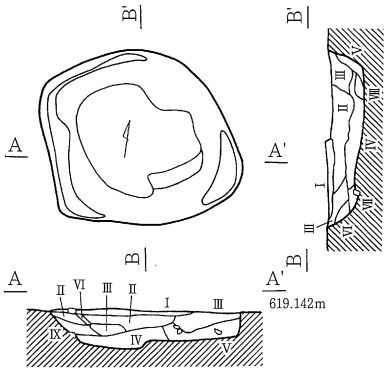


土354礫出土状況



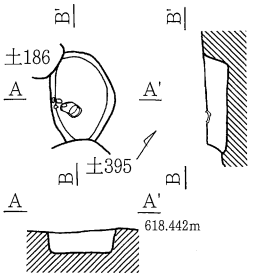
土354
暗褐色土（褐色石粒中量）
土358
暗褐色土（褐色土粒・焼土粒少量）

土342



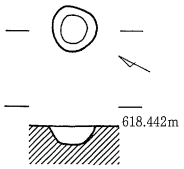
Ⅰ：暗褐色粘質土（白色石粒・褐色石粒・φ0.5～2㎝礫多量）
Ⅱ：暗褐色土（白色石粒中量、褐色石粒多量）
Ⅲ：暗褐色土（褐色石粒中量、炭・焼土微量）
Ⅳ：暗褐色土（褐色石粒微量、炭少量）
Ⅴ：暗茶褐色土（褐色石粒微量、φ1～3㎝礫多量）
Ⅵ：褐色土（白色石粒中量、褐色石粒少量、焼土粒微量）
Ⅶ：褐色土（褐色石粒少量）
Ⅷ：暗褐色土（炭少量）
Ⅸ：暗茶褐色土（φ1～3㎝礫中量）

土396



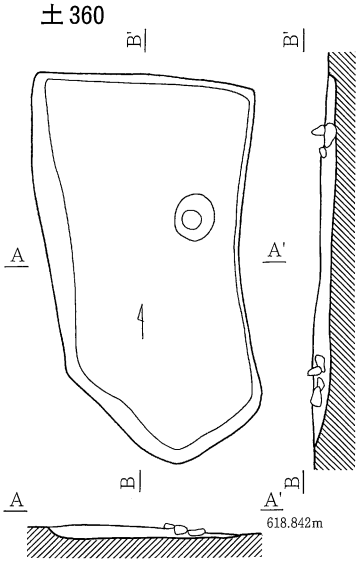
暗褐色土（白色石粒中量、褐色石粒少量、焼土粒微量）

土397

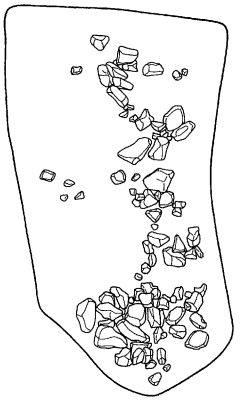


暗褐色土
（白色石粒中量、褐色石粒少量）

土360

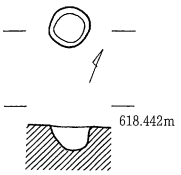


土360礫出土状況



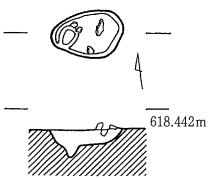
褐色土（白色石粒少量、炭微量）

土398



暗褐色土（褐色石粒少量、φ0.5～1㎝礫多量）

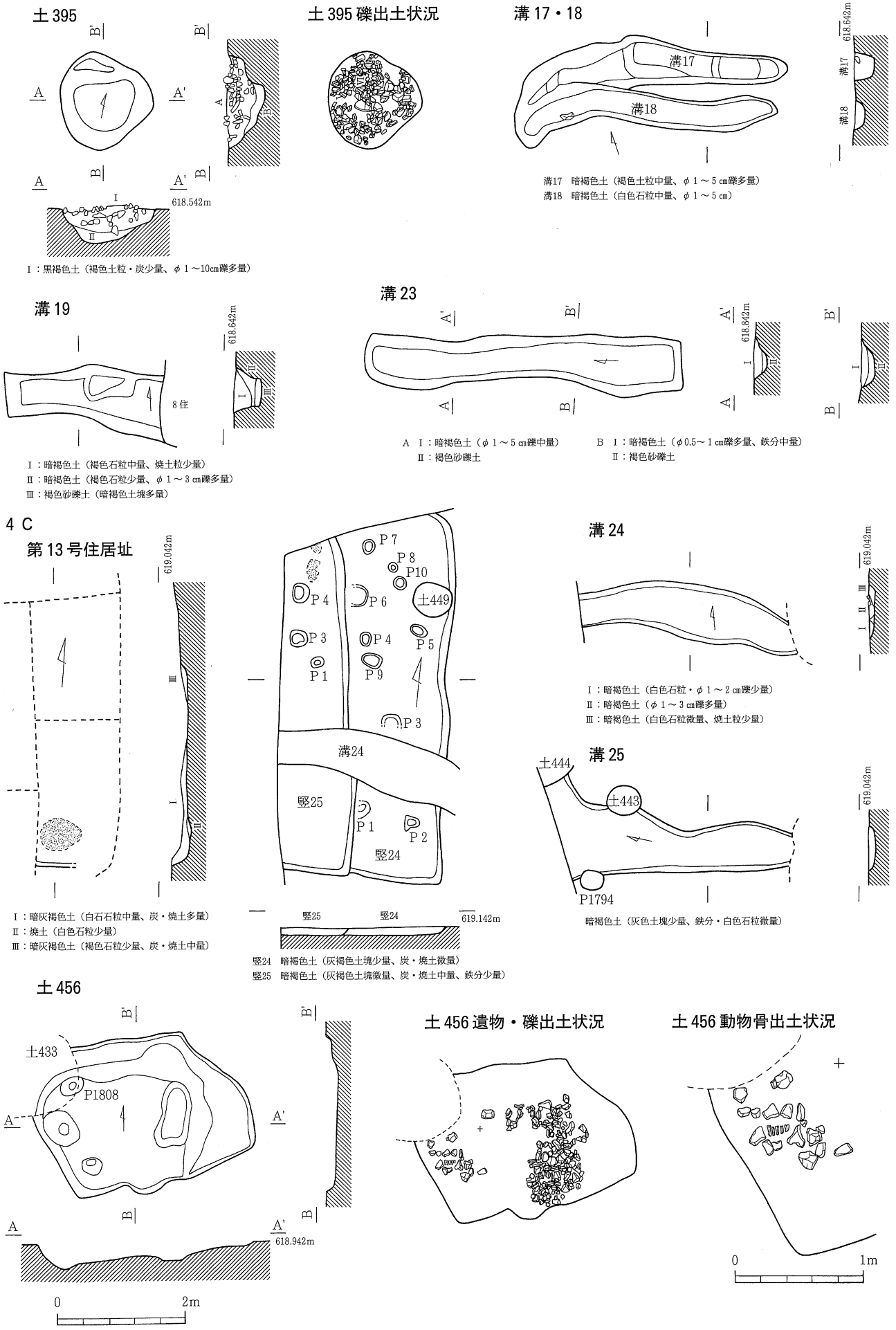
土399



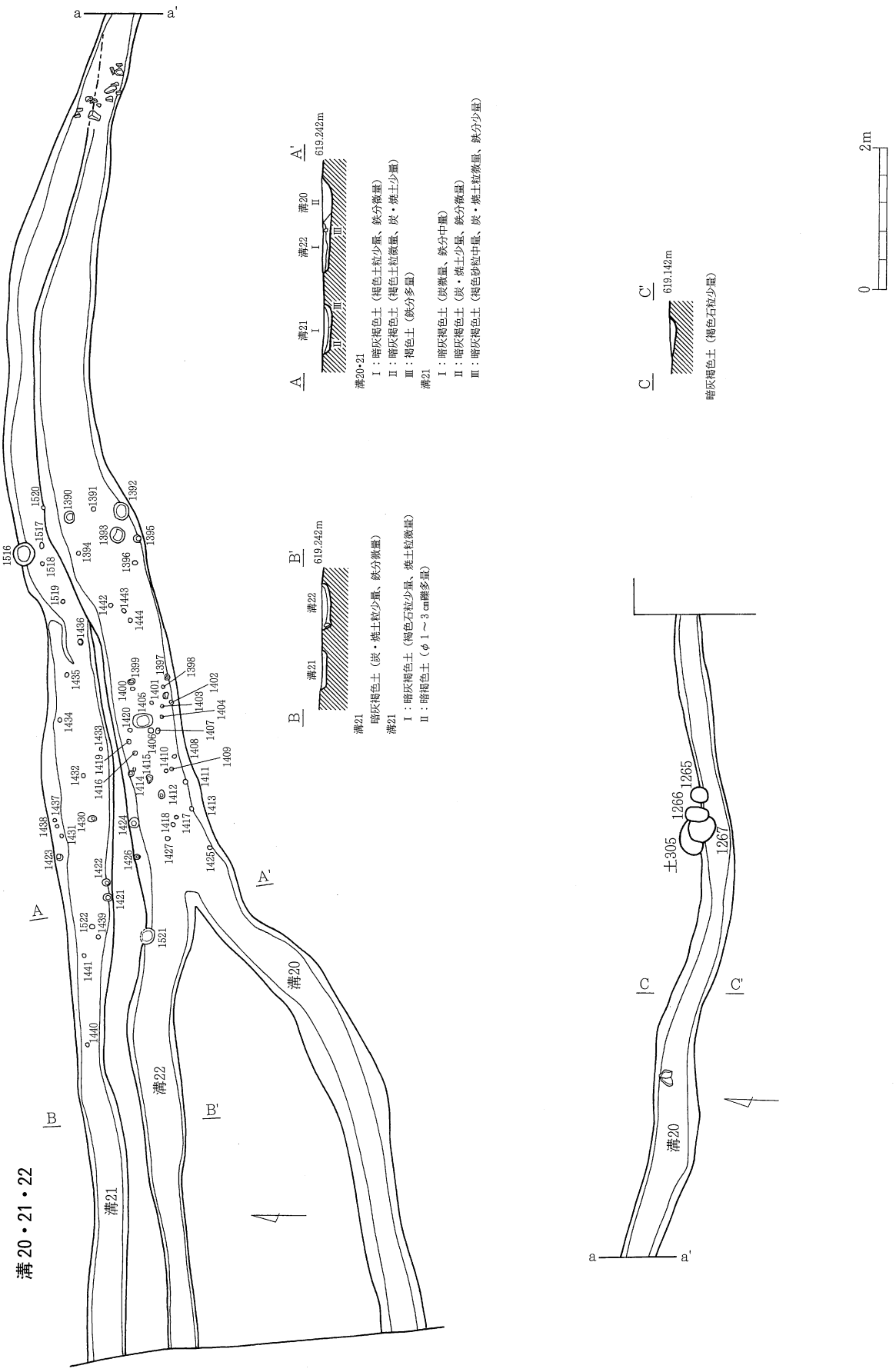
暗褐色土
（褐色石粒少量、φ0.5～3㎝礫中量）

0　2m

第27図　　A・B竪穴状遺構（3）・土坑（1）



第28図　　A・B区土坑（2）・溝（1）・C区住居址・溝・土坑


溝20・21・22
溝20
溝21
溝22
A
A'
B
B'
C
C'
a
a'
溝20・21
Ⅰ：暗灰褐色土（褐色土粒少量、鉄分微量）
Ⅱ：暗灰褐色土（褐色土粒微量、炭・焼土少量）
Ⅲ：褐色土（鉄分多量）
溝21
Ⅰ：暗灰褐色土（炭微量、鉄分中量）
Ⅱ：暗灰褐色土（炭・焼土少量、鉄分微量）
Ⅲ：暗灰褐色土（褐色砂粒中量、炭・焼土粒微量、鉄分少量）
溝21
暗灰褐色土（炭・焼土粒少量、鉄分微量）
溝21
Ⅰ：暗灰褐色土（褐色石粒少量、焼土粒微量）
Ⅱ：暗褐色土（φ1～3cm礫多量）
暗灰褐色土（褐色石粒少量）
619.242m
619.142m
0
2m

第29図　　A・B区溝（2）

第５章　第５次調査

１節　調査概要

調査地は高畑遺跡の西方にあたる位置である。今回の調査は市道5513号線付け替え工事に伴い芳川消防署の移転が計画されたため行ったものである。調査地は第２次調査地の西方70mの位置であり、第２～４次調査地より一段下がった場所にあたる。調査を行うにあたって遺構の有無や堆積の状況を確認するためにトレンチを設定して確認調査を行った。トレンチは調査地のやや西よりの箇所に東西20m、南北40mの２本を設定した。幅は２mである。

調査はまず大型建設機械にて表土及び造成土を除去し、人力にて遺構検出を行った。検出を行った結果遺構は土坑１基のみしか発見されず、その他は広く一帯に洪積層が認められ洪水により削平されてしまっていることが判明した。そのため、面的調査を行う必要がないと判断し、遺構調査終了後サブトレンチにて下層の堆積状況を確認・記録した。埋め戻しは全ての調査を終えた後に行った。なお、測量図はＳ＝1/20で作成した。

２節　調査成果

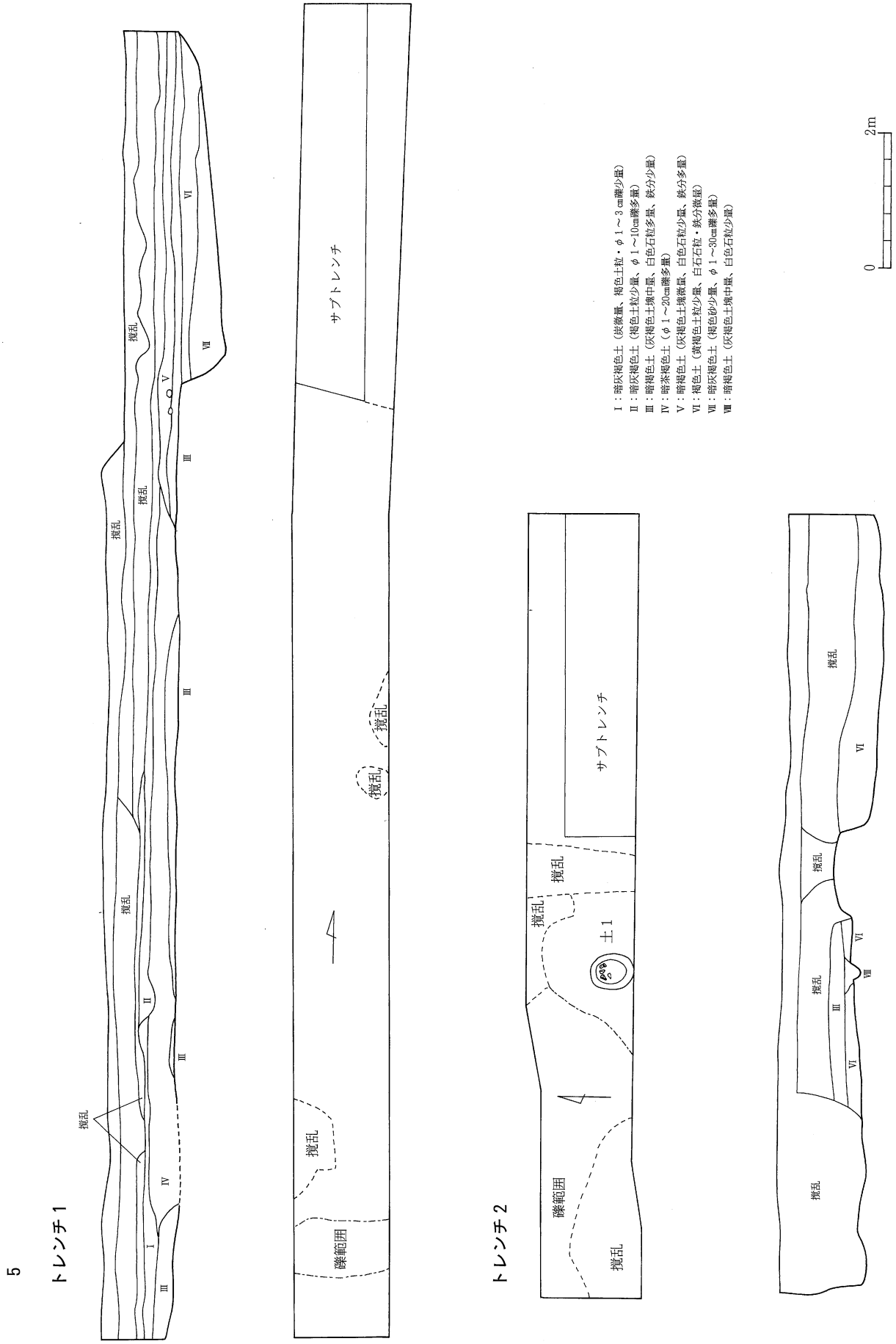
調査期間：平成17年９月21・22日

調査面積：総面積　30㎡

　　トレンチ１　20㎡　　トレンチ２　10㎡

検出遺構：土坑　　１基

出土遺物：なし



第30図　第5次調査遺構図

第６章　出土遺物

１節　土器・陶磁器・土製品（31～33図）

１）縄文土器（第33図83）

４次土坑396から１点出土している。内外面が摩滅していて詳細は不明だが、外形から縄文土器と判断した。当遺跡の第１次調査では縄文晩期に伴う土器、石器が出土しており、本例もそれに準ずるものである可能性がある。

２）古代の土器・陶器（第31～33図５～16・19～27・36・44・46・51・56・65・66・70・74～76・86・90・93）

種別・器種・器形

古代の土器・陶器は35点を図化提示できている。種別は土師器と須恵器・灰釉陶器がある。器種には、土師器に杯形土器（以下、「●形土器」は省略する。）・甕・小形甕、須恵器に杯・蓋・盤・短頸壺、灰釉陶器に椀がある。土師器椀の中には盤の可能性のあるものがある。さらに細分された器形としては、須恵器杯に杯Ａ（無台）・杯Ｂ（有台）の２種がある。須恵器の蓋は端部が短く屈曲する蓋Ｂのみである。また、須恵器には緻密な胎土と硬い焼きに端正な形態をもった、おそらく美濃須衛窯ないしは東海地方の窯からもたらされたもの（第31・33図８・19・20・44）が散見され、なかに「美濃国」の刻印が捺されているものが１点みられる（20）。

土器様相と時期

第５号住居址、第６号住居址、竪穴状遺構22からまとまった出土があり、その他の遺構からも、散発的に出土している。これらの様相と時期を概観する。

ア）第５号住居址出土品（第31図７～16）

須恵器杯Ａ１点・蓋Ｂ２点・短頸壺の底部１点、土師器甕の胴部上半を１点・胴部下半を１点・底部片２点・小形甕２点を図化提示している。須恵器蓋Ｂのうち１点は美濃須衛窯ないしは東海地方産と推定される（８）。須恵器短頸壺は胴部下半のみの出土だが、内面への自然釉のかかり具合から短頸壺と判断した。土師器甕の底部片には木葉圧痕が残る。上半が残る土師器甕には口唇部に面取り状の平面を有し、口縁部内面にはカキメが観察できる（11）。10の土師器甕の外面にはタタキの痕跡が観察できる。内面の当て具痕はナデ消されている。小形甕は調整にロクロ回転が使用されないものである（12・13）。須恵器杯Ａ・蓋Ｂ、土師器甕の様相からみて、８世紀前半をあてたい。

イ）第６号住居址出土品（第31図19～27）

須恵器杯Ａ２点・杯Ｂ１点・甕の口縁部１点、土師器甕の口縁部・胴部上半を３点・底部片２点を図化提示している。須恵器杯Ａ２点は美濃須衛窯ないしは東海地方産と推定される（19・20）。20の底部内面には「美濃国」の刻印が捺されている。印字の形態は３文字が縦に並び、岐阜市老洞古窯址の調査成果によるとＡ-２-１類（1981岐阜市教育委員会）に分類される。須恵器甕は長く伸びる口縁に２本の沈線が巡り、その間に縦の短沈線が充填される（27）。土師器甕の底部片には木葉圧痕が残るものがある。口縁部や上半が残る土師器甕はいずれも長胴形を呈すと思われ、口縁部に最大径がある形態と推定される。22の甕はやや小形で深鉢形を呈す。これらの須恵器・土師器の様相から８世紀第１四半期の年代が与えられると考える。「美濃国」刻印須恵器は708～720年の間に焼成されたことが推定されているので（1981岐阜市教育委員会）、本址出土品のこの年代観には蓋然性があろう。

ウ）第８号住居址出土品（第33図70）

土師器の甕１点が図化提示されている。口縁部と底部周辺を欠くが、外面に縦のハケメ、内面に横から斜のハケメがかけられている。８世紀前半～中頃の所産と考える。

エ）竪穴状遺構22出土品（第33図74～76）

土師器杯が２点・椀が１点図化提示できた。杯はロクロナデ痕を残し、ミガキは行われていない。椀は口縁部が微妙に外反する形態を呈し、内面に黒色処理が行われた後に放射状暗文が施されている。11世紀前半に位置付けられる資料であろう。

オ）その他の出土品（第31～33図５・６・36・44・46・51・56・65・66・86・90・93）

２次Ａ区表採品に須恵器杯Ａの底部破片がある（5）。底面に回転糸切痕を残し、ロクロ痕が顕著である点から８世紀後半以降のものと思われる。３次竪穴状遺構５から須恵器杯Ｂの底部片が１点出土している（36）。底面に回転ケズリが行われており、８世紀代に属すると考える。３次竪穴状遺構12からは須恵器盤の底部破片が１点出土している（44）。高台の外面に面を有する特徴的な形態を呈すため、盤と判断した。３次ピット830、４次Ｃ区トレンチから土師器杯が１点ずつ出土している（65・90）。65はロクロナデがなく工具ナデ調整が行われ、特徴的な形態をとる。内面には黒色処理とミガキがあり、ロクロナデの定型化する以前の杯と思われ、８世紀前半に遡る可能性がある。90はロクロナデで内面にミガキがみられず、10世紀後半以降のものであろう。４次ピット1631からは土師器の椀（または盤）の体部破片が出土している（86）。ロクロナデのみでミガキはみられない。11世紀代の所産と考える。２次表採、３次竪穴状遺構13・14・15、溝４、４次Ｃ区流路から灰釉陶器椀の破片が出土しており、それぞれ１点ずつ、６点を図示できた（６・46・51・56・66・93）。いずれも底部破片で、ロクロナデに回転糸切痕を残している。やや丈の高い高台などからみて、10世紀後半から11世紀に下るものと考える。

まとめ

第２・５・６号住居址からは、従来の編年観によれば概ね８世紀初頭から前半までの土師器、須恵器が出土している。従って、本遺跡には、この時期に短期間の集落が展開していると推定される。特に、第６号住居址出土品の「美濃国」刻印須恵器は、類例としては松本市内で秋葉原２号古墳の１点・南栗遺跡の２点・平田本郷遺跡の１点に次いで５例目の出土であり、生産地での考察によって、時期的に限定されるものである。これを手掛かりとして、当地産の土器群にも年代観が付与できていくものと期待される。

また、第５号住居址10の土師器甕の外面にはタタキが行われており、８世紀中葉から定型化していく在地産土師器甕の成立を考えていくにあたって、その前段階の重要な資料になるものと思われる。

一方、竪穴状遺構４を始めとしたその他の遺構からは、10世紀後半から11世紀代の土師器、灰釉陶器が出土しており、もう一つの時期のピークがそこにあることがわかる。これらの土器・陶器は、中世の遺構・遺物群へ続いていく性格を持ったものであろう。

＜参考文献＞　岐阜市教育委員会　1981　『老洞古窯址群発掘調査報告書』

３）中世の土器・陶磁器（第31～33図１～４・17・18・28～35・37～43・45・47～50・52～55・57～64・67～69・71～73・77～82・84・85・87・88・91・92・94・95）

今回の調査で出土した中世の土器・陶磁器については可能な限り図化し、58点を提示した。出土した土器・陶磁器の種別内訳をみると、輸入磁器12点（青磁10点・白磁２点）、古瀬戸系陶器17点、東海系無釉陶器17点（山茶碗１点・捏鉢16点）、在地産須恵質擂鉢５点、土師質土器皿７点（手づくね成形）である。以下、

出土遺物の種別ごとに概要と特徴、および年代観について述べていく。

ア）輸入磁器

青磁

龍泉窯系青磁9点と同安窯系青磁1点がある。龍泉窯系青磁は、鎬連弁文碗7点（30・31・37・42・77・85・88)、皿1点（87)、瓶類1点（72）がみられる。すべて13世紀前半代の製品と考えられるものである。同安窯系青磁碗（39）は、内面に櫛描文が観察できるもので、生産年代は、12世紀中～後半と推定できるものである。

白磁

口縁端部が玉縁となり、厚い釉薬が施釉される碗4類が2点（2・47）出土している。いずれも11世紀後半～12世紀前半に比定される製品である。

イ）古瀬戸系陶器

17点を図示した。器種構成をみると、碗（40・68)、卸皿（3・4・28・38・69・73・91・95)・折縁深皿(78)・四耳壷（18)・花瓶（34・35)、その他瓶類（50・62・92）がみられる。いずれも古瀬戸前～中期（13世紀後半～14世紀）に比定されるもので、古瀬戸後期まで時期が下るものはない。18は、四耳壷の破片資料である。外面に櫛描文と印花文が観察でき、灰釉が施されている。内面には、粘土紐巻上げ時の指頭圧痕が残る。35は、古瀬戸中期様式の花瓶2類とみられる。灰釉が施釉され、体部のみしか残存していないが、外面には画花文が残り、内面には板状工具によるナデ調整痕が観察できる。34は、花瓶Ⅰ類の脚部とみられる。灰釉が施釉されているが、底裏部は露胎で回転糸切痕が残る。78は、折縁深皿である。灰釉が施釉され、内面見込み部には櫛描文が残る。古瀬戸中期の所産か。

ウ）東海系無釉陶器

器種は、山茶碗と捏鉢（片口鉢）がみられる。63の山茶碗は、高台が三角形状を呈する。東濃産の12世紀中ごろのものか。捏鉢（片口鉢）は、16点図示している。捏鉢では、やや胎土が粗く灰色か暗灰色を呈する一群と、胎土は非常に均質であるが黄灰色を呈する一群がある。前者は尾張産、後者は東濃産と考えられる。東濃産と考えられるものは、49・54・59・61・67があげられる。これらは13世紀後半～14世紀前半の所産とみられる。

エ）在地産須恵質擂鉢

5点（17・58・60・71・81）出土した。珠洲産の擂鉢を模倣したと考えられる在地産の擂鉢である。ロクロ成形の珠洲産擂鉢とは成形技法が異なり、非ロクロ成形である。このような在地産の擂鉢については、市川隆之氏によって論考がなされている（文献1)。これによると、長野県内での出土は、千曲川流域から松本・諏訪地方にかけての長野県北半部を中心に分布することが指摘されている。また、長野市周辺でみられる瓦質擂鉢の分布などから、在地産須恵質擂鉢についても長野市周辺での生産の可能性が考えられている。須恵質擂鉢と珠洲産擂鉢は、形態的に類似していることから、珠洲産擂鉢の流通に便乗した内陸向けの模倣品とも考えられているが、珠洲産擂鉢の流通圏とは微妙に異なるため、同一の流通品とは言い切れない。

オ）土師質土器皿

7点（1・32・33・52・57・64・94）出土した。すべて手づくね成形である。1は、やや器高が高い形状であるが、他は高さが低くて器厚が厚い形状である。目視における観察では、胎土が非常に類似しているため、同一産地の可能性がある。こうした中世前半に出土する土師質土器皿の県内における出土分布をみると、長野市や千曲市周辺、松本市、東部町周辺、諏訪市周辺、飯田市周辺に限定される。ごく限定された中での流通品である土師質土器皿についても、今後検討が必要であろう。

まとめ

今回の調査で出土した中世の土器・陶磁器をみると、時期的には、11世紀後半～12世紀中頃の白磁と山茶碗を伴う遺物群から、古瀬戸系陶器中期様式を伴う14世紀代の範疇に収まる。また、出土した遺物群の種別をみると、多様な生産地と流通圏をもつことが看取できる。海を越えて流通する中国製磁器、国を越えて流通する古瀬戸系陶器や東海系無釉陶器、一国の半分の広さで流通する在地産須恵質擂鉢、そして更に限られた狭い範囲で流通する土師質土器皿などと多彩な流通圏が想定できる。また、松本市内の中世遺跡で普遍的に確認される常滑産の甕が、今回の調査では僅かな小破片のみで、ほとんど確認できないのは興味深い。今後、周辺に立地する小池遺跡・小原遺跡・吉田川西遺跡などの中世遺物などとあわせて比較検討が必要であろう。

＜参考文献＞ 1 市川隆之 2005 「北信地域の鍋・擂鉢からみた中世から近世前半」『海なき国々のモノとヒトの動き－16～17世紀における内陸部の流通－』 内陸遺跡研究会

2 横田賢二郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館

４）土製品（第33図89）

用途、形状がはっきりしない土製品が４次土坑433から１点出土している（89）。８世紀代の須恵器高杯の脚部片にもみえるが、非常に軟質で黄褐色を呈し、須恵器の焼成とはかけ離れているので、一応、土製品として扱った。

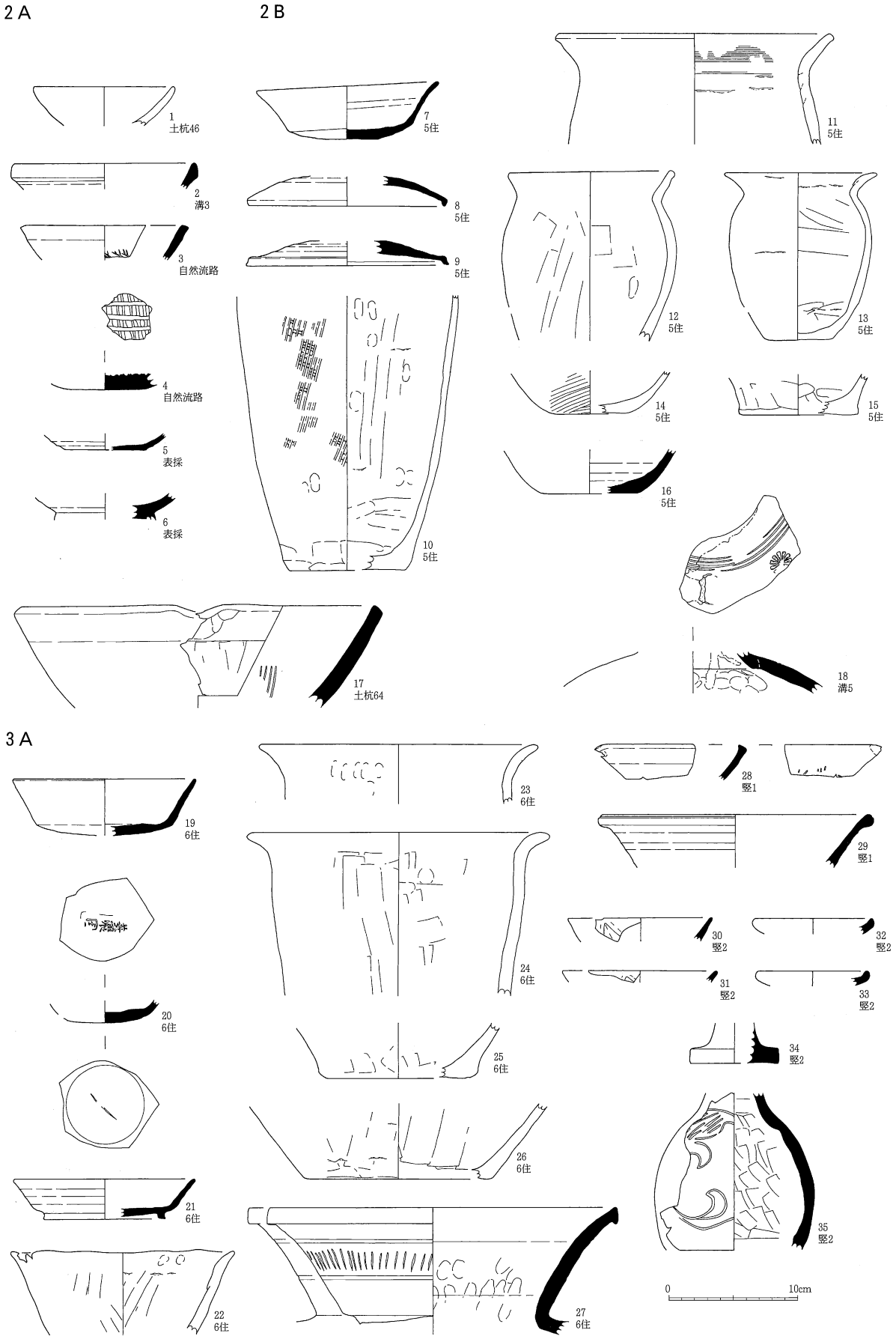
第11表　出土土器・陶磁器、土製品観察表

No.	次	地点	種別	器種	寸法			残存度	成形・調整・形態	施釉・時期・その他	実測番号	注　記
	区			器形	口径	底径	器高					
1	ⅡA	土46	土師質	皿	11.0			口1/3	ヨコナデ、手捏ね成形		土46-1	ⅡA012
2	ⅡA	溝3	白磁	碗・Ⅳ類	13.9			口1/8	ロクロナデ、回転ケズリ、玉縁口縁	11C後半～12C前半	溝3-1	A019
3	ⅡA	自然流路	古瀬戸	卸皿	12.0			口1/6	ロクロナデ、内面卸目	古瀬戸前期Ⅳ(13C後半)	自然流路1	ⅡA031
4	ⅡA	自然流路	古瀬戸	卸皿		5.4		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面卸目	不明	自然流路2	ⅡA043
5	ⅡA	A区表採	須恵器	杯A		6.4		底1/4	ロクロナデ、底面回転糸切		表採2	ⅡA053
6	ⅡA	A区表採	灰釉	椀				底1/6	ロクロナデ、回転ケズリ		表採1	ⅡA053
7	ⅡB	5住	須恵器	杯A	14.0	6.5	4.2	底完	ロクロナデ、底面ヘラ切後ナデ	8C前	5住3	ⅡB5住094
8	ⅡB	5住	須恵器	蓋B	15.4	—		口1/8	ロクロナデ、上面回転ケズリ	美濃須衛、8C前半	5住2	ⅡB5住089
9	ⅡB	5住	須恵器	蓋B	15.6	—		口1/8	ロクロナデ、上面回転ケズリ	8C前半	5住1	ⅡB5住094
10	ⅡB	5住	土師器	甕		9.0		底1/2	タタキ、工具ナデ、内面縦の指ナデ	8C前半	5住10	ⅡB5住059・065・086・087・090
11	ⅡB	5住	土師器	甕	21.4			口1/3	ヨコナデ、ハケメ摩滅？、内面カキメ	8C前半	5住9	ⅡB5住058・061・090・091
12	ⅡB	5住	土師器	小形甕	12.8			口7/8	ヨコナデ、工具ナデ	8C前半	5住8	ⅡB5住054・056・057・062・063・066・069・083・089～091・093
13	ⅡB	5住	土師器	小形甕	11.7	5.3	13.1	口3/4	ヨコナデ、ナデ摩滅、底部ケズリ、工具ナデ	8C前半	5住7	ⅡB5住055・057・065・066・072・074・077・083・091・093・094
14	ⅡB	5住	土師器	甕		6.0		口1/12	ハケメ、底面木葉圧痕	8C前半	5住5	ⅡB5住093
15	ⅡB	5住	土師器	甕		9.2		口1/3	工具ナデ、底面木葉圧痕	8C前半	5住6	ⅡB5住082・092
16	ⅡB	5住	須恵器	短頸壺		7.6		底1/3	ロクロナデ、手持ケズリ	8C前半	5住4	ⅡB5住089
17	ⅡB	土64	須恵器	擂鉢	27.1			口1/8	ヨコナデ、縦の工具痕、内面擂目	在地産、14C～15C前半	土64-1	ⅡB土105
18	ⅡB	溝5	古瀬戸	四耳壺				胴1/4	ロクロナデ、櫛描圏線、耳部4単位、内面指頭圧痕	古瀬戸中期前半(14C前半)	溝5-1	ⅡB溝107
19	Ⅲ	6住	須恵器	杯A	14.1	10.5	4.4	口1/4	ロクロナデ、底面ヘラ切	美濃須衛、8C前半	6住-2	ⅢA6住012
20	Ⅲ	6住	須恵器	杯A		6.0		底完	ロクロナデ、底面ヘラ切・ヘラ記号	美濃国刻印、美濃須衛、8C前半	6住-3	ⅢA6住008
21	Ⅲ	6住	須恵器	杯B	14.0	9.4	3.2	口1/8	ロクロナデ、回転ケズリ	8C前半	6住-1	ⅢA6住011
22	Ⅲ	6住	土師器	甕	17.3			口1/3	ヨコナデ、ハケ状工具ナデ	8C前半	6住-6	ⅢA6住010
23	Ⅲ	6住	土師器	甕	21.6			口1/4	ヨコナデ、指頭圧痕	8C前半	6住-5	ⅢA6住016
24	Ⅲ	6住	土師器	甕	23.4			口僅か	ヨコナデ、工具ナデ	8C前半	6住-9	ⅢA6住014・016
25	Ⅲ	6住	土師器	甕		12.4		底1/16	工具ナデ、底面木葉圧痕	8C前半	6住-8	ⅢA6住019
26	Ⅲ	6住	土師器	甕				底僅か	工具ナデ	8C前半	6住-7	ⅢA6住001
27	Ⅲ	6住	須恵器	甕	28.6			口1/5	ロクロナデ、横に連続する縦沈線、沈線	8C前半	6住-4	ⅢA6住009
28	Ⅲ	竪1	古瀬戸	卸皿	17.0			口1/6	ロクロナデ、内面卸目	古瀬戸前期(13C後半)	タテ12	ⅢAタテ005
29	Ⅲ	竪1	東海系	捏鉢	20.6			口1/16	ロクロナデ、口唇に沈線	東海系捏鉢	タテ20	ⅢAタテ005
30	Ⅲ	竪2	青磁	碗Ⅰ類	11.2			口1/8	ロクロナデ、鎬蓮弁文	龍泉窯系青磁、13C前半	タテ3	ⅢAタテ011
31	Ⅲ	竪2	青磁	碗Ⅰ類	12.0			口1/6	ロクロナデ、鎬蓮弁文	龍泉窯系青磁、13C前半	タテ4	ⅢAタテ011

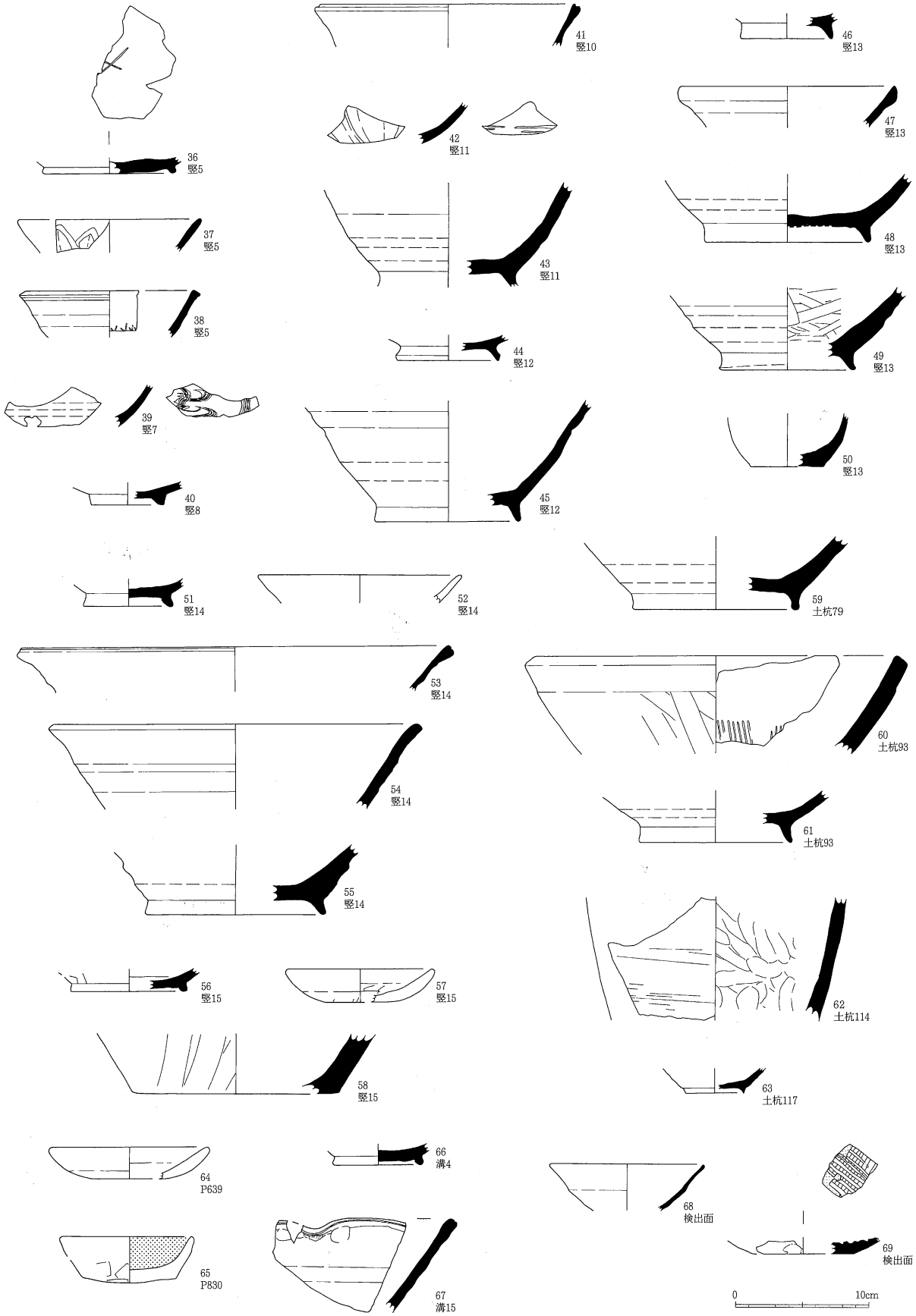
No.	次区	地点	種別	器種器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	残存度	成形・調整・形態	施釉・時期・その他	実測番号	注記
32	Ⅲ	竪2	土師質	皿	9.0			口一部	ヨコナデ、手捏ね成形		タテ9	ⅢAタテ010
33	Ⅲ	竪2	土師質	皿	8.4			口一部	ヨコナデ、手捏ね成形		タテ10	ⅢAタテ002
34	Ⅲ	竪2	古瀬戸	花瓶Ⅰ類		6.8		底1/4	ナデ、回転糸切、底面露胎	灰釉、古瀬戸中期(14C前半)	タテ8	ⅢAタテ009
35	Ⅲ	竪2	古瀬戸	花瓶Ⅱ類				胴1/3	ナデ、画花文、内面板状工具ナデ	灰釉、古瀬戸中期(14C前半)	タテ7	ⅢAタテ0005・008・016
36	Ⅲ	竪5	須恵器	杯B		10.0		底1/3	ロクロナデ、回転ケズリ		タテ31	ⅢAタテ027・030
37	Ⅲ	竪5	青磁	碗Ⅰ類	13.8			口1/10	ロクロナデ、鎬蓮弁文	龍泉窯系青磁、13C前半	タテ2	ⅢAタテ030
38	Ⅲ	竪5	古瀬戸	卸皿	12.6			口1/12	ロクロナデ、卸目	古瀬戸前期(13C後半)	タテ11	ⅢAタテ031
39	Ⅲ	竪7	青磁	碗				体1/4	ロクロナデ、内面櫛描文	同安窯系青磁、12C中～後半	タテ5	ⅢAタテ036
40	Ⅲ	竪8	古瀬戸	碗		5.4		底1/4	回転ケズリ、削り出し高台	灰釉、古瀬戸中期か(14C代)	タテ27	ⅢAタテ037
41	Ⅲ	竪10	東海系	捏鉢	19.0			口1/10	ロクロナデ、口唇に沈線	東海系捏鉢	タテ21	ⅢAタテ041
42	Ⅲ	竪11	青磁	碗Ⅰ類				体1/5	ロクロナデ、鎬蓮弁文、内面沈線	龍泉窯系青磁、13C前半	タテ6	ⅢAタテ042
43	Ⅲ	竪11・14	東海系	捏鉢					ロクロナデ、回転ケズリ、回転糸切、内面使用痕	東海系捏鉢	タテ14	ⅢAタテ043・055
44	Ⅲ	竪12	須恵器	盤		7.6		底1/4	回転ケズリ、ロクロナデ	美濃須衛、8C	タテ24	ⅢAタテ045
45	Ⅲ	竪12・13	東海系	捏鉢		10.6		底一部	ロクロナデ、回転ケズリ、内面使用痕	東海系捏鉢	タテ17	ⅢAタテ045・047・058
46	Ⅲ	竪13	灰釉	椀		6.8		底一部	ロクロナデ		タテ26	ⅢAタテ048
47	Ⅲ	竪13	白磁	碗・Ⅳ類	16.0			口1/12	ロクロナデ、玉縁	11C後半～12C前半	タテ1	ⅢAタテ047
48	Ⅲ	竪13	東海系	捏鉢		12.2		底1/3	ロクロナデ、回転ケズリ、内面使用痕	東海系捏鉢	タテ15	ⅢAタテ053
49	Ⅲ	竪13・15	東海系	捏鉢		9.8		底1/4	ロクロナデ、回転ケズリ、高台端部ケズリ、内面工具ナデ	酸化炎焼成、東海系捏鉢、東濃産？、13C後半～14C前半	タテ16	ⅢAタテ046
50	Ⅲ	竪13	古瀬戸	水注か瓶類		5.4		底1/3	ロクロナデ、回転糸切、底面露胎	古瀬戸前期～中期(13C後半～14C前半)	タテ13	ⅢAタテ054
51	Ⅲ	竪14	灰釉	椀		6.6		底完	ロクロナデ、回転糸切後回転ケズリ		タテ23	ⅢAタテ057
52	Ⅲ	竪14	土師質	皿	15.0			口1/8	ヨコナデ、手捏ね成形		タテ30	ⅢAタテ057
53	Ⅲ	竪14	東海系	捏鉢	32.0			口1/14	ロクロナデ、口唇に沈線	東海系捏鉢	タテ22	ⅢAタテ058
54	Ⅲ	竪14	東海系	捏鉢	27.2			口1/10	ロクロナデ	酸化炎焼成、東海系捏鉢、東濃産？、13C後半～14C前半	タテ19	ⅢAタテ056
55	Ⅲ	竪14	東海系	捏鉢		13.2		口3/5	ロクロナデ、回転ケズリ、回転糸切、内面使用痕	東海系捏鉢	タテ18	ⅢAタテ058
56	Ⅲ	竪15	灰釉	椀		8.6		底1/6	ロクロナデ、回転糸切後回転ケズリ		タテ25	ⅢAタテ062
57	Ⅲ	竪15	土師質	皿	10.8	4.8	2.5	口1/4	ヨコナデ、工具ナデ、手捏ね成形		タテ29	ⅢAタテ059
58	Ⅲ	竪15	須恵質	擂鉢		15.6		底一部	工具ナデ、非ロクロ成形	在地産、14C～15C前半	タテ28	ⅢAタテ06
59	Ⅲ	土79	東海系	捏鉢		12.2		底1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	13C後半～14C前半	土79-1	ⅢA土坑002
60	Ⅲ	土93	須恵質	擂鉢	27.0			口一部	工具ナデ、非ロクロ成形、内面擂目	在地産、14C	土93-2	ⅢA土坑010
61	Ⅲ	土93	東海系	捏鉢		11.2		底1/6	ロクロナデ、回転ケズリ	東海系捏鉢	土93-1	ⅢA土坑010
62	Ⅲ	土114	古瀬戸	瓶類				胴1/4	ロクロナデ、櫛描文、内面指頭圧痕のちナデ	古瀬戸中期か(14C代)	土114-1	ⅢA土坑016
63	Ⅲ	土117	山茶碗	碗		4.3		底1/4	ロクロナデ、回転糸切	12C中期	土117-1	ⅢA土坑019

No.	次区	地点	種別	器種器形	寸法 口径	寸法 底径	寸法 器高	残存度	成形・調整・形態	施釉・時期・その他	実測番号	注記
64	Ⅲ	P639	土師質	Ⅲ	11.6	5.6	2.4	口1/6	ヨコナデ、手捏ね成形	在地産、14C～15C前半	P639-1	ⅢAP011
65	Ⅲ	P830	土師器	杯	9.6	7.0	3.5	口一部	ヨコナデ、工具ナデ、ミガキ摩滅、内面黒色処理	8C代	P830-1	ⅢAP013
66	Ⅲ	溝4	灰釉	椀		6.4		底1/3	ロクロナデ、回転糸切		溝4-1	ⅢA溝4-001
67	Ⅲ	溝15	東海系	捏鉢				底1/8	ロクロナデ、片口	東海系捏鉢、13C後半～14C前半	溝15-1	ⅢA溝15-007
68	Ⅲ	A区検	古瀬戸	碗	11.8			口1/5	ロクロナデ		検-1	ⅢA検出-003
69	Ⅲ	A区検	古瀬戸	卸皿		7.6		底1/16	ロクロナデ、回転糸切、内面卸目	灰釉	検-2	ⅢA検出-002
70	ⅣA	8住	土師器	甕				胴2/3	外面縦ハケメ、内面横～斜ハケメ工具ナデ、非ロクロ成形	8C	2住-1	ⅣA2住003・005～007・009・010
71	ⅣA	竪19	須恵質	擂鉢		11.8		底1/8	工具ナデ、非ロクロ成形	在地産、14C	竪1-2	ⅣAタテ1-005
72	ⅣA	竪19	青磁	瓶類	11.4			口1/12	ロクロナデ		竪1-1	ⅣAタテ1-007
73	ⅣA	竪20	古瀬戸	卸皿	16.8			口1/12	ロクロナデ、内面卸目	古瀬戸前期（13C後半）	竪2-1	ⅣAタテ2-020
74	ⅣA	竪22	土師器	杯	11.0	4.7	3.2	底完	ロクロナデ、回転糸切		竪4-2	ⅣAタテ4-025・028
75	ⅣA	竪22	土師器	杯	12.3			口1/6	ロクロナデ		竪4-1	ⅣAタテ4-026
76	ⅣA	竪22	土師器	椀	14.3			口1/6	ロクロナデ、内面放射状暗文、横ミガキ、黒色処理		竪4-3	ⅣAタテ4-028
77	ⅣA	竪26	青磁	碗Ⅰ類		5.6		口完	回転ケズリ、削り出し高台、鎬蓮弁文、底面ヘラ記号	龍泉窯系青磁、13C前半	3住-1	ⅣA3住001
78	ⅣA	竪26	古瀬戸	折縁深皿		13.8		底1/8	回転ケズリ、内面見込に櫛描文	灰釉、古瀬戸中期か（14C代）	3住-2	ⅣA3住024
79	ⅣA	竪26	東海系	捏鉢	27.5	11.0	11.2	口1/12	ロクロナデ、回転ケズリ	東海系捏鉢	3住-4	ⅣA3住002・015・028
80	ⅣA	竪26	東海系	捏鉢				底1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	東海系捏鉢	3住-3	ⅣA3住018
81	ⅣA	土354	須恵質	擂鉢					ヨコナデ、工具ナデ、内面擂目	在地産、14C	土143-2	ⅣA土坑006
82	ⅣA	土354	東海系	捏鉢		11.5		底1/10	ケズリ、ナデ、指頭圧痕	東海系捏鉢	土143-1	ⅣA土坑007
83	ⅣB	土396	縄文	深鉢		10.6		底完	摩滅、底面網代痕		土185-1	ⅣB土坑002
84	ⅣA	P1283	東海系	捏鉢		11.8		底3/8	ロクロナデ、回転ケズリ	東海系捏鉢	P276-1	ⅣAP005
85	ⅣA	P1371	青磁	碗	16.1			口1/5	ロクロナデ、鎬蓮弁文	13C	P364-1	ⅣAP007
86	ⅣB	P1631	土師器	椀	12.8			口1/8	ロクロナデ		P624-1	ⅣBP001
87	ⅣC	溝20	青磁	Ⅲ		8.0		口1/4	回転ケズリ、削り出し高台	13C前半	溝4-1	ⅣA溝4-004
88	ⅣC	土433	青磁	碗		4.7		底1/4	回転ケズリ、削り出し高台		土222-1	ⅣC土坑002
89	ⅣC	土433	土製品						摩滅不明		土222-2	ⅣC土坑001
90	ⅣC	C区トレンチ	土師器	杯		6.3		底1/5	ロクロナデ、回転糸切		T-3	ⅣCT003
91	ⅣC	C区トレンチ	古瀬戸	卸皿		7.4		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面卸目		T-1	ⅣCT002
92	ⅣC	C区トレンチ	古瀬戸	瓶類				胴1/6	回転ケズリ、内面輪積み痕	灰釉	T-2	ⅣCT001
93	ⅣC	流路	灰釉	椀		6.5		底1/3	ロクロナデ、回転ケズリ		流路-1	ⅣC流路001
94	ⅣC	C区検	土師質	Ⅲ	9.9			口1/12	ヨコナデ		C検-2	ⅣC検出003
95	ⅣC	C区検	古瀬戸	卸皿	12.0			口1/8	ロクロナデ	古瀬戸前期（13C後半）	C検-1	ⅣC検出002

※番号の太字は縄文時代と古代、細字は中世に属するものを示す。
※種別の「土師質」は土師質土器、「須恵質」は在地系須恵質無釉陶器、「東海系」は東海系無釉陶器を示す。

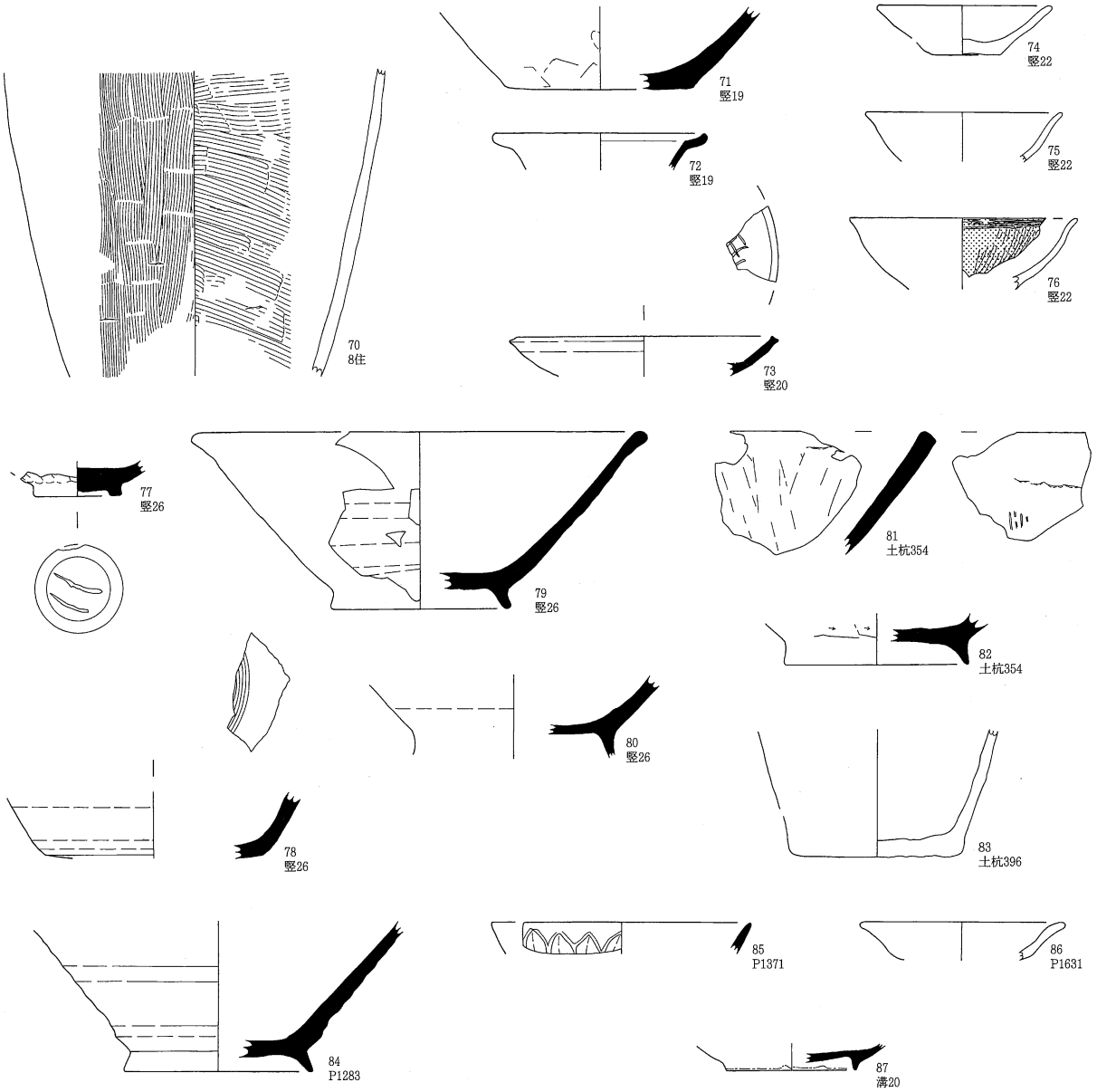

2A
2B
1
土杭46
2
溝3
3
自然流路
4
自然流路
5
表採
6
表採
7
5住
8
5住
9
5住
10
5住
11
5住
12
5住
13
5住
14
5住
15
5住
16
5住
17
土杭64
18
溝5
3A
19
6住
20
6住
21
6住
22
6住
23
6住
24
6住
25
6住
26
6住
27
6住
28
竪1
29
竪1
30
竪2
31
竪2
32
竪2
33
竪2
34
竪2
35
竪2
0
10cm

第31図　　土器・陶磁器（1）

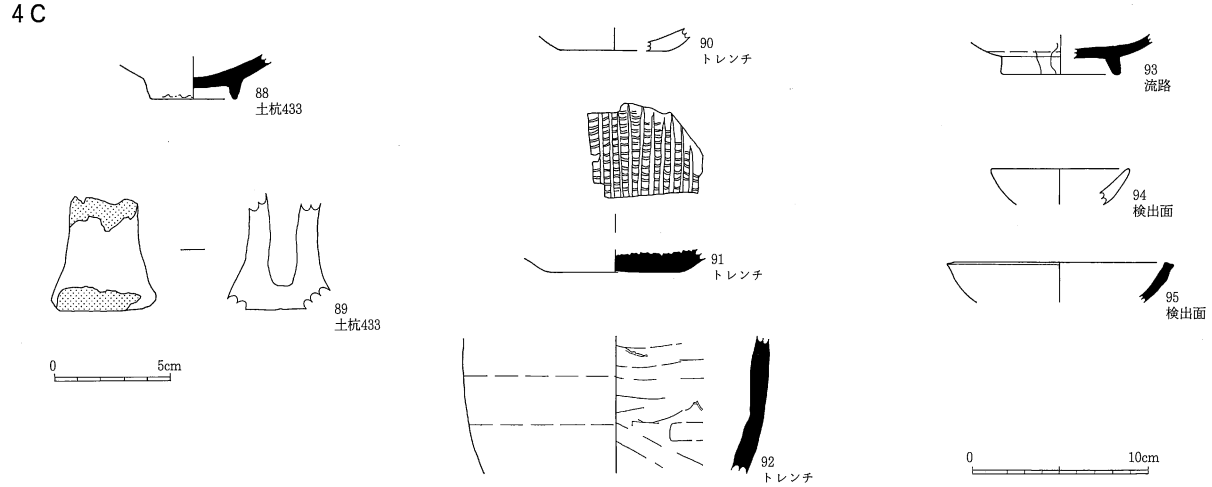

36
竪5
37
竪5
38
竪5
39
竪7
40
竪8
41
竪10
42
竪11
43
竪11
44
竪12
45
竪12
46
竪13
47
竪13
48
竪13
49
竪13
50
竪13
51
竪14
52
竪14
53
竪14
54
竪14
55
竪14
56
竪15
57
竪15
58
竪15
59
土杭79
60
土杭93
61
土杭93
62
土杭114
63
土杭117
64
P639
65
P830
66
溝4
67
溝15
68
検出面
69
検出面
0
10cm

第32図　土器・陶磁器（2）

4A・B



4C



第33図　土器・陶磁器（3）

2節　鉄器（34～36図）

第2～4次調査において、総計222点の鉄器が出土した。その内92点を図示し、実測外の126点を含め一覧表に計測値と所見を示した。以後、調査次順に器種ごとに述べていく。

なお、本遺跡の鉄器の特徴として、角釘の出土数が非常に多いことがあげられる。また、両端が失われた角棒状の鉄製品が多数出土している。これらも角釘の一部である可能性が高い。本文で触れられなかったものは一覧表を参照していただきたい。

角釘については塩尻市吉田川西遺跡の報告において、すでに頭部の形状の精緻な分類がおこなわれており、本稿においてもこれに従って分類を行った。

遺物の記載にあたっては図番号を使用しているが、実測図・拓本の掲載ができなかったものについては一覧表中の通番を使用し「No.数字」で記載している。

第2次調査（1～8）

15点が出土し、8点を図示した。

角釘　8点があり、4点を図示した。2は両端が欠損している。4は両端が欠損しているが、頭部の形状から角釘と判断した。6は先端部が欠損しているが頭部は基部上端を叩き延ばしその後に曲げられており、Ⅳ-a類に分類できる。8は頭部が残るが錆膨れのため分類ができない。

銭貨　2点出土している。5は自然流路から出土した元豊通寶（初鋳1078年）である。No.8は溝3から出土したものであるが、破片のため文字が読み取れない。

その他　1は端部に従って減幅しており、断面が四角形を呈している。器種の特定はできないが、片側には木質部が残存しており、柄と推定されることから工具の一種である可能性がある。7も同様な鉄製品の茎部の可能性が高い。3は鉄板を折り曲げてコ字状にしたものが2連結されているもので、用途は不明である。

第3次調査（1～55）

117点出土し55点を図示した。角釘・鏃・刀子・鋏・鎌・銭貨・鉄滓・その他がある。

角釘　釘として特定できるものが38点あり、破損で特定できないが釘の一部と考えられるものも数多く認められる。釘の頭部に注目すると、Ⅳ-a類（7・13・14・28・37・49・51・54）、上方斜めから叩かれたⅠ-b類（12・20・27・33・40・48）、基部中位を折り曲げたⅢ-b類（8）、基部上端に鑿を入れ叩き延ばし、先端部を丸く曲げたⅤ-b類（3・10・21・31・38・39・50・52）の4種が確認できる。吉田川西遺跡において、Ⅳ類は平安時代の中核をなすタイプであり、Ⅴ類は平安時代にもみられるが、Ⅳ類と置き換わって中世の中核をなしていったことが指摘されている。

鏃　形状から鏃と断定できるものは23・24である。23は柳刃状の鏃身部のみが残存しており、腸抉がない。24は三角形長頸鏃で、先端部と逆刺が欠損している。茎部は矢柄を装着するには短く、欠損の後に再加工された可能性がある。

刀子　2点ある。15は身部と茎部が確認できる。16は茎の大部分が欠損しているが身部と片関が確認できる。

鋏　竪14から1点出土している。25は和鋏の一方の刃部で、関が一部残っている。

鎌　竪14から1点出土している。26は鎌の刃部で、表面に植物質のものが付着している。

銭貨　8点出土し、5点を図示している。竪1出土のNo.5は天聖元寶（初鋳1023年）、竪7出土のNo.28は元豊通寶（初鋳1078年）である。竪11出土の咸淳元寶（17）は背文字が「元」あるいは「六」と読める。

また、竪14からは明道元寶（29）・祥符元寶（30）の2点が出土しており、ともに11世紀前半のものである。土128出土のNo.74破片で名称が特定できない。なお、47（景徳元寶）は溝からの出土である。他に遺構外から寛永通寶（55）が発見されている。

鉄滓　竪11から１点出土している（No.36）。重量は37.４ｇある。

その他　４は吉田川西遺跡から出土した鉄鐸の舌に類似しているが、先端が細くなる点が異なり、舌部と断定することはできない。

35・41・43は棒状を呈し、下半寄りに鏃の関箆被状の最大径を有する部分がある。しかし、35は頚部に相当する部分が上方に行くに従って幅広になっていること、41は逆に徐々に先細りになっている点で一般的な鏃と異なる。このことから工具の一種と考えられる。

５・44・45は角棒状のもので、両端部が尖っている。この内５は下部が茎状になっている。11は鏃の箆被～茎部の可能性もあるが、残存部位が少ないため不明である。34は角棒状でＪ字状に折れ曲がっている。42は銅製品で、簪状のものがＵ字状に折れ曲がっている。46は柳葉状であるが、断面が面取りなので鏃身部の可能性は少ない。53は遺構外でみつかったキセルの雁首で、火皿の部分が欠損している。

第４次調査（１～29）

90点の鉄器が出土し、29点を図示した。角釘・紡錘車・刀子・銭貨・鉄滓・その他がある。

角釘　角釘と認められるものは22点あり、またその可能性のある形状をもつものが13点ある。頭部の形状は、Ⅳ-ａ類（４・７・11・21・26・27）とⅤ-ｂ類（８・10・15・17）がみられる。その他にⅠ-ｂ類（14・19）と基部上端を両面から叩いて尖らせたⅡ-ｂ類の（５・13・20）が確認できる。

紡錘車　竪22から１点出土している。９は軸部両端が欠損しているが、紡輪が装着された状態で出土している。

刀子　１点出土している。28は関が不明であるが、身部～茎部の部分が認められる。

銭貨　竪19から天聖元寶（No.13）、竪24から皇宋元寶（No.39）の２点が出土している。両方とも初鋳年が11世紀前半である。

鉄滓　Ａ・Ｂ区の土456から１点（No.53）、Ｃ区検出面で３点（No.73・76・82）出土している。14ｇ～23ｇほどの重量である。

その他　１は両端が欠損しているが、片端が屈曲していることから、鍋などの把手（弦）の可能性がある。

２・３は竪19から出土した銅製品で、仏器の可能性が考えられる。２は口縁部で、３は非常に薄く、やや湾曲していることから胴部の可能性がある。なお竪19からは他に銅製品の破片が８点出土している。

23は角棒状で先端が尖っているが、角釘としては細長いことから不明とした。24は角棒状を呈し半円状に折れ曲がっており、両端は欠損している。29は銅製品で、横断面がカマボコ状になり長軸方向に緩やかに湾曲している。

なお、製品ではないが鉄塊が５点出土している（No.30・40・68・69・78）。10ｇ以下のものが主だが、竪25出土のNo.47は63.8ｇの重量がある。

＜参考文献＞　長野県埋蔵文化財センター1989「第７章第３節金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　吉田川西遺跡　本文編』

第12表　出土鉄器観察表

第２次調査

No.	図番号	地区	出土地点	出土地点２	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1		A区	4住	東	鉄	角釘？	(32.0)	(7.4)	(7.8)	3.6	角棒状　釘の胴部？
2		A区	4住	北西	鉄	角釘？	(41.4)	(7.9)	(9.4)	4.5	角棒状　釘の胴部？
3		A区	4住	北西	鉄	不明	(11.4)	(5.2)	(3.5)	0.4	鉄片
4	1	B区	土65		鉄	不明	(232.0)	(16.1)	(12.5)	71.3	柄の木質部が残る
5	2	B区	土66	覆土	鉄	角釘？	(32.0)	6.75	12.6	1.9	折れ曲がる
6		B区	畠址1		鉄	角釘？	(24.3)	(6.9)	(6.8)	1.6	角棒状 釘の胴部？
7		B区	畠址1		鉄	角釘？	(24.5)	(6.2)	(6.4)	1.6	角棒状 釘の胴部？
8		A区	溝3			銭貨	(16.9)	(7.2)	1.2	0.6	文字部分が残らず
9	3	B区	溝5	覆土	鉄	不明	(39.5)	27.2	14.2	14.0	字状の鉄板が２連結
10	4	A区	自然流路内		鉄	角釘	(24.2)	7.6	7.4	1.3	頭部やや破損、先端部欠損 Ⅴ－ａ類？
11	5	A区	自然流路	北西		銭貨	98.0	21.0	1.1	1.6	元豊通寶　北宋　初鋳1078年
12	6	A区	自然流路	北西	鉄	角釘	(32.5)	11.0	13.9	4.0	先端部欠損 Ⅳ－ａ類
13	7	A区	自然流路	北西	鉄	不明	(98.0)	10.3	10.5	13.4	両端部欠損　４と同様な形状
14	8	B区	遺構外遺構検出面		鉄	角釘	(57.5)	9.2	7.0	4.2	先端部欠損 錆により頭部の分類不能
15		B区	遺構外遺構検出面		鉄	不明	(22.1)	(46.8)	4.8	5.2	一方を剣先状にしている

第３次調査

No.	図番号	地区	出土地点	出土地点２	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1	1		竪1	覆土	鉄	角釘	(58.2)	9.1	5.9	3.8	先端部欠損　頭部分類不明
2	2		竪1		鉄	角釘	(59.8)	(7.5)	(6.8)	3.9	頭部欠損
3	3		竪1		鉄	角釘	60.0	9.7	7.5	5.6	完形　頭部分類Ⅴ－ｂ類
4			竪1		鉄	角釘	(54.5)	(5.1)	(3.9)	3.5	頭部欠損
5			竪1		銅	銭貨	24.6	24.6	1.2	1.9	天聖元寶　北宋　初鋳1023年
6			竪1	覆土	鉄	角釘？	(37.0)	(6.2)	(5.1)	1.8	角釘？ 頭部生きていそうだがび膨れで不明
7			竪1	覆土	鉄	不明	(13.7)	(6.8)	(6.3)	0.9	小破片
8	4		竪1		鉄	不明	57.7	11.4	6.0	4.5	鉄鐸の舌？
9			竪1		鉄	角釘？	(25.4)	(6.0)	(5.8)	1.9	角棒状　角釘の胴部？
10	5		竪1		鉄	不明	(90.0)	6.6	6.5	7.3	角棒状　下部が茎状
11			竪2	覆土	鉄	角釘	(22.2)	(4.6)	(4.2)	0.5	先端部
12			竪2	1層中	鉄	不明	(45.0)	(7.2)	(7.1)	3.8	角釘の胴部？
13			竪2	炭層中(南東)	鉄	不明	(23.2)	(5.1)	(4.9)	0.9	破片
14			竪2		鉄	角釘	(38.5)	(7.0)	(5.5)	2.0	頭部欠損
15	6		竪3		鉄	角釘	(65.0)	(8.8)	(7.6)	6.3	両端部欠損
16	7		竪4		鉄	角釘	(76.3)	13.4	19.4	24.0	先端部欠損角釘　Ⅳ－a類
17			竪4		鉄	角釘	(54.0)	(5.3)	(3.1)	1.6	両端部欠損
18	8		竪4		鉄	角釘	(27.7)	11.5	7.8	4.3	角釘 胴部・先端部欠損 Ⅲ－ｂ類？
19			竪4	覆土(南西)	鉄	角釘？	(29.9)	(5.3)	(5.2)	1.1	先端部？
20			竪4	覆土(北東)	鉄	不明	(44.4)	(11.3)	(7.3)	4.6	錆膨れで不明
21			竪4		鉄	不明	(26.1)	(7.3)	(6.4)	1.8	破片
22	9		竪5	覆土	鉄	角釘？	(59.5)	(7.5)	(6.2)	4.2	頭部欠損
23	10		竪5		鉄	角釘	78.0	7.5	6.3	4.6	完形　Ⅴ－ｂ類
24			竪5		鉄	角釘？	(38.1)	(8.4)	(11.1)	6.9	頭部？
25			竪5		鉄	不明	(19.9)	(8.5)	(6.4)	2.5	破片
26	11		竪5		鉄	不明	(55.9)	(7.7)	(7.7)	4.1	両端部欠損 鏃の箆被部？
27			竪5		鉄	不明	(33.4)	(7.2)	(5.5)	2.0	角棒状　端部丸い
28			竪7		銅	銭貨	24.5	23.5	1.3	2.2	元豊通寶　北宋　初鋳1078年
29	12		竪7		鉄	角釘	(54.5)	(5.9)	6.0	2.9	先端欠損　Ⅰ－ｂ類
30			竪7		鉄	不明	(23.6)	(3.1)	(3.6)	0.6	破片
31			竪10	覆土	鉄	角釘？	(34.1)	(7.5)	(5.9)	3.4	角棒状　釘の胴部？
32	13		竪11		鉄	角釘	(73.5)	10.1	10.0	5.6	先端部欠損 Ⅳ－ａ類？
33	14		竪11		鉄	釘	(71.0)	8.2	10.4	6.1	先端部欠損 Ⅳ－a類？
34	15		竪11	覆土	鉄	刀子	(182.0)	18.5	6.6	3.5	ほぼ完形　中途で屈曲している
35	16		竪11		鉄	刀子	(153.5)	(20.4)	(7.1)	35.3	身部および茎の一部 錆膨れが激しい
36			竪11	覆土	鉄	滓	35.4	31.4	26.9	37.4	鉄滓
37	17		竪11	覆土	銅	銭貨	23.9	23.7	1.4	2.5	咸淳元寶　南宋　初鋳1265年

No.	図番号	地区	出土地点	出土地点２	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
38			竪12	覆土	鉄	角釘？	(43.1)	(5.4)	(4.7)	3.1	角棒状　胴部～先端部？
39			竪12	覆土	鉄	角釘？	(36.4)	(5.6)	(7.1)	2.9	棒状　先端部？
40	18		竪13		鉄	角釘	(65.6)	6.9	4.7	3.3	先端部欠損 頭部が叩かれ曲がっている
41	19		竪13		鉄	角釘	(87.7)	(6.9)	(6.4)	7.3	頭部欠損
42	20		竪13		鉄	角釘	(90.3)	12.5	10.6	15.9	先端部欠損　Ⅰ－ｂ類
43	21		竪13		鉄	角釘	(97.9)	10.3	11.1	11.4	先端部欠損　Ⅴ－ｂ類
44	22		竪13		鉄	角釘	(76.3)	10.9	9.9	8.9	両端部欠損 先端部折れ曲がる
45			竪13	覆土 南西	鉄	角釘？	(39.0)	(8.3)	(6.3)	2.7	頭部欠損？　錆膨れが激しい
46			竪13	覆土(北東)	銅	不明	(29.9)	(5.1)	(3.4)	1.1	断面長方形の細い棒状
47	23		竪14	覆土(北半)	鉄	鏃	(55.7)	23.8	8.7	18.8	柳葉状の鏃身部　腸抉なし
48	24		竪14		鉄	鏃	(97.0)	(26.8)	9.2	23.8	長頸三角形鏃 逆刺欠損 関箆被
49	25		竪14		鉄	ハサミ	(66.8)	(26.2)	(4.2)	6.3	和鋏
50	26		竪14		鉄	鎌	(131.6)	39.6	(6.0)	75.4	植物質のものが付着
51	27		竪14	覆土北半	鉄	角釘	(77.5)	10.5	7.1	7.2	頭部一部欠損　Ⅰ－ｂ類？
52	28		竪14		鉄	釘	(41.0)	5.5	6.8	3.6	先端部欠損 Ⅳ－ａ類
53	29		竪14		銅	銭貨	25.6	25.3	0.9	2.1	明道元寶　北宋　初鋳1032年
54	30		竪14		銅	銭貨	24.5	24.5	1.3	3.3	祥符元寶　北宋　初鋳1009年
55			竪14	覆土北半	鉄	不明	(46.2)	(6.9)	(8.2)	5.7	釘の一部？
56			竪14		鉄	不明	(43.7)	(13.3)	(4.9)	4.6	刀子の身部？　錆膨れが激しい
57			竪14		鉄	不明	(11.9)	(6.9)	(5.6)	0.8	破片
58			竪15	覆土	鉄	角釘	(47.9)	(6.8)	(4.7)	0.6	錆膨れが激しい
59	31		竪15		鉄	角釘	(92.0)	16.5	12.6	21.3	先端部欠損　Ⅴ－ｂ類
60			竪15		鉄	不明	(18.2)	(5.1)	(2.9)	0.4	破片
61			竪15		鉄	角釘？	(37.0)	(6.7)	(4.3)	2.0	頭部欠損？
62	32		竪17	覆土(北西)	鉄	角釘	(24.2)	5.3	5.9	1.9	両端部欠損
67	34		土73		鉄	不明	(65.8)	8.1	4.7	5.2	棒状　折れ曲がっている
64			土75	覆土 東半	鉄	不明	(15.6)	(4.1)	(4.2)	0.5	破片
65			土75		鉄	角釘？	(50.7)	(5.0)	(4.0)	3.3	細い角棒状　胴部～先端部？
66			土77	覆土	鉄	不明	(43.2)	(6.9)	(7.3)	5.5	棒状　頭部丸い
63	33		土79		鉄	角釘	(57.0)	9.1	10.8	7.1	先端部欠損　Ⅰ－ｂ類？
68			土114		鉄	不明	(28.0)	(7.9)	(5.0)	2.6	細い角棒が半円状に曲がる
69	35		土116		鉄	不明	144.3	13.1	10.6	32.1	工具？　ほぼ完形
70	36		土116		鉄	角釘	(126.0)	(8.6)	(8.8)	19.6	両端部欠損
71	37		土117		鉄	角釘	(87.0)	9.6	7.0	6.8	頭部から6cmほどで直角に曲がる先端部欠損 Ⅳ-a類?
72			土123		鉄	刀子	(24.3)	(9.0)	(3.3)	1.0	切先部分のみ
73	38		土124		鉄	角釘	(51.1)	6.1	8.8	2.6	先端部欠損　Ⅴ－ｂ類
74			土128		銅	銭貨	(17.2)	(8.8)	(1.2)	0.4	破片 銭の名称不明
75	39		土138	覆土	鉄	角釘	(52.4)	9.2	6.8	4.7	先端部欠損　Ⅴ－b類
76	40		土168	覆土(東半)	鉄	角釘	(48.2)	6.6	5.5	3.2	先端部欠損 頭部不明瞭　Ⅰ－b？
77	41		土168		鉄	不明	(161.0)	(12.5)	(12.2)	28.9	鏃の箆被～茎部？ 工具？
78			土172		鉄	不明	(31.0)	(6.2)	(4.0)	1.3	小さな棒片
79	42		土189		銅	不明	(123.0)	4.5	2.8	5.0	簪状 U字状に曲がっている
80	43		P389		鉄	不明	135.6	12.3	12.1	25.6	茎状の端部欠損 先端部は直刃 工具？
81			P465	覆土(南半)	鉄	不明	(21.8)	(7.2)	(4.0)	0.9	破片
82	44		P683		鉄	不明	(145.3)	8.0	6.5	11.0	両端部欠損
83	45		P812	覆土	鉄	不明	(122.6)	7.8	6.4	12.6	ほぼ完形 角棒の両端を尖らせている
85	46		溝4		鉄	不明	(43.1)	(23.0)	(5.5)	10.4	鏃（鏃身部）？
86	47		溝4		銅	銭貨	24.6	24.6	1.2	2.4	景徳元寶　北宋　初鋳1004年
87	48		溝15		鉄	角釘	65.5	7.3	7.9	9.6	完形　Ⅰ－ｂ類
88	49		溝15	覆土	鉄	角釘	62.2	10.0	7.3	6.0	先端部欠損 Ⅳ－ａ類？
89			溝15		鉄	不明	(27.0)	8.1	5.5	3.1	角状の細い棒が半円状に曲がる
90			溝15	覆土	鉄	角釘？	(25.5)	(5.3)	(4.5)	P	角棒状　胴部の一部？
91			溝15	覆土	鉄	角釘？	(15.8)	(9.1)	(7.3)	1.7	頭部？
92			溝16		鉄	角釘？	(24.2)	(5.3)	(6.5)	1.4	胴部の一部？
93			遺構外		鉄	不明	(51.6)	(15.1)	(4.9)	5.2	一端は尖らせてある
94			遺構外		鉄	不明	(22.2)	(6.1)	(5.2)	0.8	破片
95			遺構外		鉄	不明	(26.2)	(5.2)	(4.3)	1.1	破片

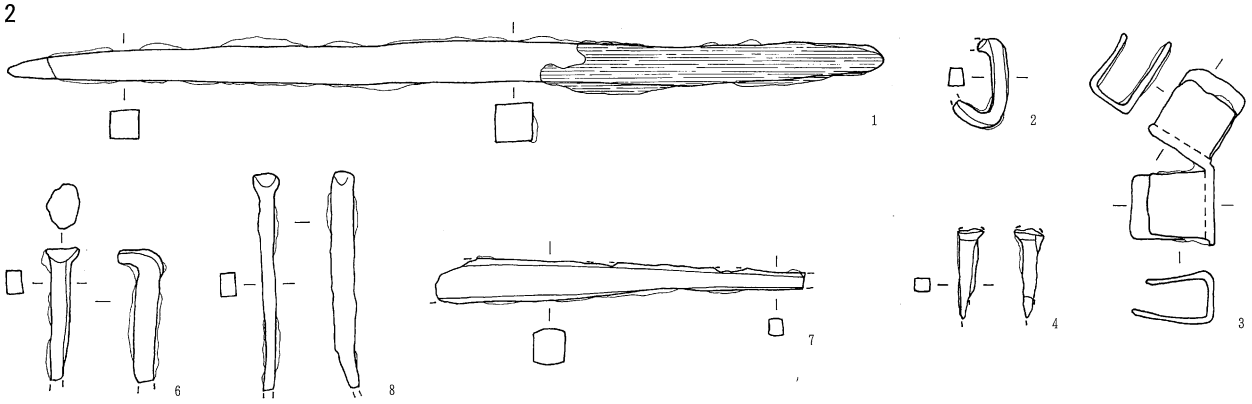
No.	図番号	地区	出土地点	出土地点2	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
96			遺構外		鉄	不明	(20.1)	(7.8)	(3.5)	1.1	破片
97			遺構外		鉄	不明	(32.0)	(5.2)	(4.2)	1.1	角棒状　角釘の一部？
98			遺構外		鉄	角釘	(41.0)	(5.5)	(7.0)	2.5	頭部
99			遺構外		鉄	不明	(22.5)	(7.5)	(5.5)	0.9	破片
100			遺構外		鉄	不明	(25.4)	(4.7)	(3.7)	1.1	細い角棒状　釘の一部？
101			遺構外		鉄	不明	(25.7)	(7.5)	(7.6)	2.1	破片
102			遺構外		鉄	不明	(6.8)	(5.2)	(3.0)	0.2	破片
103			遺構外		鉄	不明	(40.5)	(4.4)	(4.2)	1.9	角棒状　釘の一部？
104	50		遺構外		鉄	角釘	(25.9)	7.1	7.3	1.1	先端部欠損　Ⅴ－ｂ類？
105	51		遺構外		鉄	角釘	(22.7)	8.9	8.6	2.0	頭部～胴部　Ⅳ－a類
106	52		遺構外		鉄	角釘	(21.5)	4.9	3.7	0.4	頭部～胴部　Ⅴ－ｂ類
107	53		遺構外		銅	キセル	(51.1)	12.1	7.0	3.4	雁首　火皿が欠損
108			遺構外、排土中		鉄	角釘	(55.8)	(9.4)	(8.4)	6.7	胴部～先端部
109			遺構検出作業中		鉄	角釘	(34.5)	(5.9)	(7.8)	2.2	先端部
110			遺構検出面		鉄	角釘	(46.6)	(7.5)	(5.2)	3.7	胴部～先端部
111			遺構検出面		鉄	不明	(33.5)	(6.3)	(4.7)	1.7	棒状の破片
112			遺構検出面		鉄	不明	(25.8)	(6.7)	(5.5)	1.7	破片
113			排土		鉄	不明	(41.7)	(11.2)	(8.9)	5.7	角釘の頭部？　錆膨れが激しい
114	54		表土除去検出面		鉄	角釘	(77.6)	8.2	9.9	9.2	完形　Ⅳ－a類
115			表土除去検出面		鉄	不明	(45.2)	(22.1)	(6.1)	8.4	鉄板片
116			表土除去検出面		鉄	—	53.6	7.5	23.4	46.3	鉄塊
17	55		北東隅落ち込み地形		銅	銭貨	21.8	21.7	1.1	1.6	寛永通宝（古寛永）

第４次調査

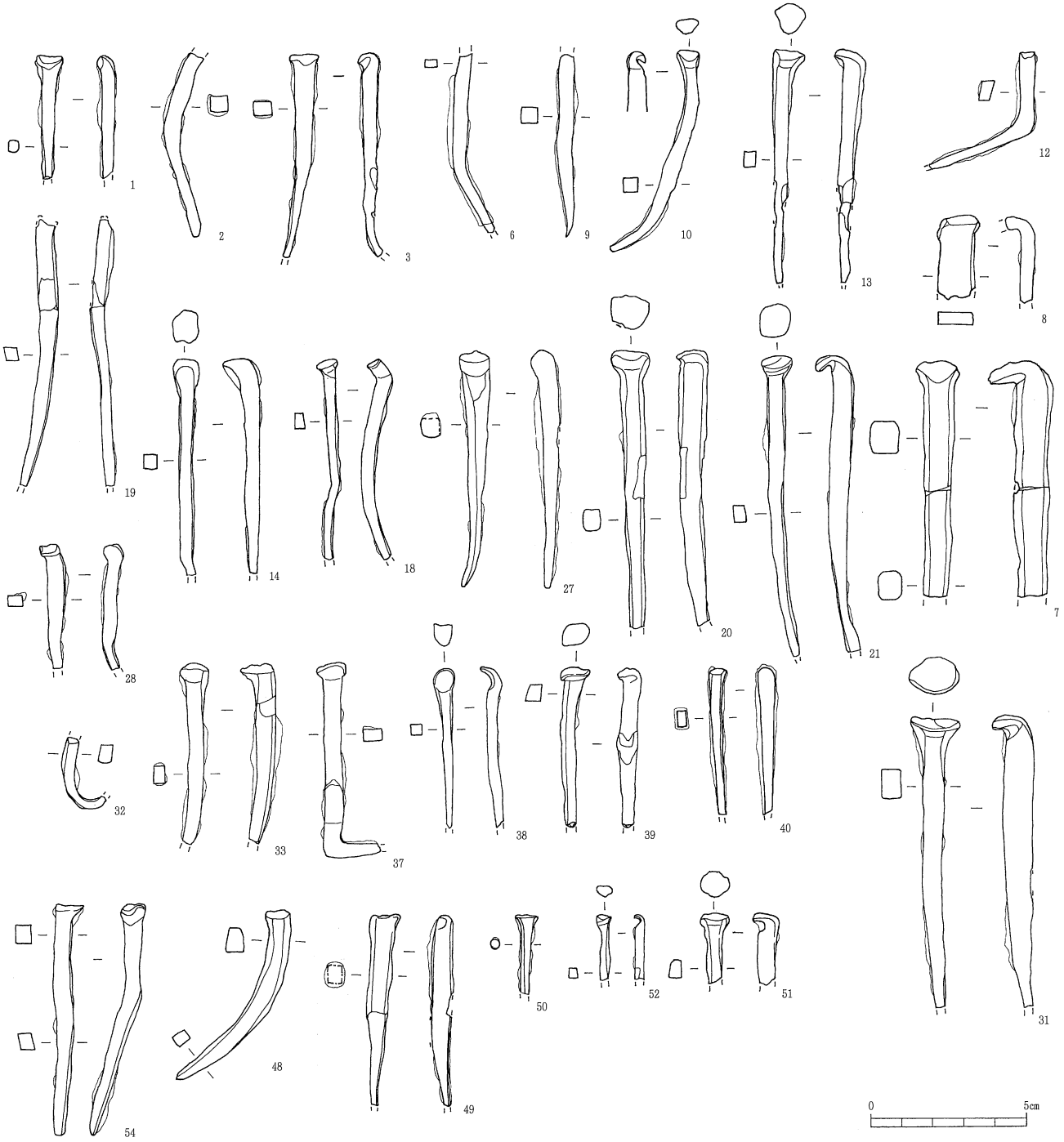
No.	図番号	地区	出土地点	出土地点2	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1		A･B区	11住		鉄	不明	(16.2)	(5.2)	(4.1)	0.5	棒状
2		A･B区	12住		鉄	不明	(21.5)	(16.1)	(5.1)	2.1	破片
3		A･B区	12住		鉄	不明	(30.2)	(8.0)	(3.3)	1.5	刀子の切先？
4		A･B区	竪19		鉄	不明	(95.2)	(8.2)	(7.2)	2.3	棒状
5		A･B区	竪19		鉄	不明	(41.6)	(25.0)	(3.3)	4.1	鎌の一部（先端）？
6		A･B区	竪19		鉄	角釘？	(54.4)	(8.4)	(8.4)	5.5	頭部？
7		A･B区	竪19		鉄	不明	(25.8)	(5.2)	(5.6)	1.3	角棒状
8	2	A･B区	竪19		銅	仏器？	(9.0)	(50.9)	3.3	8.2	銅製の食器の口縁部
9	3	A･B区	竪19		銅	仏器？	(48.3)	(30.0)	2.8	4.6	胴部？
10		A･B区	竪19		銅	不明	(6.2)	(5.6)	(2.7)	0.1	薄板状
11		A･B区	竪19		鉄	不明	(21.2)	(5.0)	(4.1)	1.0	細い棒状
12		A･B区	竪19		鉄	角釘？	41.0	6.0	5.9	2.3	胴部？
13		A･B区	竪19		銅	銭貨	25.4	25.3	2.1	2.1	天聖元寶　北宋　初鋳1023年
14		A･B区	竪19		鉄	不明	(33.6)	(25.7)	(5.5)	5.3	小破片
15	4	A･B区	竪19		鉄	角釘	(26.0)	8.6	12.0	3.1	胴部～先端部欠損　Ⅳ－a類
16		A･B区	竪19		鉄	不明	(27.0)	(6.5)	(5.2)	2.0	棒状
17	5	A･B区	竪19		鉄	角釘	(59.5)	7.8	7.2	5.7	頭部～基部　Ⅱ－b類？
18		A･B区	竪19		鉄	不明	(34.5)	(7.1)	(5.6)	2.7	棒状
19		A･B区	竪19		鉄	角釘？	(41.2)	(5.2)	(4.2)	1.6	角棒状　先端部？
20		A･B区	竪19		鉄	不明	(26.2)	(4.7)	(5.3)	1.4	棒状
21		A･B区	竪19		銅	不明	(6.7)	(6.3)	0.8	0.1	破片
22		A･B区	竪19		銅	不明	(7.9)	(4.1)	1.9	0.1	破片
23		A･B区	竪19		銅	不明	(7.2)	(4.3)	1.1	0.0	破片
24		A･B区	竪19		銅	不明	(5.7)	(4.8)	0.9	0.0	破片
25		A･B区	竪19		銅	不明	(4.5)	(3.4)	0.8	0.0	破片
26		A･B区	竪19		鉄	不明	(19.0)	(4.8)	(4.4)	0.7	棒状
27		A･B区	竪19	中心部	銅	不明	(9.2)	(6.1)	1.4	0.1	破片
28		A･B区	竪19	ベルト内	鉄	角釘？	(32.5)	(8.4)	(10.8)	2.5	頭部？
29		A･B区	竪19	ベルト内	鉄	不明	(26.7)	(8.2)	(5.8)	1.5	棒状
30		A･B区	竪20		鉄	—	17.0	13.0	11.1	3.9	鉄塊
31		A･B区	竪20		鉄	不明	(25.6)	(6.9)	(5.1)	1.3	棒状
32	6	A･B区	竪20		鉄	角釘	(31.0)	(6.8)	(7.2)	3.4	頭部・先端部欠損

No.	図番号	地区	出土地点	出土地点2	材質	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
33	7	A・B区	竪20		鉄	角釘	(32.2)	5.8	7.5	1.2	先端部欠損 Ⅳ－a類
34	8	A・B区	竪20		鉄	角釘	(48.0)	7.9	7.4	3.7	先端部欠損 Ⅴ－b類
35		A・B区	竪20		鉄	角釘？	(42.6)	(7.8)	(7.7)	3.6	棒状　胴部？
36		A・B区	竪22		鉄	不明	(25.9)	(5.0)	(4.7)	1.2	細い棒状
37	9	A・B区	竪22		鉄	紡錘車	(49.1)	44.7	34.7	28.3	軸部の両端欠損 紡輪部径(49.1mm)
38	10	A・B区	竪23		鉄	角釘	(58.5)	9.4	(8.5)	6.0	先端部欠損 Ⅴ－b類
39		C区	竪24		銅	銭貨	25.0	24.0	1.2	2.3	皇宋通寶　北宋 初鋳1038年
40		C区	竪25		鉄	—	71.0	54.0	19.4	63.8	鉄塊
41		A・B区	竪26		鉄	不明	(22.4)	(6.9)	(5.2)	1.2	棒状の破片
42		A・B区	竪26		鉄	角釘？	(36.5)	(7.5)	(6.2)	2.2	胴部～先端部？
43		A・B区	竪26		鉄	不明	(12.9)	(6.7)	(7.5)	1.0	破片
44		A・B区	竪26		鉄	不明	(13.3)	(7.3)	(4.8)	0.5	破片
45		A・B区	竪26		鉄	不明	(14.0)	(6.4)	(5.9)	0.5	棒状
46		A・B区	竪26		鉄	不明	(17.2)	(7.1)	(5.7)	0.6	棒
47	1	A・B区	竪26		鉄	不明	(310.1)	13.3	6.2	16.9	鍋などの把手？ 片端屈曲
48	11	A・B区	土327		鉄	角釘	(37.2)	6.5	7.4	2.0	先端部欠損 Ⅳ－a類
49	12	A・B区	土328		鉄	角釘	(56.2)	(8.2)	(8.0)	4.4	頭部欠損
50		A・B区	土356		鉄	不明	(17.0)	(4.3)	(4.5)	0.4	角棒状
51	13	A・B区	土435		鉄	角釘	(51.0)	6.7	7.8	4.3	先端部欠損 Ⅱ－b類
52	14	A・B区	土450		鉄	角釘	(32.4)	6.6	6.0	2.9	胴部～先端部欠損 Ⅰ－b類？
53		A・B区	土456		鉄	滓	42.4	26.4	14.5	14.7	鉄滓
54	15	A・B区	P1760		鉄	角釘	(24.5)	5.9	5.8	1.0	先端部欠損 Ⅴ－b類
55		A・B区	P1776		鉄	不明	(9.0)	(8.4)	(6.0)	0.8	破片
56		A・B区	P1782		鉄	不明	(16.5)	(5.3)	(3.4)	0.5	棒状
57	16	A・B区	溝20		鉄	角釘	(55.0)	(8.1)	(7.4)	5.3	両端部欠損
58	17	A・B区	溝20		鉄	角釘	(34.9)	7.3	6.4	3.4	先端部欠損 Ⅴ－b類
59		A・B区	溝20		鉄	不明	(11.7)	(3.6)	(3.0)	0.3	小さな棒状
60		A・B区	溝20		鉄	角釘？	(40.9)	(6.5)	(6.7)	2.7	胴部？
61		A・B区	溝20		鉄	角釘？	(41.0)	(8.4)	(7.5)	4.9	胴部？
62	18	A・B区	溝20		鉄	角釘？	(39.3)	(9.2)	(9.5)	4.7	胴部？
63	19	A・B区	溝20		鉄	角釘	(79.1)	11.9	7.7	10.4	先端部欠損 Ⅰ－b類
64	20	A・B区	溝20		鉄	角釘	(46.0)	6.1	4.8	2.7	先端部欠損 Ⅱ－b類
65	21	A・B区	溝20		鉄	角釘	(64.3)	8.9	9.4	5.7	先端部欠損 Ⅳ－a類
66		A・B区	溝20		鉄	角釘？	(38.8)	(8.1)	(6.3)	2.9	胴部？
67		A・B区	溝20		鉄	不明	(29.6)	(4.1)	(4.6)	0.9	細い棒状
68		A・B区	溝20		鉄	—	21.4	18.7	8.7	5.3	鉄塊
69		A・B区	溝20		鉄	—	21.6	17.2	10.6	7.7	鉄塊
70		A・B区	溝20		鉄	不明	(16.9)	(11.6)	(3.5)	1.6	破片
71	22	A・B区	溝20		鉄	角釘	(43.0)	(8.6)	(7.6)	1.9	頭部・先端部欠損
72	23	A・B区	溝23		鉄	不明	(25.0)	(4.9)	(4.8)	6.5	角棒状
73		C区	検出面		鉄	滓	33.5	28.0	21.1	23.6	鉄滓
74		C区	検出面	竪19付近	鉄	角釘？	(16.2)	(5.4)	(5.2)	0.4	角棒状
75		C区	検出面		鉄	角釘？	(38.8)	(9.1)	(9.3)	5.1	錆膨れが激しい
76		C区	検出面		鉄	滓	22.4	22.2	12.6	10.3	鉄滓
77		C区	検出面		鉄	不明	(32.0)	(5.0)	(4.5)	0.6	細い角棒状
78		C区	検出面		鉄	—	41.5	28.6	24.5	28.3	鉄塊
79		C区	検出面		鉄	不明	(27.8)	(23.6)	(7.9)	7.2	鉄板片
80	24	C区	検出面		鉄	不明	(35.4)	(27.4)	9.7	12.3	角棒状　半円状に湾曲
81		C区	検出面		鉄	角釘	(57.5)	(7.4)	(7.2)	5.3	頭部欠損
82		C区	検出面		鉄	滓	38.8	26.1	16.4	22.4	鉄滓
83		C区	検出面		鉄	角釘	(29.1)	(9.2)	(7.0)	2.9	棒状 頭部？ 錆膨れが激しい
84		C区	検出面		鉄	不明	(30.0)	(8.3)	(6.8)	3.0	棒状
85	25	C区	流路	覆土	鉄	角釘	57.6	8.6	7.0	4.3	両端部欠損
86	26	C区	流路	覆土	鉄	角釘	(48.7)	5.1	6.9	4.1	先端部欠損 Ⅳ－a類
87	27	C区	流路	覆土	鉄	角釘	(27.4)	4.7	4.9	0.6	先端部欠損 Ⅳ－a類
88	28	C区	流路	中央	鉄	刀子	(88.7)	21.6	11.2	28.8	錆膨れが激しい
89	29	C区	南トレンチ		銅	不明	(15.6)	34.8	2.5	6.5	装飾品？
90		C区			鉄	角釘？	(28.9)	(8.0)	(6.0)	2.3	先端部？

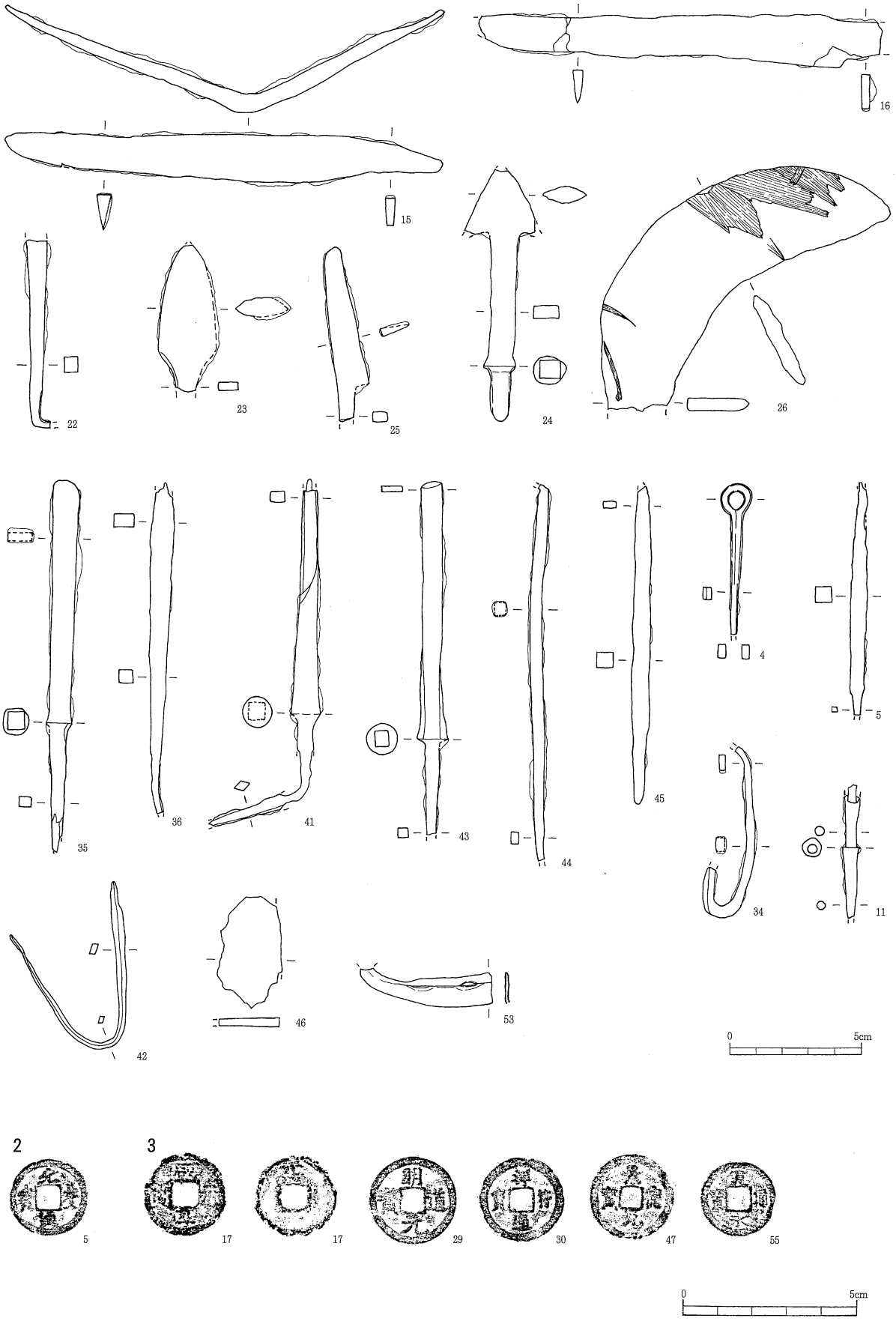
2



3

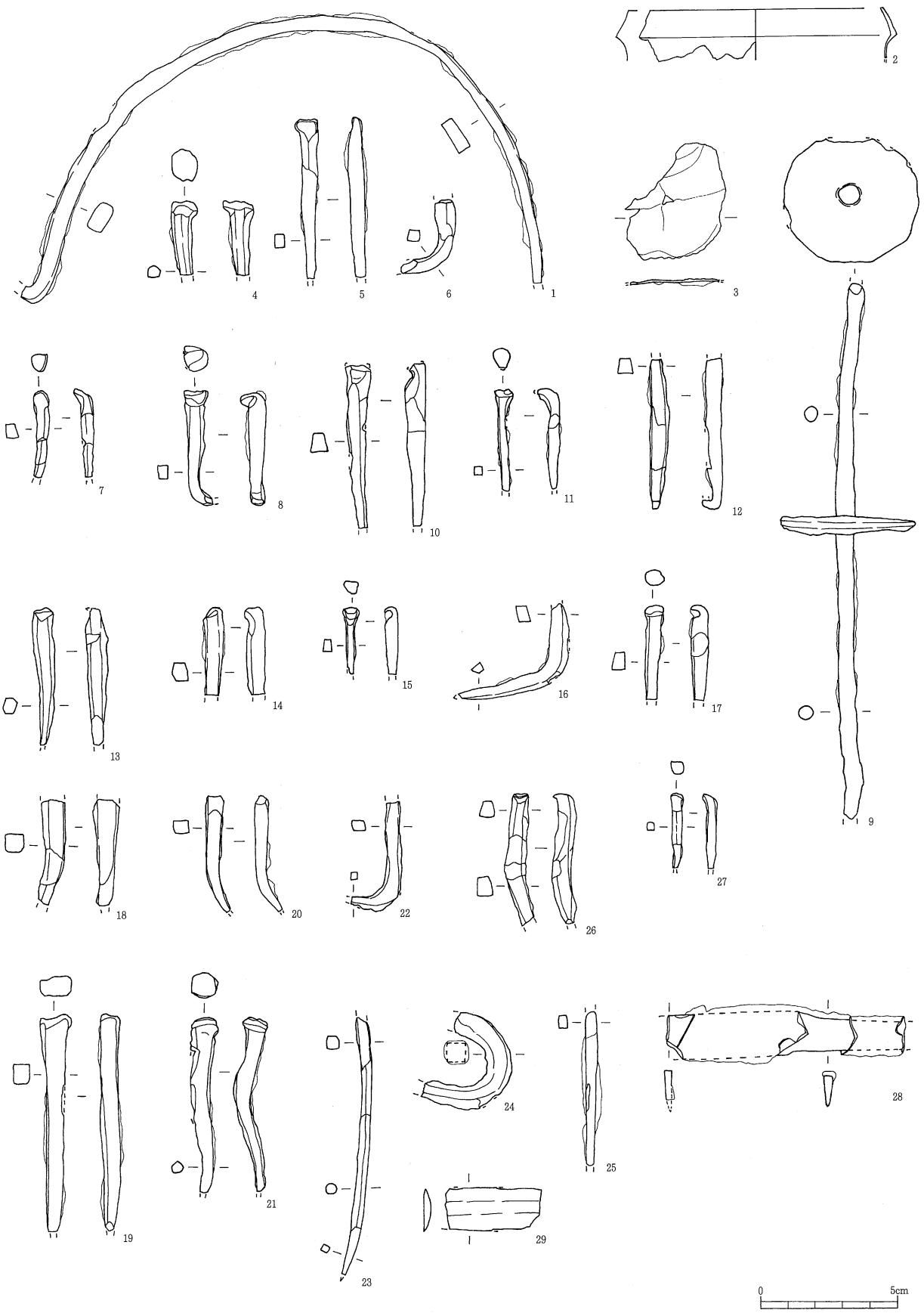


第34図　　鉄器（1）


16
15
22
23
25
24
26
35
36
41
43
44
45
4
5
34
11
42
46
53
0
5cm
2
3
5
17
17
29
30
47
55
0
5cm

第35図　　鉄器（2）

4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5cm

第36図　　鉄器（3）

第７章　調査のまとめ

高畑遺跡のある芳川地区は田川と奈良井川に挟まれた平地の上に存在する。一帯には両河川による洪積層が広く形成されており、このような河川と密接に関わりながら奈良･平安時代から中世にかけて隆盛をみる地域である。今回の高畑遺跡の調査では３ヵ年にわたり、約5,050㎡の範囲を調査したことになる。調査面積も総面積3,642㎡に及び、大規模な調査となった。調査においては奈良・平安時代～鎌倉時代を中心とした集落の痕跡が確認された。これらの遺構にはいくつかのまとまりが認められ、集落の中でもいく度かの画期があったことを窺わせている。

１）奈良時代：８世紀前半

５・６・８住、竪22、ピット1631などがこの時期にあたる。遺構密度は高くなく、今回検出された各遺構も広い範囲で散見していることから、範囲の広い集落の一端が検出されたものであると思われる。この時期に属する竪穴住居址は全て西側にカマドを有するため、調査地の東方に中心を持つ集落が考えられるであろう。また、６住から「美濃国」の刻印を持つ美濃須衛産須恵器が出土している。このような須恵器は松本市内で５例目の出土例となるものであり、当該期における共伴土器の年代観や集落の性格を推察する上で重要な資料となるであろう。

２）平安時代後期：10世紀～11世紀代

竪４などが該当する。該当遺構数が少数であるためこの時期の全体像を推定するには至らないが、先述の８世紀前半に属する遺構群の程近くに存在しているため、ほぼ同様の位置での集落の広がりは想定できるであろう。これらの遺構群は後に続く中世期での集落へ続いていくものであろう。

３）中世：11世紀後半～14世紀代

竪１・２・５・７・８・11・13・14・15・19・26、溝３・５・20、土64・79・93・114・117・354などで遺物の出土が確認された。この他今回の調査で確認された多くの遺構がこの時期に属すると思われる。すなわち、当該地域における集落の最盛期はこの時期になると言えるであろう。これらは調査地域全体に広く分布しており、大規模な集落の存在を想定できる。当該期の遺構群は特徴的なあり方を示しており、後述する遺構集中区もこの時期に該当する。調査地中央を縦断する溝やそれに直行する溝によってある程度の区画が成されており、これに沿った集落構造が看取できる。また、最も遺構が集中する調査地北西部では建４を中心とした遺構群が形成されている。この建物址は４×５間と市内最大級の規模を持つものであり、周囲の竪穴状遺構を含めてかなり大規模な施設の存在が窺える。周囲の遺構や溝の多くはこの建物址と軸方向が揃えられていることから考えても当該期における集落の中心的存在であったことは疑い様も無く、その規模から有力者の存在を想定することは十分可能であると思われる。

遺構集中区について

第３次調査西部に遺構が集中的に分布する箇所があり、特殊なあり方をしていたので仮にこれを遺構集中区と呼称し、一考を加えてみる事とする。

ア）遺構集中区の様相

第３次調査において特徴的に見られ、建４・竪１～９・11～16・土75・79・80・108・112・113・114・117・169とその周囲に集中する土坑･ピット･溝によって構成される。これらは大形の建物址である建４を中心として広がっており、そのあり方は大きく２つに分けられる。まず１つは建４の周囲に広がる竪穴状遺構群である。覆土上面では切り合い関係が把握できず、底面の段差により切り合いを設定していったが、遺構覆土の様相は酷似しており礫等も散在していることから、これらは同一の遺構である可能性が極めて高い。仮にこれが同一遺構であるならば建４の建物範囲と完全に一致することとなるため建４に関連する遺構であ

ると思われる。また、竪５・12は共に竪13を切る遺構としているが、これも覆土や礫の広がりから同一の遺構である可能性が高い。これら２つの竪穴状遺構は覆土中に多量の礫を持つ・建４の東西端に重なり、梁間のほぼ中心に位置しているという共通した特徴をもつ。建４の上屋構造が推定できないため確証はないが、入り口施設に関わるものであると考える。

残る遺構群は建４をコの字状に取り囲む竪穴状遺構・土坑群である。これらはおおよそ方形を呈しており建４と軸を同じくしながら周囲に並んでいる。このような事例は類例がないためどのような施設が存在したのか不明ではあるが、同じ間隔を空けて建４を取り囲んでいること、遺構間を埋めるようにピット群がみられることなどを考慮すると塀のように建４を取り囲む一連の施設の痕跡であった可能性が高いように思われる。なお、南部にはこのような遺構の列が２列想定できるため、若干位置を変えながら長期にわたってこのような施設が存続していたことが窺える。

イ）その他の遺構との関わり

当該期において遺構集中区の周辺に広がる遺構もこれと関連して営まれていた可能性が極めて高いと思われる。周辺に広がる遺構としてまず第一に注目すべきは溝址群のあり方であろう。本遺跡における溝址群は調査区北端に始まり竪穴状遺構10付近で屈曲し、南端まで縦断する溝・第３次調査地南東部から始まり縦断する溝に合流する溝・第２次調査Ｂ区南端を横断する溝の３つに大別することができる。これらは並行する溝間では切りあい関係が生じるものの、直交・合流する溝間には切り合い不明のものが多い傾向があるため、各々に若干の差異はあろうがほぼ同時期に存在していたと思われる。総じて若干の流水の痕跡が見られることや一部に人為的に構築された痕跡が認められることから、時期によって位置を変えながらそれぞれを合流させ、用水路として使用していたことが窺える。また、縦断する溝の東西では遺構の密度が異なることや当該時期の遺構の軸方向に沿っていることなどから考察すると、用水路として使用されていたと同時に区画としての意義のあったことが想定されるであろう。

さて、では仮にこの溝址群が区画溝という性格を有するとすれば遺構集中区以外の区画はどのようなものであったか。それを示すものとして第４次調査の様相が重要となるであろう。当該期における第４次調査遺構群は西部遺構集中区に比べて遺構数は極端に少ないことが分かる。用途不明のピット群を別とすれば遺構密度は高くなく、西に比べて閑散としているような印象を受ける。とはいえ遺構自体はやはり西部の遺構群に準じているものと思われ、竪19・20・23・26はほぼ同一方向を向いている。特に竪20・23・26は溝20に接するかのごとく近接しており、溝と密接な関わりを持ちながら営まれていたことは容易に想像できる。これら３つの遺構には総じて打ち欠かれた礫が詰められており、３～４ｍ程の方形を呈している。深さも60㎝以上と深い割には柱穴が見られないことから居住施設ではなく、作業場のような施設であったと思われる。これが示すように東部の区画は居住域とは考え難く、作業場や簡易な建物のような付属施設が配置されていたものと考えられるのではなかろうか。

また、少数ではあるが遺構集中区の南部には掘立柱建物址が数棟見られる。これらは総じて１×１間もしくは１×２間程の小規模なもので、やはり建４と同様の方向を示している。これらに伴う遺構がみられないため積極的には言えないが、倉庫のような簡易な建物であった可能性は考えられるであろう。この周辺はピットも多く、中世という時代ゆえに把握しきれていない建物址も存在している可能性は十分考えられるため、この周辺にこのような簡易な建物が多数存在していた可能性は高いであろう。

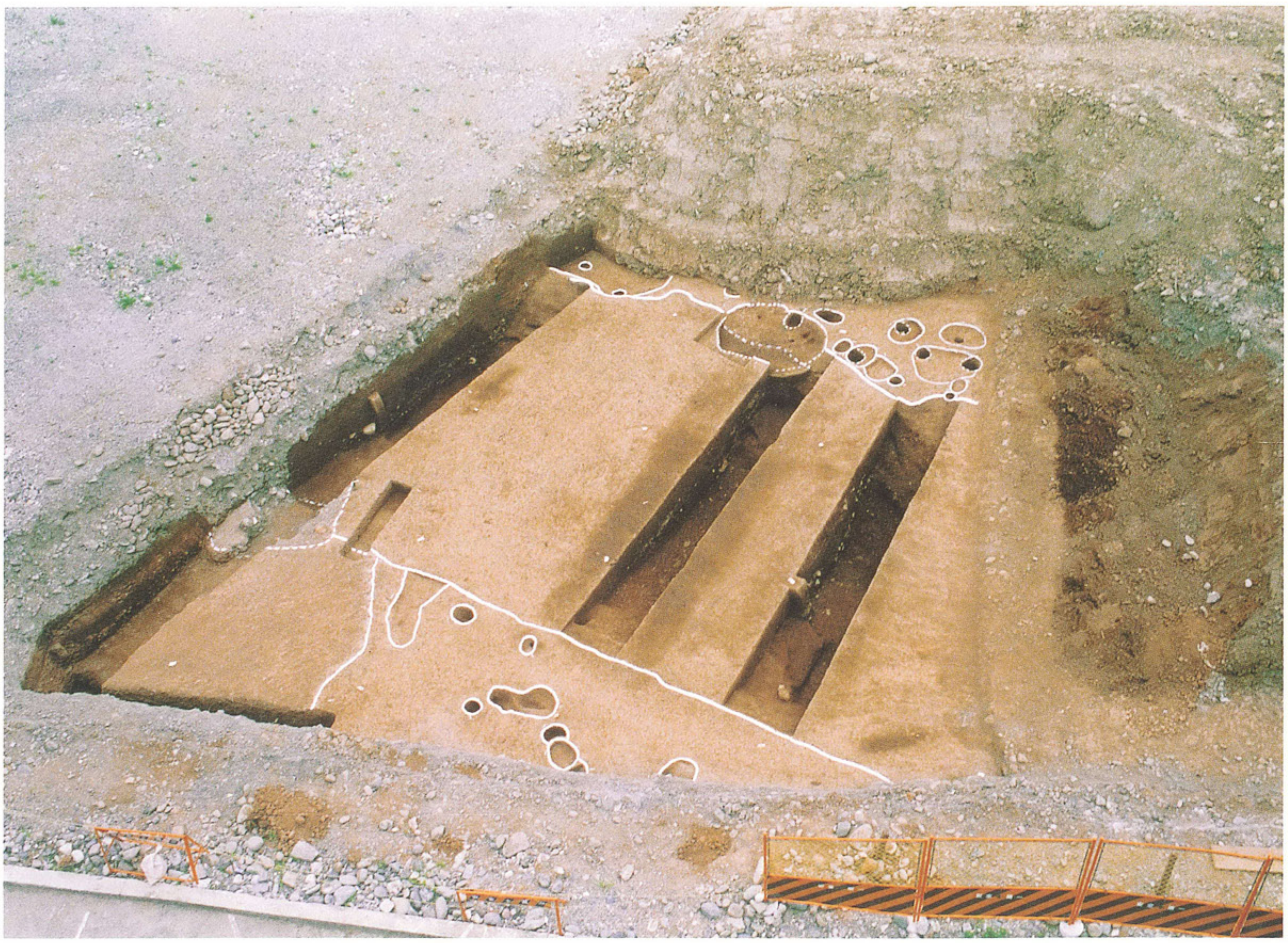
このような様相から大規模な用水によって区画された区域に従って、西に中心となる居住域、その南に掘立柱の建物群、東の区画には作業場のような施設が計画的に営まれている集落の一端が把握できると思われる。そのため今回の調査結果は周辺の小原遺跡、吉田川西遺跡などの調査結果と合わせて古代・中世の芳川地区の様相を考える上で非常に重要な資料となるであろう。

第37図　　調査地遺構配置図

写真図版

第２次調査Ａ区南東部全景（西から）

第２次調査Ａ区南西部全景（西から）



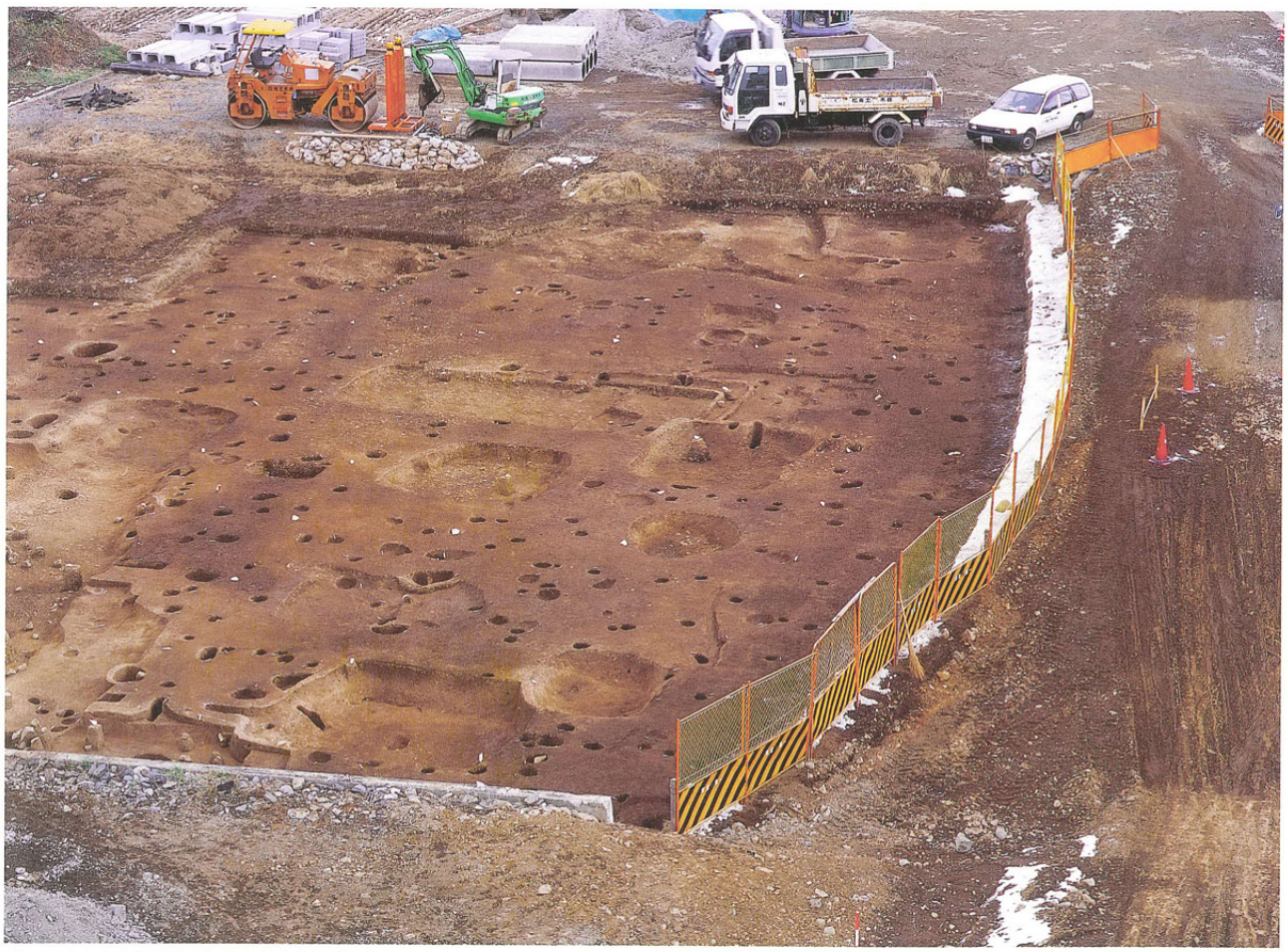
第２次調査Ａ区北西部全景（西から）

第２次調査Ｂ区全景（東から）

第３次調査南部全景（南から）

第３次調査地遠景（北西より望む）

第３次調査遺構集中区北部（西から）



第３次調査遺構集中区南部（西から）

第３次調査北部全景（北東から）

第３次調査Ａ・Ｂ区全景（西から）

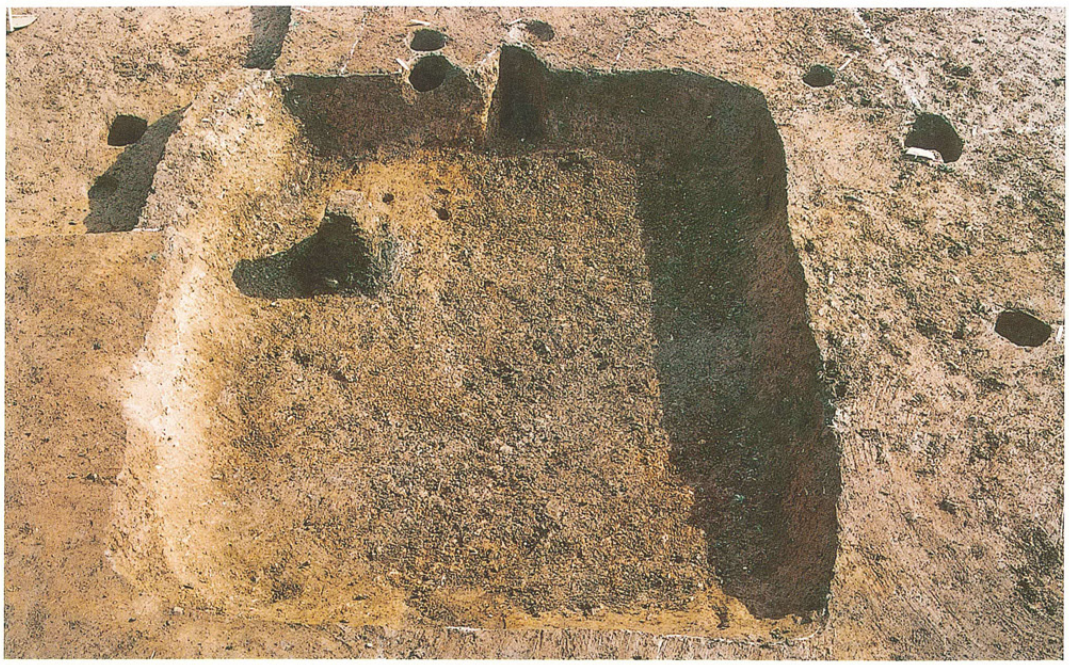
第４次調査Ａ・Ｂ区調査地遠景（南西より望む）

第４次調査Ｃ区全景（南西から）

5住　完掘状況
（東から）

5住　カマド
（東から）

竪2　炭化物出土状況
（西から）



竪２　完掘状況
（西から）

建３　完掘状況
（西から）

土117　遺構出土状況

竪 5　礫出土状況
（西から）

竪 9　礫出土状況
（北から）

竪26　礫出土状況
（東から）

竪2　完掘状況
（北から）

土456
ウマ歯列出土状況
（東から）

第5次調査
トレンチ2全景
（西から）

10

12

13

20

7

74

「美濃国」刻印

35

84

91

青磁・白磁

第 2 次調査出土鉄器

第 3 次調査角釘

第 3 次調査出土鉄器

第 4 次調査角釘

第 4 次調査出土鉄器

長野県松本市 高畑遺跡 第2・3・4・5次調査　発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　たかばたけいせき　だい2・3・4・5じ　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　高畑遺跡　第2・3・4・5次　発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.194
編著者名	竹内靖長、直井雅尚、宮島義和、小山貴広
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-0874　長野県松本市大手3-8-13（5F）　TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館　〒390-0823　松本市大字中山3738-1　TEL0263-86-4710)
発行年月日	2008(平成20)年3月24日（平成19年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかばたけ 高畑	ながのけんまつもとし 長野県松本市 おおあざよしかわむらい 大字芳川村井町 ばんち 928-2番他	20202	295	36° 10′ 54″	137° 57′ 53″	H15.4.24 ～ H17.9.22	第2～5次 調査 計3,642㎡	市道5513号線付け替え工事及び既存施設移転工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑 第2次調査	集落	奈良・平安 ～鎌倉	竪穴住居址 2 掘立柱建物址 2 溝 9 土坑 41 ピット 256	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、鉄製品、打製石斧	奈良・平安時代～鎌倉時代まで続く集落である。特に鎌倉期において隆盛をみており、溝による大規模な区画と大形建物址、それを囲む竪穴状遺構群などがみられた。
高畑 第3次調査	集落	奈良・平安 ～鎌倉	竪穴住居址 1 竪穴状遺構 18 掘立柱建物址 2 溝 6 土坑 139 ピット 631	土師器、須恵器、土師質土器、須恵質陶器、鉄製品、銭貨、砥石	
高畑 第4次調査	集落	奈良・平安 ～鎌倉	竪穴住居址 6 竪穴状遺構 7 溝 9 土坑 246 ピット 800	土師器、須恵器、土師質土器、須恵質陶器、東海系無釉陶器、青磁、白磁、鉄製品、縄文土器	

松本市文化財調査報告　No.194

長野県松本市

高畑遺跡　第2・3・4・5次

— 発掘調査報告書 —

発行日　平成20年3月24日
発行者　松本市教育委員会
〒390-0873　長野県松本市大手3-8-13（5F）
印刷　株式会社 プラルト